

第1回東京国際映画祭協賛イベント

PFF'85

ぴあ

THE 8th PIA FILM FESTIVAL
IN TOKYO



フィルムセンター図書室



218000195

FF
1308
195

第8回ぴあフィルムフェスティバル1985 定価600円

撮るも撮ったり261本 VS 揃いも揃った43人

いまだ現役、史上最大のカツドウ屋 明日を担はん、若きフィルムメーカー

CONTENTS

PFF'85 TIME TABLE 4

一般公募部門入選作品 Off-Theater Cinema '85

審査経過 & 最終審査レポート 6
 審査講評 7
 入選作品紹介 11
 イみてーしょん、インテリあ。(PFF16 ミリ映画 制作援助作品) 15
 応募作品リスト760本 16

海外招待作品 International Young Cinema '85

上映にあたって (日比野幸子 & 来日監督インタビュー) 20
 ナンバーワン (イギリス) 21
 ホテルの女 (カナダ) 21
 よろこびの神祕 (フィリピン) 22
 ゴトラングラー (ユーゴスラビア) 22
 風櫃から来た人 (台湾) 23
 アゲインスト・グレイン (オーストラリア) 23
 寡婦の舞 (韓国) 24
 ビジル (ニュージーランド) 24
 渡河 (インド) 25
 フランツの自由 (西ドイツ) 25

'84年全米学生映画祭入賞作品 FOCUS '84

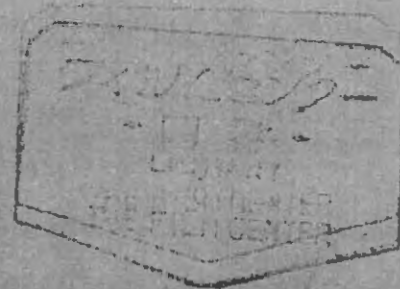
FOCUS'84に寄せて & 受賞リスト 26
 小犬/金環/想い出のチャーリー/命中率%
 マイナーリーグ物語 26-28

国内招待作品 Japanese Young Cinema

邦画ニューウェイヴの軌跡 (松田政男) 29
 ドレミファ娘の血は騒ぐ/暗くなるまで待て
 ない/ユキがロックを棄てた夏/風たちの
 午後/狂い咲きサンダーロード/天使のはら
 わた・赤い淫画/の・ようなもの/闇のカー
 ニバル/痴漢電車・百恵のお尻/パン屋襲撃
 /100%の女の子/変態家族・兄貴の嫁さん/
 見えない/パラダイスビュー/みんなあげち
 ゃう♥ 32-34

マキノ雅裕・映画渡世 Retrospective, Masahiro Makino

マキノ雅裕を語る (岡本喜八) 36
 マキノ雅裕に聞く (野村梓) 38
 マキノ雅裕・プロフィール 40
 浪人街 (第1話+第2話) / 實録忠臣蔵 / 福
 公父子・櫻井の訣別 / 雷電 / 血煙高田馬場 / 恋
 山彦 / 彌次喜多道中記 / 鴛鴦歌合戦 / 昨日消
 えた男 / 幽霊魂に死す / 織田信長 / 阿片戦争
 / ハワイの夜 / 江戸っ子繁昌記 / 浪人街 / 仇
 討崇禅寺馬場 / 人生とんぼ返り / 玄海遊俠伝
 破れかぶれ / 日本俠客伝 / 関東篇 / 昭和残俠
 伝・死んで貰います / 次郎長三國志・第1部
 ~第5部 / 関東篇一家 41-45
 マキノ雅裕・フィルモグラフィ 46



主催/ぴあ 共催/PARCO

● Special Thanks to

亜東関係協会東京弁事處
 中華民国行政院新聞局
 インド大使館
 DIRECTORATE OF FILM FESTIVALS
 EXPERIMENTAL CINEMA OF THE PHILIPPINES
 オーストラリア大使館
 豪日交流基金
 AUSTRALIAN FILM COMMISSION
 カナダ・ケベック州政府在日事務所
 Telem Film Canada
 ニュージーランド大使館
 NEW ZEALAND FILM COMMISSION
 NEW ZEALAND-JAPAN FOUNDATION
 発見の会
 プリテッシュ・カウンシル
 ユーゴスラビア大使館
 JUGOSLAVIJA FILM

● 特別企画

協力/日本映画製作者連盟
 松竹 東宝 東映
 にっかつ 大映 国際放映
 企画協力/スタジオジブリ
 無声映画鑑賞会
 株式会社マツダ映画社

協力/エルモ
 東洋現像所

父と子が

映えて画に

七拾七年

マキノ雅裕



(表紙)26年、「修羅八荒」出演中のマキノ雅裕
 (上)14年、満4歳頃のマキノ雅裕

TIME TABLE

●全プログラム入替制

①=日本語字幕付、②=英語字幕付

THEATER	西武劇場		SPACE PART3	
	1:00PM	6:30PM	1:00PM	6:30PM
5/31 (FRI)	6:30PM~オープニング企画 〈マキノサイレントムービーシアター映画も私も子供だった頃〉 浪人街(第1話+第2話) 實録忠臣蔵 雷電 橋公父子・櫻井の訣別 ※他にイベントあり			
6/1 (SAT)	映画渡世・マキノ雅裕 血煙高田馬場 恋山彦	映画渡世・マキノ雅裕 彌次喜多道中記 鷺鷥歌合戦	海外招待作品 ナンバーワン ホテルの女 ①	海外招待作品 よろこびの神秘 ② ストラングラー ②
2 (SUN)	映画渡世・マキノ雅裕 昨日消えた男 幽霊院に死す	映画渡世・マキノ雅裕 織田信長 阿片戦争	海外招待作品 風櫃から来た人 ② アゲインスト・グレイン ② 全米学生映画祭入賞作品 FOCUS'84	海外招待作品 幕場の舞 ② ビジル ②
3 (MON)	映画渡世・マキノ雅裕 ハワイの夜 江戸っ子繁昌記	映画渡世・マキノ雅裕 浪人街 仇討崇徳寺馬場	海外招待作品 よろこびの神秘 ② ストラングラー ②	海外招待作品 渡河 ② フランスの自由 ②
4 (TUE)	映画渡世・マキノ雅裕 人生とんぼ返り 玄海遊俠伝・破れかぶれ	映画渡世・マキノ雅裕 日本侠客伝・関東篇 昭和遊俠伝・死んで貰います	海外招待作品 渡河 ② フランスの自由 ②	海外招待作品 風櫃から来た人 ② アゲインスト・グレイン ②
5 (WED)	国内招待作品 暗くなるまで待てない/ ユキがロックを棄てた夏 狂い咲きサンダーロード	国内招待作品 ドレミファ娘の血は騒ぐ (プレミア上映)	海外招待作品 幕場の舞 ② ビジル ②	海外招待作品 ナンバーワン ホテルの女 ②
6 (THU)	国内招待作品 天使のはらわた・赤い淫面 痴漢電車・百恵のお尻 変態家族・兄貴の嫁さん	国内招待作品 の・ようなもの みんなあげちゃう♥	一般公募入選作品 Aプログラム	一般公募入選作品 Bプログラム
7 (FRI)	国内招待作品 闇のカーニバル 風たちの午後	国内招待作品 100%の女の子 パン屋襲撃 見えない パラダイスビュー	一般公募入選作品 Cプログラム	一般公募入選作品 Aプログラム
8 (SAT)	10:30AM~スペシャル企画 〈ネバーエンディングマキノ雅裕 映えて書いて、あの世まで〉 次郎長三國志・第1部~第5部 関東耕桜一家 ※他にイベントあり		一般公募入選作品 Bプログラム	一般公募入選作品 Cプログラム
9 (SUN)			PFF16ミ制作援助作品 イみてーしょん、インテリあ。	

●一般公募入選作品の各プログラム

Aプログラム

「吊首森太郎の青春」
「こっぴどにーず・ガール」
「変形作品第2巻」
「はなされるGANG」

Bプログラム

「時を駆ける症状」
「The message from subway」
「END、END」
「曇珠沙羅」
「ヒッチハイク・ブレイク」
「無水の泉」
「高校生映画」

Cプログラム

「狂った触角」
「家、回帰」
「下駄」
「うしろあたま」

※「映画渡世・マキノ雅裕」は、連日各回ともマキノ監督とゲストによるイベントあり。

※5月31日後のオープニング企画は、「活弁ライブ上映」
出演●藤森美水/澤登翠/松田春恵
演奏●和洋楽団・アンサンブル想い出
ザ・金鶴

※6月6日(休) 1:00PMの回は、18歳未満入場不可。

一般公募部門入選作品

OFF-THEATER CINEMA '85

審査経過&最終審査レポート

審査経過

'84年11月7日 <立会審査開始>

●より直接的なコミュニケーションを図るため、新しい試みとして、応募者の立会による審査上映を実施。39作品が持ちこまれ、ほしのあきら、大久保賢一の両氏が審査に当たった。

'84年12月10日 <作品応募締切>

●この日だけで400本以上の応募があり、総数はPFF史上最多の784本となる。(その後、取り消し等があり最終応募数は760本。内16%は9本)

'85年1月7日 <第一次審査開始>

●760本、合計約320時間を大久保、ほしの、日比野幸子の3氏に、PFF事務局より西村隆を加えた4人に、一人約80時間ずつを振り分け、第二次審査にかかる100時間分の選出に入る。

'85年2月14日 <第一次審査会議>

●各審査員が作品リストを提出。100時間余りの第一次審査通過作品196本が決定する。内24本(13時間半)は立会審査に持ち込まれた作品。

'85年2月18日 <第二次審査開始>

●大久保、ほしの、日比野の3氏に、田中未知(初参加)、長崎俊一、松田政男の3氏が加わり、100時間のフィルムマラソンに突入する。この中から、約20時間の最終審査にかかる作品が選出されることになる。

'85年3月28日 <第二次審査会議>

●6名の審査員が各自のプログラムを提出し、作品が重複した場合は討議により調整を行い、一人当たり約3時間半の6つのプログラムが決定される。

'85年4月15日 <最終審査開始>

●先の6名に、石井聰互、大島渚、大森一樹、長谷川和彦、松本俊夫の各氏を加えた11名(大林宣彦氏は撮影のため時間の調整がつかず辞退)が、二次通過の37本(約21時間)の中からPFF'85で上映する約10時間のプログラム選出にかかる。

'85年4月23日 <最終審査会議>

最終審査会議

総数760本と過去最高の応募となったPFF'85一般公募部門の作品審査は、昨年11月より応募者立会審査が始まり、約半年をかけた審査上映の後、4月23日に開かれた最終審査会議をもって今年度のフェスティバル上映作品が決定した。

上映作品の決定については、例年どおり、まず各審査員のベストワン作品を投票、その後上映時間枠の10時間に満たない場合は、上映作品追加の審議を行なうという方法をとった。

最初の投票の結果は次のとおりである。

- 石井聰互……………「うしろあたま」
- 大久保賢一……………「はなされるGANG」
- 大島 渚……………「時を駆ける症状」
- 大森一樹……………「END、END」
- 田中未知……………「高校生映画」
- 長崎俊一……………「うしろあたま」
- 長谷川和彦……………「うしろあたま」
- 日比野幸子……………「高校生映画」
- ほしのあきら……………「狂った触角」
- 松田政男……………「にっぽにーず・がーる」
- 松本俊夫……………「変形作品第2番」

推薦が重なった作品についての審議がもたれ、「高校生映画」については日比野氏が「曼珠沙華」に変更したが、「うしろあたま」については3氏とも変更の意思のないことを表明、そこで次に追加作品の審議に移った。

その結果、共同推薦作品として追加されたものは次のとおりである。

- 「家、回帰」●「下駄」●「吊首森太郎の青春」
- 「ヒッチハイク・ブレイク」●「無水の泉」(推薦者は各作品の紹介欄を参照)

その他、上映作品には選ばれなかったが審議の対象となったのは以下の作品である。

- 「バービーはキャッツ♥アイ!?!」●「流行目日記」
- 「RIYOURI」●「ろんぐ・ろんぐ・あごう」



(上)左から大久保、田中、石井、長崎、ほしの、松本、大島、長谷川、大森の各審査員。欄外に松田審査員がいる。

審査講評

推薦作品/うしろあたま

ゴダール映画の方法論や日記映画の方法論が8ミリ映画として作りやすいのはわかる。が、こうまで多いと正直うんざりだ。もちろん、そのスタイルが悪いというのではない。そのスタイルを借りながらも、観たえのある作品もあったし、安易な模倣、甘え、独りよがり、引用のタレ流しが逆説的に映画に成り得ている作品もあった。成功はしていないとも過激な実験精神が意識を混沌、混沌の彼方へ追いやった作品もあった。だが、多くの作品は、己れのテーマ、己れの映画に真正面から立ち向う勇氣のなさ、力のなさを方法論に逃げる事で、誤魔化しているように感じる。そんな中途半端な作品がスクリーンに跳梁する2次審査通過作品中、一番面白かったのは、浮ついた方法論や、背のびした観念に逃げることなく、演出の巧みさと、オーソドックスな技術の確かさで、124分の時間を観せきつたストロング・スタイルの「うしろあたま」だった。



石井聰互

映画監督

この作品には8ミリであること、アマチュアであること、個人映画であることの甘えはない。そのかわりに、原作の持つすぐれたイメージと、生身の役者さん達と、他のスタッフとの格闘を続けた果てに、自分のテーマと映像を、何とかスクリーンに結実させようとする確固たる意志がある。覚醒した意志で、対象との緊張関係を保ち、批判と探究を持続しつつ、表現を信じ疑い糊かせ抑制しなければならぬ。アイデアの煌々や、イメージの飛翔は一瞬の油断でただの光と影とノイズに拡散してしまうのだ。「うしろあたま」の長いワンショットのラストシーンに、その困難な問題に取り組む作者の気迫を観る。

同様の理由で「はなされるGANG」も観たえがあった。「気狂いピエロ」のスタイルを借りているのは、まったく嫌だが、それを超える①映像の高い醸成度と②役者の魅力がある。斎藤久志、諏訪敦彦、もっとやれ!

推薦作品/はなされるGANG

あらかじめ想定されている結末へ、想定された通りに運ばれていくといった類の作品を、このPFFで見たとは思わない。会社のつくる映画やTV映画の縮小再生産はなしにしようではないか。

今、何を撮ろうとしているのか、何故それなのか、何故このフィルム・サイズなのか、何故このカメラなのか。「何を撮る」ごう自問するとき、誰もがその場に立ちすくまざるを得ないだろう。

氾濫する映像の中へ、新たに映像の一片を投げ入れようとするとき、君はどのようにそれに署名しようとするのか。何よりもまず、君自身にとって、それがかけがえのない映像であるのかどうか。

しかし、無論、この問いはカメラを手にし、フィルムを回していく中で問われるものだ。撮ってしまった「絵」と自分のイメージ、「映画」と自分との距離をどう見ていくのか。絶えず繰り返されるこの問いかけの中からしか、



大久保賢一

映画評論家

自分にとってかけがえのない映像は生まれないだろう。答はどこにも存在しない。映画は問いかけの中にしか姿を現わさない。

誰もが「自由」へと向かおうとする。しかし、カメラを手にした君が、今ここでとらわれている「不自由」の中からは、そこへ向かう道は開けない。その「不自由さ」を見つめ続け、絶えず道をさぐることでしか、君の映像は世界を開いていかぬし、世界へと開いていかぬだろう。

「はなされるGANG」という作品は、撮ろうとする自分、描かれようとするドラマ、語られようとする物語を不断に問い直そうとする作者の姿勢、その志をくつきりとうつし出した作品だ。見る者は、登場人物によって、またつづられる映像によって問い返される「ドラマ」への問いかけこそ、この場で生まれつつある一本の映画であることを知るようになる。この作品の映像の輝きは、そこから生まれるものなのだ。

推薦作品/時を駆ける症状 The message from subway

自分が存在するということは他者に確認されて成り立つことなのか、それとも自分が存在しようとする意識することによって決定されることなのか、というすこぶる重い問いが「時を駆ける症状」の中で発せられた時、私は『ぴあ』の試写室の暗やみの中で思わず「それはちがうんだなあ、両方とも!」と叫んでしまい、隣りにいた松本俊夫の失笑を買ってしまった。

ところが、あとになって考えると、その時どんな答えを私自身用意していたのかさっぱりわからないのだ。しかし私はこういう重い問いをまことに軽やかなスタイルで発する若者がとても好きだ。そのスタイルはほとんどミュージック・ビデオのそれである。

「うしろあたま」の長まわしから発せられる少女たちの生の実感もまた重い問いとして私に迫るものがあった。「吊首森太郎の青春」は「時駆け」のミュージック・ビデオに対し劇画のセンスというべきか、感覚のほとば



大島 渚

映画監督

しりの緩急の呼吸がすばらしかった。それにしてもこういう気持の悪い題名をどうしてつけるんだらう。「変形作品第2番」、「バービーはキャッツ♥アイ!?!」、「トリゴラス」の技術と努力は感動的だったが、私は「下駄」の切迫した気合と「RIYOURI」の喜びに弾む躍動性により強く魅かれた。「流行目日記」のやや病的な感覚も貴重なもののひとつである。

「DONO-VAN」と「はなされるGANG」の監督の力量、技術は大変なものであるが、そのことがむしろ作品の訴求力を弱めているともいえる。また「高校生映画」が今回の最大の問題作であることも確かである。それにしてもどうしてこうゴダールのあからさまな模倣が多いのか。聞けば去年はじめて「気狂いピエロ」を見た若者たちなのだそうだが、模倣そのものは必ずしも悪くないとして、なぜゴダールを模倣するのかという問いを自らに発しつつ映画をつくってほしいと思う。

推薦作品／END、END

最近ある本の中で「10年後になくなっていくもの」が列挙してあって、その一つに8ミリが挙げられているのを見た時、やっぱりなという納得と、いやそんなことはないという反撥が半分づつ同居した奇妙な思いになったことがある。8ミリのハードウェアつまり、8ミリカメラ、映写機は、確かにホームビデオの普及により、産業としては確実に大幅な縮小をしいられた。しかし、だからといって8ミリ映画がなくなるとは思わない。8ミリ映画は10年後も絶対に残っているはずだ。ただ、どんなものでも残るかといえば、ある種の。8ミリ映画しか残らないだろうという予感はある。どういふ8ミリ映画が残ってゆき、どういふ8ミリ映画が消えていくか——そんなことを思いながら今年を見た。

いささか独善的だが、自分の判断できる範囲で10年後も残っているだろうと思う8ミリ映画のタイプはいくつか発見できた。「家、帰帰」「カイエ・デ・ボク」時を駆け



大森一樹

映画監督

る症状「trip」「トリゴラス」「波動」「流行目録」「ヒッチハイク・ブレイク」「変形作品第2番」「RIYOUJI」……そして最後に残ったのが、「吊首森太郎の青春」「END、END」「にっぽにーず・がー」の3本。どれか1本ということで「END、END」にした。「吊首森太郎の青春」は、その繊細な画面と内容にもかかわらず、へそ曲がりなタイトルをつけたところがどうも気に入らなかった（タイトルだって作品の大切な一部だ）。「にっぽにーず・がー」は、その長さ故、見送った（10年後残るだろう8ミリ映画は、きっと短編になっているという、僕の予想です）。最後になったが、何年か前に地方の上映会で知り合った人たちの作品——「狂った触角」「さばみそ楽園の崩壊」「吊首森太郎の青春」に出会えたことは、大きな喜びでした。まず繰り返す意志がなければ、10年後の8ミリ映画なんてなくなるに決まっているのだから——。

推薦作品／高校生映画

——「パッション」と名のるべきではなかったのに「パッション」と名のらなかつたのはいが「高校生映画」と名のるべきではないのに「高校生映画」という名を名のってしまった映画——それが「高校生映画」である。これを観た私の思いは、この映画の中に無数に内包された「問い」に単純に驚かされた。

だが作者の意図はそこになかったと推測する。映画の中で、観客の目に止まらぬ素早さで通過していった手書きの「問い」たちは、たぶん映画狂の作者にとっては「問い」ではなしにあたりまえの「答」だったに違いない。私はたまたま辻堂史君と話す機会を得た。多くの話に渡って語り及んだ印象では、彼と私の間に常に「問い」と「答」の差違が中広く最後まで横たわっていた。

二次審査上映後のシンポジウムの観客席でこの「高校生映画」をめぐる討議が交わされた。反対派の意見は「これらのことはすでにゴダールがやっているし黒沢清



田中未知

作曲家・個人映画作家

や山川直人の引用にすぎない」と強調する。だが、私は思う。引用によってカラーージュする創造性も又、方法のひとつではないか！ 引用は創造の基本的原理であり、人間のさまざまな行動の原理でもある。人間の認識というのは雑音(全ての情報)から成立しており、それの介入によって創造性はレヴェルアップされる。映画の主題を考察することは、映画の解釈がどのように「行為化」されるべきかを論じることだ。映画は多くの未知の組合せを宿す。そこに求めるものは作者であり、観客である。いまここに、多くのことばが「答」だからこそかくそうとした作者と、「問い」として目に焼き付いたからこそさかす感動にひたった私の、(それは「かくす」と「さかす」の両義性にのっとった)かくれんぼ遊びがこの「高校生映画」を媒介として成立したことを知ってほしい。そんな「偶然性」の出会いを組織してしまう程の飛翔した映画だと感じている。

推薦作品／うしろあたま

「うしろあたま」には、出演者に対する演出の目がくつきりとある。出演者からいかに生々とした表情や仕度や台詞を引き出すかに相当な工夫と集中力をもって挑んでいる。そのことが、とても新鮮だった。そして、力のある映像を産んでいる。高校から大学に渡る一人の女の子の何気ない日常を、観念的な面からではなく、肉体的に、ああ確かに一人の人間が生きてるなあと思得できるように、シンプルなストーリーで、なお劇的に見せてくれる。しかし、後半は僕ももっと驚かされた。主人公の女の子と行きずりの男の子のキスシーンの終りに、「カット」という作者の声が入る。そこから、環を切ったように作者の決して映らない姿が、映画にどんとせり上ってくるのだ。大学祭をぶらぶら歩く主人公を狙う遠望レンズに、主人公がかつての高校時代の友人と再会するシーンの突然の出演者達の生活の浮上に切羽つまったように表現されているのは、主人公を演じる女性と作者との距離である。つまり現実を生きる作者と物語、いや映画との距離である。そして、作者と主人公を演じる女性が直に対面する感動的なラストになるのだが、そこでは前半で作者が懸命に積み上げたドラマが粉々になり、ある映画を作ろうと思い、作る中で何かに出会い、どうしようもなくその何かを語らなくなっていく作者のドキュメンタリー、いや作者のドラマを我々は見たと気付かされるのだ。この映画には映画をまるごと生きようとする作者の姿勢がある。しかも、言葉ではなく、映像そのものの力で表現されていて、僕は出会えて良かったと思った。8ミリ映画か映画かどうかはよくわからない所がある。しかし、映画の背後に確たる私があるかなんかろうが、表現したいと思ってしまった私と8ミリ映画は結びついていく。そこに8ミリ映画の輝きも可能性も苦痛もあるのではないかと。軽かろうが重かろうがそんなことを体現している8ミリ映画に出会い感動したい。



長崎俊一

映画監督

推薦作品／うしろあたま

全体的には低調な年だったように思う。大昔の悪しき大学映研映画群の中に迷いこんだような、砂を噛むような睡魔におそわれてへキエキしたのは私だけではない。借りものの言語、借りものの観念、借りものの映像を未消化のままにただ羅列しただけの作品なんか誰も観たことはない。意味ありげなナレーションでたらたら能書めかす頭でっかち足元ふらふら映画には、眠気を通りこして怒りすら感じた。

そんな駄作愚作の中にあつて「うしろあたま」が圧倒的に光っていた。この作品の素晴らしいのは、まずはその地に足の着いた適確な描写力にある。ディテールの正しきリアリズムがいかに映画に不可欠なものであるかをこの作品は教えてくれる。5分、10分のカメラ掘えばなしの長廻しカットは、長いが故に尊いのではない。明らかに芝居であり虚構であり「ウソ」。であるはずの画面をじつとみつめているうちに、いつの間にか我々は「映画の真



長谷川和彦

映画監督

実」の中にいる。最も素朴で最も本質的な映画体験を、斎藤久志は一切の軽薄な小細工を排した筆致で我々に与えてくれた。過去と現在を描き分ける色調と文体の違いにも細かい神経が行きとどいている。特に一番苦勞したであろう「かつて」と「今」の接点部分の亀裂からは、作者の抑えきれない呻き声が聞こえてくる感があつて、実に魅力的であった。「超現在」とも思えるラストシーンの赤色フィルター使用にも異和感はない。全篇が適確な映画技術に支えられてあることはもちろん立派なことだが、それにも増してこの作品を「映画」にしているのは、作者の人間に対する「想い」の誠実さだと思ふ。技術技法先行型の映画が氾濫する中で、「想い」が形式や技術をリードしている貴重な1本であった。

推薦作品／曼珠沙華

ここ数年来、私は、10代の人々の作った作品群に魅せられている。彼らの作った映画が、結果として「高校生映画」と呼ばれるようになったことについては、彼らの側からの「物言い」もあった。その俊敏さこそ10代の特権だ。映画を撮る撮らないにかかわらず、人生の早い時期に立ち止まってものを考えようとする行為があつてこそ、「待たるべき映画」の登場も信じられるというものだ。知る人ぞ知る樋口尚文「ゲリラになろうとした男」79や寺田裕之「終」80、そして小林浩道「あまぎらふ」81や利剛剛「教訓I」81の持っていた眼差しの意味もそれだ。昨秋、私は、これら若過ぎる旅立ちをした作家たちと再会したことによって、今年現れた辻堂史さんの「高校生映画」に強い衝撃を受けた。「旅」という肉体的思考を経て映画の魂に行き着くことを切望した原将人さんの8時間の8ミリ「初国知所之天皇」73から10数年後の今、再び膨大な書物を死に物狂いで駆け抜けることによって映画の扉をたたこ



日比野幸子

映画評論家

うとした少年が出現したのである。「高校生映画」はその全映画空間を引用によって埋めつくし、片言隻語的語法によって観る者のイメージなしでは完結しない映画に仕上っている。こうした作品はコンクールという場にまぎれ込んだのがまちがいで、本来、屹立して存在することがその価値を際立たせる種類の映画なのだろう。審査投票の結果、「高校生映画」は田中未知氏も評価されることとなり、私は「曼珠沙華」の推薦に回ることにした。「曼珠沙華」は弱冠15歳という年令を映す美しい映画だ。その一言にすべてが尽きる。かくして「時を駆ける症状」「END、END」を加える4作品が10代作家の作品として残った。同世代の方、ぜひご覧を。さて番外メモリアルシネマを少し。あゆらぎ、うみふみ月、片腕、クレノコレメ、トリックスターの八月、NOTHING、1/2の情事、マジカル、まばたきブック、幻への疾走、45度線上の幻想。男優賞は「漂流者たち」の高木陽一、女優賞は「はなされるGANG」の伊藤理恵に。

推薦作品／狂った触角

土という材質が象徴性のみで捉えられるのではなく、他では置き換えられないものとして一瞬毎に衝突し合う「変形作品第2番」と、字幕が語るドラマ映像以上の世界を喚起し続け、木の幹を叩く手に心がしめつけられる「吊首森太郎の青春」も私のプログラムから残り、審査は終わった。全体を引上げるべき突出した作品にはついに出会えなかったが、幻想でしかない映画の形式を自分なりに破壊しようとする作品の増加に、映画が変革していく手応えを覚えた。世界で最も自由な映画達は、観客を育てながら、眠りこける我々の意識を量として観ようとしている。注意せよ。

2年前、シャッターを押すことに畏敬の念を抱かない作品の増加を認め、映画と楽に付き合えると同じだけ別の難しいものが立ち現われてくることに気付くと警告したが、「狂った触角」はまさにそのひとつの答えだ。自分だけの映画を撮りたいという熱い想いがシナリオを捨て



ほしのあきら

映像作家

させ、そのギリギリの集中が風景から予感を発見している。その手触りでまたカメラを持つという行為を繰り返す一人称の語りには乱暴だがむしろ、上手さと訣別する代りにカメラの自由さを手に入れ、息遣いがそのまま伝わる奇妙で力強い流れを生んでいる。現代のカメラを持った男は、現実を再構成するよりも現実に入り込むことに熱中し、怠惰な日常を撃つばかりか日常的時間のたらしなさを客観視と擬体体験を同時にさせることでラストの狂気を共有させてしまう。

それは「家、帰帰」や「下駄」がメッセージしようとしているのと同じ質の、自分の思い通りに決してならない存在に対するラジカルな挑戦という自己表明だ。他人の思惑を考えず、自分だけの映画に向かうことで他人とつながろうとする彼等を今後も支持したい。ストーリーや言葉に苦勞せず、イメージが十分に練られていない映画はもう見たくない。

推薦作品／につぼにーず・がーる

故・花田清輝の不肖の弟子と自称するゆえに、私としてはタカのしれた個のオリジナリティよりも集団の運動性をこそ重視して、最終審査ではいささかもためらわずに「につぼにーず・がーる」を推し、さらに「吊首姦太郎の青春」の共同推薦に加わることとした。共に仙台在住の作者たちによる集団的労作で、現地発行のミニコミ紙「きー」の、で時おり目にする名前にもせよ、映画そのものを見たのは今回がむろん初めてである。

とりわけ、集団の運動性が運動する集団性へと転化する瞬間のみを捉え取った「につぼにーず…」が私には素晴らしい。これを単に「プスガ走り回っている」と見るヤツは、たとえなせか一瞬すり変わる映画館の看板にさえ込められた映画への熱いオマージュを読み取りえない「目の不自由な人」だ。「吊首…」の不敵な寺山修司ぶりもさることながら、「家、回帰」「下駄」などがめざす完成度への方向よりも、未完のまま走りつづける運動量



松田政男

映画評論家

の大きさに私は賭けたい。
そこへ行くと「さばみそ楽園の崩壊」は『座して食らう。身ぶりにおいて運動量が低下するのを如何ともし難く、何かと論議的となった「高校生映画」もまた運動性と遊戯性を取り違えながら個のオリジナリティに凝り固まってしまふ危険性がある。遊戯性を誇示するには「ろんぐ・ろんぐ・あごう」の「少女」作家のように、大胆にしてイノセントな目が必要ではないのか、秀才の辻君。予想外だったのは、私が積極的に推しつづけた早大シネ研勢をも含めて大学映研の諸君がほぼ全滅したことで、長い長いモラトリアムを終えたのちに諸君が「学生」作家としてに再生しようのか、私の心は早くも来年年度へと飛んでいる。最後にひそかに告白しておくならば、その病理の深さといたまさきゆえに私が偏愛してやまなかった「時を駆ける症状」を、大島渚氏が推してくれたのは有難かった。まさにわが意を得た想いである。

推薦作品／変形作品第2番

第二次審査を通過した作品に関するかぎり、今年はずより全体的に充実していたというか僕の印象だ。ちなみに僕がマークした作品をあげると、二重丸が黒坂圭太の「変形作品第2番」、斎藤久志の「うしろあたま」、クマガイコウキの「吊首姦太郎の青春」、武吉伸治の「ヒッチハイク・ブレイク」、丸が平野勝之の「狂った触角」、須田和博の「END、END」、諏訪敦彦の「はなされるGANG」、石井秀人の「家、回帰」、法藍紅美の「まい子のほんの昔のちよとした朝食」である。

結局僕が選んだ推薦作品は黒坂圭太の「変形作品第2番」だったが、これはたかさんの砂礫や壁の写真を、約4万3千コマにも及ぶコマ撮りで撮影した実験映画（あるいは実験アニメーション）で、被写体の微視的なマッチエールの面白さと、それがぶつかり合ったり溶け合ったりしながらくりひろげる変容のリズムを、繊細な感性とダイナミックな力動感で、力強く構成している異色の野



松本俊夫

映像作家

心作だったと言わなければならない。僕が感心したのは、この作品が「筋も人間ドラマもない一種の抽象映画でありながら、その緻密で張りつめた構成が、全く飽きさせることなく人の眼を30分も釘づけにするだけの魅力的なパワーをはらんでいたことである。そこには作者の確かな造形感覚とひたむきな創造のエネルギーが脈打っていた。
PFFの応募作品には、こういう実験映画やドキュメンタリーものたぐいが例年少ない。その意味ではもっと多様な中がほしいし、本当はこれまでも誰も発想しなかったような映画に出会いたいものだとも思う。たしかに映画のつくり方は毎年うまくなっているが、あいかわらず類型的なものやひと真似の域を出ないものが多いのは考へものだ。僕たちが何よりも新人に期待するものは、映画に対する新しい考へ方と新しい感性だということをお忘れしないでほしい。

推薦作品／

今年「さびしんぼう」のキャンペーンと「彼のオートバイ、彼女の島」「わんぱく時代」「姉妹坂」の3本の映画のロケハン、シナリオ・ハンティングのため、東京にいる期間が少なく、作品を見る時間がどうしてもとれなかった。やむを得ぬこととはいえ、新しい映画と出会うチャンスを失ってしまったことを、とても残念に思っている。

そのため、今回はここで審査講評を書くことはできないので、それにかわって主催者より、応募者の人々へのメッセージを求められた。ただ、応募者へのメッセージといっても、これまで私は、審査員と出品者という立場での出会いを期待してきたのではない。それよりも、こちらが作品を作っている立場として、同じ作り手という仲間としての出会いを期待しているわけだ。

そして肝要なのは、今という時代は作り手に対して、自分の映画を映画の歴史と伝統に参加させるための自覚



大林宣彦

映画監督

と責任を要求している、ということではないだろうか。
たとえば、ビデオという新しい映像メディアが登場してきたが、その際映画にかかわるものは、フィルムとビデオのメディアとしての違いを作品作りに反映させなければならない。例えばフィルムはロマンティストのメディアといえるだろうし、ビデオはリアリストのメディアだといえるだろう。つまり、そこに自分の言葉を探し出さなければならないのだ。
考えてみれば、PFFに参加することになって、さまざまな出会いを経験してきた。今聞あきよし君や手塚真君は今、新しい映画を作っているし、山川直人君や長崎俊一君の作品が海外の映画祭で評価を得ていることも聞いている。
新しい映画も、今や完全に市民権を得たといっている。それゆえにこそ、映画の歴史と伝統に責任をもつことが、今という時代に必要なのだと思う。

入選作品紹介

ツシクビカンタロウ 吊首姦太郎の青春

Aプロ 共同推薦/石井、大島、大森、長谷川、ほしの、松田、松本



クマガイコウキ KOKI KUMAGAI

□スタッフ・キャスト
製作・脚本・監督……………クマガイコウキ
撮影……………クマガイコウキ/高橋里実
出演……………栗原千波留
三浦 茂
84年・8ミリ・カラー・35分

くまがい こうき
①'61年9月24日、宮城
②会社員
③「獄中記」(81)「或る情景」(83)「息をする魔人」(83)
④いがらしみきお、マキノ雅裕、寺山修司の各師。御面。
⑤約6万円、約5ヶ月
⑥薄幸な芸妓だった母が、死の間際に舞った「虫の音」を私が泣きながら撮ったというのが本当のキッカケです。
⑦冗談抜きで判りません。

□解説・ストーリー
私は高校一年まで青森に住んでいた。白いブラウスの少女、依亜子との思い出。転校して久しぶりに、私は青森にやって来た。依亜子に電話する。「どうして私の事思い出したの。」字幕による会話とステルと実写によって、私の切ない青春物語が綴られる。コマ伸ばし、特殊フィルター等の実験的手法を随所に用いたのが実は本当のキッカケです。瑞々しい映像と、抒情的な音楽が心地よく浸透してくる。

につぼにーず・がーる

Aプロ 推薦/松田政男



常本塚招 TAKUAKI TSUNEMOTO

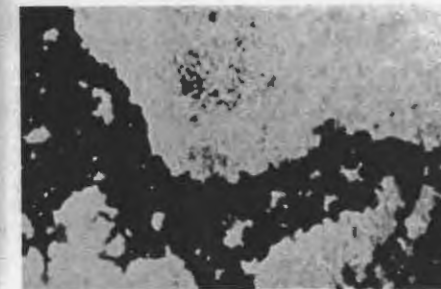
□スタッフ・キャスト
製作……………Golden Partners Company
脚本……………常本塚招/眞山正明
監督……………常本塚招
撮影……………徐瀬信六/吉里あるか
出演……………中森裕美/桜井順子
原田真子/小室 郁
石沢志折
84年・8ミリ・カラー・59分

つねもと たくあき
①'63年3月21日、宮城
②社会人一年生でーす。
③「対決者たち」(79)「Sweetest Lover Song」(85・未)
④グリフィスからヴェンダース、マキノから黒沢清まで総ての才能ある作家一その作品。
⑤約18万円、約4ヶ月
⑥つまらない映画が多すぎるので自分で面白エヤツを創ろうと思って。…甘かった。
⑦六十歳の誕生日まで。

□解説・ストーリー
ある日、たかおの元に赤紙が届き、彼は消息を絶つ。ガールフレンドの洋子と圭子は彼を求めて探し回る。やがて、2人の男に拉致されている彼を見つけ、そこから彼女達と男達のあくなき追いかけてこが始まる。軽快な移動撮影の長回しの多用と、登場人物の得体の知れない寡黙な雰囲気、かつての立教パロディアス・ユニティにも似た、奇妙な味をかもし出している。

変形作品第2番

Aプロ 推薦/松本俊夫



黒坂圭太 KEITA KUROSAKA

□スタッフ・キャスト
製作・脚本・監督・撮影・音楽……………黒坂圭太
84年・8ミリ・カラー・30分

くろさか けいた
①'56年2月23日、東京
②美術教師(成蹊小学校)
③「変形作品第1番」(84)「ソナタ第1番」(85)
④「天使」「石の詩」「フリッカー」
⑤5万円、2ヶ月
⑥絵画をやってきて、時間を表現できない問題につきあたり、解決法として絵を用いたアニメーションをやってみた。
⑦やめることは考えられない。

□解説・ストーリー
地面とも、壁ともつかない抽象的な画面が、ザーンという音と共に点滅を始め、やがて動いたり、形を変えたりしだす。次第にそれは複雑に、目まぐるしく変形し、小石の大群やら巨大な岩やらが嵐のように画面を飛びかう。題名の通り、全篇アニメーションによって、一曲のシンフォニーの如く、変化する映像とその刻まれるリズムが見事に計算され、構成された実験的作品。

はなされるGANG

Aプロ 推薦/大久保賢一



諏訪敦彦 NOBUHIRO SUWA

□スタッフ・キャスト
製作・脚本・監督……………諏訪敦彦
出演……………加村隆幸
伊藤理恵
84年・8ミリ・カラー・85分

すわ のぶひろ
①'60年5月28日、広島
②なし
③「サンタが街にやってくる」(82・16%)
④ルノワールの幸福感。「シェールブルの雨傘」の切なさ。V・エリセの真実さとアルトマンの失望に。「勝手にしやがれ」以外のゴダールには悪影響を。とふて描きのようにして撮られたこの作品は、フィルムの虚構性のウラをかいて、映画の本質に迫ろうとする。

□解説・ストーリー
冒頭、「話されるGANG」と云う字幕で、2人の役者、加村と理恵がこれから始まる物語について語り始める。そして耳の聞こえないギャング、加村と文庫本を読む少女、理恵の逃走劇が展開されてゆく。シーン毎に、撮影された日付が記され、ほぼ順撮りで、ひ以外のゴダールには悪影響を。とふて描きのようにして撮られたこの作品は、フィルムの虚構性のウラをかいて、映画の本質に迫ろうとする。

時を駆ける症状 The message from subway

Bプロ 推薦/大島 渚



七里 圭
KEI SHCHIRI

□スタッフ・キャスト

製作……………七里 圭&C・C・C
脚本・監督……………七里 圭
撮影……………丸山 敦/七里 圭
出演……………武藤 誠/三竹 博彦
……………渡辺裕之/岩崎ひとみ
……………羽賀 剛/長谷川 功
84年・8ミリ・カラー・24分

しちり けい

- ①'67年10月24日、愛知
- ②名古屋市立菊里高校
- ③これが処女作
- ④スタンリー・キューブリック、「真夜中のカーボーイ」「卒業」「未知との遭遇」それから「スーパーマン」の1作目は泣けました。
- ⑤約5万円、約2ヶ月
- ⑥撮りたいなあーと思ったから
- ⑦とりあえず今は全力でやるだけです。

□解説・ストーリー

突然、人間の体が消えたり現われたりと云う点滅を始め、それが段々早くなって遂には消滅してしまうと云う「時を駆ける症状」が全国的に蔓延していた。対策として、高校の健康クラブでは毎日、踏み台昇降運動を行ない、規則正しい生活を送るようにする。それを横目で見ていた少年に点滅が始まった。17才の作者の、自己の存在の意味と個性社会への誠実な問いかけ。

END, END

END, END

Bプロ 推薦/大森一樹



須田和博
KAZUHIRO SUDA

□スタッフ・キャスト

製作・脚本・監督・撮影・音楽……………須田和博
出演……………難波正浩
……………須田和博
84年・8ミリ・カラー・22分

すだ かずひろ

- ①'67年3月28日、新潟
- ②浪人中
- ③「全長12km」(83)「MO(真)」(83)「ART・CLUB・GM」(84)
- ④ゴダールの「パッション」「プレノン・カルメン」他4本。ダダ&シュールの9本。
- ⑤5万4千円、3ヶ月
- ⑥友人関係からの映研入会。
- ⑦組の文化祭映画への制作参加。
- ⑧作りつけてきた覚えはない。これからも同様。

□解説・ストーリー

とりあえず「アンダルシアの犬」風のイメージで始める。ゴダールのまねでも構わない。と始まり、どこかの映画をマネたようなイメージが、パタパタと次々現われては消えてゆく。それを中断するように懐疑的なナレーションが入り、早く終わらせたいのに、どう終わらせるべきか解らない作者の苦悩が、ポーズとして語られる。映画のマネのふりをした、軽やかな自己主張の映画。

MANJUSHAKA;LYCORIS RADIATA

曼珠沙華

Bプロ 推薦/日比野幸子



仲田伊作
ISAKU NAKADA

□スタッフ・キャスト

製作・脚本・監督……………仲田伊作
撮影……………仲田伊作
……………横井左奈
……………増田 仁
出演……………仲田伊作
……………横井左奈
84年・8ミリ・カラー・25分

なかだ いさく

- ①'68年12月16日、東京
- ②成蹊高校
- ③「圧力なべ」(83)「笑え・Don't laugh」(83)
- ④「ツイゴイネルワイゼン」「フルーツ・バスケット」
- ⑤難波田節子(私の母です)
- ⑥45,000円、6ヶ月
- ⑦特にありません。
- ⑧作れる限り作ります。

□解説・ストーリー

少年が目覚めた時、記憶は失われ、街には誰もいなくなっていた。突然「花はいらんかえー」と曼珠沙華を売る少女が現われ、少年と行動を共にする。真赤な花の籠を頭の上にのせて歩く娘は、実はこの世の人ではなかった。今回最年少の作者は、本当の美しさとは何かという問題に、非常に素直な姿勢で向き合う。「赤い花なら曼珠沙華」と繰り返す少女の声が印象的。

HITCHHIKE BREAK

ヒッチハイク・ブレイク

Bプロ 共同推薦/田中、長崎、長谷川、松本



武吉伸治
NOBUHARU TAKEYOSHI

□スタッフ・キャスト

製作・脚本・監督・撮影・音楽……………武吉伸治
出演……………石井 泰徳
84年・8ミリ・カラー・9分

たけよし のぶはる

- ①'63年6月17日、大分
- ②大阪芸術大学映像学科
- ③「悪魔にうなされながらも皮肉を忘れないシングルフィルム」(83)
- ④チャップリン、フェリーニ、寺山修司、松本俊夫、「書を捨てよ町に出よう」「アートマン」「黄金狂時代」「絞死刑」「終」
- ⑤20,545円、10ヶ月
- ⑥フィルムにキズをいれたくて
- ⑦飽きるまで。

□解説・ストーリー

どこかの田舎道を走る車が、道端に立っている男をとらえる。男は車に合図を送っている。車は通り過ぎてゆく。膨大なスチール写真を使い、待てども待てども車が掴まらないヒッチハイカーの姿を、多面マルチやら、逆転やら、ありとあらゆる動きのバリエーションで、ダイナミックに表現した実験アニメーション。わずか9分の作品に気の遠くなるような手間をかけている。

無水の泉

Bプロ 共同推薦/石井、大久保、長崎



栗栖里衣
SATOMI KURISU

□スタッフ・キャスト

製作……………桑形 素子
脚本・監督……………栗栖里衣
音楽……………西内 徹
出演……………石丸 裕子
……………神岡 謙
……………立垣 暁一
……………中垣 俊之
84年・8ミリ・カラー・14分

くりす さとみ

- ①'62年2月23日、北海道
- ②会社員
- ③「うみふみ月」(84)
- ④監督・山田勇男。「作品」まぼろしの市街戦。他多数。
- ⑤15万円、5ヶ月
- ⑥自分に憤りを覚え、「フォー」独特のイメージと、ヒロインの躍動感溢れる肉体によってこの映画は存在している。主演の石丸裕子は北海道の自主映画では欠かせない存在。
- ⑦わかりません。

□解説・ストーリー

白い服を着た少女が、奔放に駆け回り、走り回り、スイカを食べまくる。カメラは女の子のしぐさをひたすら追いつける。時折インサートされる、赤い傘やネックレス、あるいはズボンをおろす3人の男等、今回唯一の女性作家の持つ独特のイメージと、ヒロインの躍動感溢れる肉体によってこの映画は存在している。主演の石丸裕子は北海道の自主映画では欠かせない存在。

高校生映画

Bプロ 推薦/田中未知



辻 豊史
TOYOFUMI TSUJI

□スタッフ・キャスト

製作・監督・撮影……………辻 豊史
出演……………村上善彦/菊田悦子
……………高野元子/中林由武
……………下田佳代子/橋本理恵
……………栗原泉子/田井 敦
84年・8ミリ・カラー・109分

つじ とよふみ

- ①'67年1月25日、東京
- ②アテネフランセ
- ③「下流」(83)
- ④江戸っ子肌のカリフォルニア・ドールズが月世界旅行先で凱旋行進しアパートの鍵貸します。⑤33万3333円、延べ14日
- ⑥戦略と完結を拒絶する今世紀最後から3つ目の「高校生映画」は、セルロイドと化学の接点を消失させる現場と化する。(荒井孝昭)

□解説・ストーリー

壁も床も天井も真赤に塗られた教室。メツと女の子が現われ「そもそも名前を与えられないでなかった女」と書いて赤面用紙を掲げる。ここからの中で10数人の高校生による芝居と、赤面用紙による言葉の洪水が始まり、スパイ活劇が同時に進行する。ゴダールと黒沢清へのオマージュでもあり、あたかも映画を破壊させようとも思える強引な語り口は注目に値する。

狂った触角

Cプロ 推薦/ほしのあきら



平野勝之
KATSUYUKI HIRANO

□スタッフ・キャスト

製作・脚本・監督……………平野勝之
出演……………山本 政志
84年・8ミリ・カラー・57分

ひらの かつゆき

- ①'64年5月11日、静岡
- ②アルバイト
- ③「たそがれの終りころ」(83)
- ④「ハシ」(83)「はたる」(84)
- ⑤「肉弾」「股旅」「ションベン・ライダー」「グロリア」他B級カルトムービー、相米慎二、山本政志
- ⑥約10万、3ヶ月
- ⑦内縁からの憧動
- ⑧やりてえ時にやって、やめてえ時にやめる。

□解説・ストーリー

街を疾走するカメラ、部屋の中をなめ回すカメラ。カメラアイは、作者の目と同一化し、作者の日常に居座り、作者の周囲を見渡す。自転車走らせ、出会った女子高生や酒屋のおばあちゃんやニワトリのピーコちゃん。叫び声を上げ、狂ったように男を追いかけて、ぶん殴る作者。全編同録の手持ちカメラで、生々しい作者との同一体験を強いられる、つつ走る日記映画。

家、帰

Cプロ 共同推薦/石井、大久保、大森、長谷川、ほしの、松本



石井秀人
HIDETO ISHII

□スタッフ・キャスト

製作・脚本・監督……………石井秀人
出演……………石井 泰徳
……………石井 良子
……………石井 洋
……………石井 裕治
84年・8ミリ・カラー・18分

いしい ひでと

- ①'60年5月31日、群馬
- ②アルバイト
- ③「夜の中へ」(84)「異北より」(85)
- ④作品を超えて、ギョネイの「路」の制作過程、状況、彼の死を知り、少なからず衝撃を受けた。
- ⑤4万円、20日
- ⑥映画を本気で考えるようになって。
- ⑦この表現は捨てたくない。

□解説・ストーリー

「去年、祖父が死んだ。」という言葉で始まり、作者は後に残された祖母に眼差しを向ける。いつ死んでもいいと言いつつ、生きてゆく祖母の姿。祖母の顔の上を指が皺を撫でるように這う。母親が祖母を支えながら風呂に入れてやる。自分の事を考える時、自分の血、或いは家族を避けては通れないと言う作者は、祖母を見つめることで自己の存在を問い直そうとする。

下 駄

Cプロ 共同推薦/石井、大島、日比野、ほしの



うしろあたま

Cプロ 推薦/石井聰互、長崎俊一、長谷川和彦



渡辺研二

KENJI WATANABE

□スタッフ・キャスト
製作・脚本・監督・撮影……………渡辺研二
84年・8ミリ・カラー・5分

わたなべ けんじ
①61年5月12日、京都
②多摩芸術学園研究科
③「胡座をかいて眠る牛」(84・16%)「花びら餅に頬染めて」(85・16%)
④ほしのあきら氏の映画人生論。森田芳光氏の映画論。つかこうへい氏の映画?
⑤3500円、1日
⑥渡辺研二という男に対する反逆
⑦来年の今頃までには白黒つけていると思う。

□解説・ストーリー

流麗な琴の音が流れ、「かあさん、かあさん、僕は砂漠を進行している」と云うナレーションと共に、カメラは街を徘徊する。地面に向い、塀に向い、道路に向い、やがて雪の上で真赤な血を流し、作者はなおも「かあさん、かあさん」と呼び続ける。わずか1日で製作されたこの5分間の作品は、作者の劇的瞬間の息づかいを、生のままで伝えようとしている。

BACK HEAD

斎藤久志

HISASHI SAITO

□スタッフ・キャスト
製作・監督……………斎藤久志
原作……………高野文子
脚本……………岸田義孝
撮影……………寺田裕之
音楽……………村山竜二
出演……………浅田美納子
岡本千都子
平田敏司
84年・8ミリ・パート白黒・124分

さいとう ひさし
①59年10月5日、東京
②なし
③「やさしい友情」(78)「通学者」(80)「pineapple」(82)
④相米慎二、大林宣彦、今村昌平、「人間蒸発」、他
⑤50万円、約2年
⑥高校の時、登校拒否で友達がいなかったため、友達を作るきっかけとして。
⑦自分にとってのハッピーエピソードが見つかるまで。

□解説・ストーリー

突然髪を男みたいに短く切った女子大生、つじ子。彼女のこくありきたりな日常が、ほとんど握えっ放しの超長回しカメラで捉えられる。それに女子高生時代の友人達とのエピソードが白黒の映像でカットバックされ、過去と現在が淡々と語られてゆく。が、やがて過去は現在とダブリ、日常は大胆な非日常へと突撃してしまう。高野文子の同名の短編漫画が発想の原点。

その他の最終選考対象作品

- イト、ハグルマ、ソクド (村竹弘・8%・25分) 監督:村竹弘 ('54生・栃木)
- 印度舞が終る頃 (大川戸洋介・8%・35分) 監督:大川戸洋介 ('61生・東京) 出演:稲生光芳、高橋泉、大川戸洋介
- UGI UGI (梅宮雅夫・8%・30分) 監督:梅宮雅夫 ('62生・東京) 出演:須合知子、横関博、潮田有理
- カイエ・デ・ボク (田口巖・8%・41分) 監督:田口巖 ('62生・神奈川) 出演:篠原圭
- かわうそぼく (山崎敏男・8%・20分) 監督:山崎敏男 ('56生・新潟) 出演:新保正、山口和成、菊地真貴子
- サイト (金子丈男・8%・11分) 監督:金子丈男 ('58生・福島)
- さびそ楽園の崩壊 (森直紀・8%・38分) 監督:森直紀 ('61生・岡山) 出演:坂手洋二、森直紀、竹林功
- STAB (安井映画・8%・13分) 監督:酒井昌彦 ('65生・埼玉) 撮影:岩田剛 出演:安原仁、池島禎、佐々木康幸
- DONO-VAN (清水敏一・8%・60分) 監督:清水敏一 ('61生・神奈川) 出演:駒山祐子、高橋洋、兼子佳重
- TOPOGRAPHY (及川信・8%・20分) 監督:及川信 ('60生・神奈川)
- トリゴラス (うらもと和彦・8%・5分) 監督:うらもと和彦 ('62生・石川)
- trip (木島富士雄・8%・25分) 監督:木島富士雄 ('66生・広島) 出演:山本由美子、松崎治郎、藤城臣哉、井上明子

- 波動 (YASUO・8%・11分) 監督:相澤靖雄 ('62生・神奈川) 出演:秋江亮、三留まゆみ、池上雅博
- バービーはキャッツアイ!? (岡村博文・8%・3分) 監督:岡村博文 ('62生・長野) 特技監督:前田功 出演:バービー
- 流行目日記 (Tomoko-sizimi-Yonekawa・8%・22分) 監督:米川知子 ('63生・秋田) 出演:米川知子
- 舞踊狂 (浦和高校8%製作部・8%・58分) 監督:篠永昌久 ('67生・埼玉) 脚本:石橋建二 出演:島崎直樹、中山光偉
- まい子のほんの昔のちょっとした朝食 (法雲紅美・8%・34分) 監督:富岡弘美 ('60生・新潟) 出演:法雲紅美、禾東出水
- 万華鏡の森 (キミオ・マツモト・8%・30分) 監督:松本公夫 ('59生・鳥取) 音楽:杉本啓介 出演:杉本啓介、福岡清枝
- 密 (ウト由香里・8%・13分) 監督:宇土ゆかり ('60生・神奈川)
- 虫とり網と音響器 (根岸洋之・8%・70分) 監督:根岸洋之 ('61生・群馬) 出演:高武弘泰、藤掛二郎、根岸洋之
- 夜になっても (安岡建依・8%・80分) 監督:安岡建依 ('62生・東京) 製作:フィルム工房 出演:川崎晴美、川野博也
- RIYOURI (料理) (早大高等学院映画研究部・8%・3分) 監督:竹内雅俊 ('66生・東京) 出演:竹内雅俊
- ろんぐ・ろんぐ・あごう (品行方正児童会・8%・25分) 監督:前川麻子 ('67生・東京) 出演:宮川一朗太、清水勉 ※監督()内は生年、出身地。スタッフ表記のない場合は監督が兼ねる。

PFF16ミリ映画制作援助作品

イみてーしょん、インテリあ。

A・IMITATION interioR



風間志織
SHIORI KAZAMA

かざま しおり
1966年埼玉県上尾市に生まれる。'79年桐朋女子高校に入学。1年の時、文化祭のためにクラスで作っ

た「お楽しみは悲劇から」が第一作。'84年「0×0 (ゼロカケルトノゼロ)」でPFF入選。'85年「ホーテツの光」制作。同年高校卒業。

□スタッフ・キャスト

製作……………びあ
プロデューサー……………西村 隆
脚本……………風間志織
監督……………風間志織
撮影……………風間志織/高橋 潔
照明……………宮田幸司/荒巻重信
編集……………風間志織
音楽……………吉川清佐己/福木靖子
岩野麻里/松井聖子
制作担当……………榎野 亮
演出助手……………松永晃一/首藤 啓
記録……………長谷川直子
メイク……………立川須美子
ネガ編集……………萩原 誠
制作協力……………東洋現像所
協力……………文芸坐
東京ビデオセンター
第一映機
木下道郎
特別協力……………大久保真一
ほしのあきら
渡部 真
村上知彦
古沢敏文

森本英利

佐藤和彦
押垂勝久
小嶋仁己
伊藤亜希子
立川須美子
長谷川直子/飯沼佳江
柴本真理/坂本球里
河上晶子/井上知子
河上 修/佐野仁美
橋本英理/浜田美佐子
山口真紀/中村ちとせ
遠沢里美/藤井有子
伊藤亜希子/白木ゆり
らーめんくん/わらいにしむら
うすだくん/しゅとーくん
うえのさん/おつさん
出演……………田村哲也/山口篤志
藤井良久/石井 勲
松岡錠司/白岩 純
太田達也/榎野智子
山崎幹夫/吉田 光
昼間行雄/相良みどり
小島美佳/矢内久美
1985年・16ミリ・カラー・45分



□解説・ストーリー

PFF'84から始まった16ミリ映画制作援助企画は、(株)東洋現像所の制作協力のもとに実施されるもので、若いフィルムメーカーの制作活動を活性化させることを目的としている。その第一回に選ばれたのがPFF'84に「0×0 (ゼロカケルトノゼロ)」を応募し入選した風間志織である。
'84年7月に脚本が完成、8月より撮影が開始され、途中撮影休止をはさんで'85年4月にクランクアップ、PFF'85にて発表上映される。監督の風間志織は脚本の他、撮影(共同)、編集も担当、スタッフ、キャストにはこれまでの8ミリ映

画制作グループに加えて、自主製作活動を続けている若いフィルムメーカーが多数参加している。
登場人物は、ほぼ全員が風間志織のグループの少女たちによって演じられ、主人公のふたみと彼女をめぐるさまざまな人物が繰りひろげ、現実世界と虚構世界、日常世界と非日常世界とが交錯する不思議な物語である。
ふたみの父親は既に戦死し、母親は病気で入院中、もうボケてしまった祖母と2人で暮らしている。その「偉大なる悲しみ」に包まれた、あまり表情のない17才の多感な思春期を送っている彼女の家に友人が家出してきて……。

映像をみつめて
半世紀。。。 Established 1935

東洋現像所
FAR EAST LABORATORIES, LTD.

限りなく柔軟に、限りなくかたくなに……

インターナショナル・ヤング・シネマ・ディレクター 日比野幸子

☆PFFという映画祭は、「びあ」という一つの民間企業が、まったく営利を目的にしないでオーガナイズしているのだと説明する時、海外諸国の人々の眼に浮かぶ尊敬の色を、私は誇らしい気持ちで受け止める。あなたの映画をPFFで上映したいと申し込む時、監督たちは一様にPFFと自分の映画を結び線は何かと考え、それが「映画の夢」であり「冒険」であることを知ると微笑する。

☆PFFの海外作品招待部門として出発したインターナショナル・ヤング・シネマも今年で4年目を迎え、毎回、約10カ国から10本程の作品が参加してきた。昨年は4人

の監督が来日し、日本の若い映画人と真摯に交歓した。映画を愛することは常に変わり続けることだ。70年代初期から始まった日本の自主映画運動は、国内のスクリーンに「新しい映画」を残した。80年代、我々の課題となるのは、海外そして国内という区分けの概念を払拭したフィールドで映画を考えることのできる「国際感覚」の発見にあるのだらう。プログラムの選定にあたっては、今後とも限りなく開かれた場であることを思想としていきたい。それが「新しさ」に対応する礼儀のような気がする。☆そしてまた、表現行為の周辺に位置する者の決意として、日本税関の検閲制度につ

いて異議申し立てを続けることに疲れないようにせねば、と考える。芸術に対する国際常識以前に、フィルムを切断すること事体が「暴力」だ。フィルムの血が見える！

☆今年も、参加が決定した国、しない国を含めて、各国の大使館や財団、そして民間団体からは多大な援助をいただいた。このプログラムは予算に倍するそうした援助と協力から成り立っている。後援団体名は別掲して感謝の意を表したい。また、個人としてプログラムの選定にご尽力下さったコーディネーターの方々：阿部尚子、小池章、田中千世子、田村志津枝、元吉仁志、ユリ・ヨシムラ、ガニオンの諸氏にお礼申し上げます。

来日監督インタビュー

構成 田中千世子

イ チャンホ
李 長鎬

大学の授業をサボって酒ばかり飲んでいる李長鎬に映画の道を勧めたのは父だった。戦後の米軍統治時代に映画の検閲関係になった父の家には映画人がよく来たという。

李 長鎬：申相玉監督の下で8年間助監督をした後、74年に「星達の故郷」でデビューしましたが、当時は映画の興行が非常に悪く、1週間ほどの封切りで動員力も2000人そこそこでした。農村でも2軒に1台の割で普及したテレビの影響です。しかし「星達の故郷」は大ヒットしました。純真な若い娘が社会に出て転落していく話で、原作はベストセラーになった新聞連載小説です。

—76年のマリファナ事件というのは？
李：2本目の「昨日降った雨」(74)も高く評価されて天狗になっていましたからその後の2本はひどいものでした。当時マリファ

ナは大流行していて75年の末から芸能人を対象に大規模な調査があって、芋づる式にあげられたのです。監督協会を除名され、家を売ったり借金したり、ついには妻子ともどもスラムへ引越す破目になりました。それまでソウルに貧しい人がいるということが実感として分らなかつた私は、はじめ彼らに驚き、次に彼らのまじめさやバイタリティに心うたれました。その頃、師の申相玉監督が映画法に触れて彼の製作所が閉鎖になりました。南北統一が出来るまで私たちは映画を作れないだろうという言葉が映画を撮れない監督たちの間で交わされました。79年に朴大統領が撃たれて政府が変わり、禁止令が解かれた80年に私は「風吹く良い日」を撮って活動を再開しました。

—「寡婦の舞」でコマ落としを使ったのは？



李：最初は「馬鹿宣言」(83)で監視者の目をごまかすために使いました。「寡婦の舞」では単なるテクニクです。

—若い監督はどんどん出てくるのでしょうか？
李：熱気は充分にあります。「お粥が煮えかかっている時に鼻水がポトリと落ちる」という話がありますが、政府がまた何か制限を加えなければいいかと思えます。韓国映画は今とても活発なのであります。

クリスチャン・ウグナー

「フランツの自由」監督

1年間に公開される映画の70%ほどがアメリカ映画で自国のものは10%というのが西ドイツの映画状況だ。'59年生まれのクリスチャン・ウグナーにとっては「イージーライダー」も商業映画になる。

ウグナー：15才でシネマテークに通い始めて5分ぐらいの映画を何本か撮りました。ちょうどニュー・ジャーマン・シネマが盛んな頃です。ギムナジウムの終わりの2年間で美術を選択して写真の基礎技術も学びました。'80年の春にギムナジウムを終えてその年の秋、ミュンヘンの大学に入るまで工場で働いたりして「予言者」という8ミリの中編を撮りました。

—上映はどこでやりましたのですか？
ウ：プレミアを故郷の町の映画館（ヒトラ一時代のもの）でやりました。反響はとて

もよくて観客と自分との間に実験的な試みをしたのが成功したのです。'81年に2作目を縦長の画面で撮りました。

—ドイツの学生は実験映画をよく撮るのですか？
ウ：はい。ゴダールの真似をする者もいますが、それはよくないですね。自主映画の作家は皆政治的な立場で作ります。'68年からその傾向が出てきました。

—「フランツの自由」は自己資金ですか？
ウ：そうです。脚本を書く前に政府の援助金をもらおうとしましたが、この映画は商業的ではないという理由で断られました。

—援助金を得るのは難しいのですか？
ウ：有名監督にはすくく出ますが、若手にはなかなか出ません。尊敬するアハテルンブッシュもキリストをパロディ化した「幽霊



では、援助金の支払いを途中で切れ、資金について裁判中です。彼の映画は尊敬するもう一人のベーター・リリエントールのもと同じようにシネマテークでしか見られません。シネマテークの運営は地方の公共団体がやっています。ベルリンやハンブルクなど主な都市にはいくつもあります。アジアの映画を見る機会は少なく、韓国の映画も今回初めて見ました。

上映作品紹介

イギリス

ナンバーワン

Number One ('84)

レス・ブレアー

□解説

PFF'83で日本初公開され、多くの反響を呼んだ「ピンク・フロイド/ザ・ウォール」。これに主演した、人気ロックグループ、ブームタウン・ラッツのリード・ボーカリスト、ボブ・ゲルドフが今度は主役のハスラーを演じて話題を呼んだのが、この「ナンバーワン」である。監督のレス・ブレアーは、長い間テレビ番組を手がけてきた人で、「ナンバーワン」の製作に当たっては、脚本のG.F.ニューマンとのコンビで、3年余りも構想を練ってきた。題名の通り、1人のハスラーが、「ナンバーワン」になってゆく生きざまを描いたこの映画は、復興の音が聞かれるイギリス映画界にあって、アラン・パーカーやヒュー・ハドソンらに続く新たな展開をもたらすものとして注目されている。プロデューサーのマーク・フォーステーターは、SFファンタジー、「Xtro」を製作し、これがいくつかの国際映画祭で賞を取って脚光を浴び、次代を担うプロデューサーとして期待されている。

□ストーリー

ハリリー・フラッシュ。ゴードンは、ロンドン南東部の玉突き場で、小さな池に住む大きな魚のようにエースのハスラーとして生計をたてていた。決して大金持ちではなかったし、しばしば無一文になることもあるが、「何かうまい事が起こる」という思いを常に秘めていた。

顔見知りでノミ屋の男・ビリー・エバンス、エバンスの世話役マイク・ザ・スロートのふたりは、フラッシュがプロのハスラーになり、高額を賭けるサーキットに加わることを望んでいた。フラッシュを、ナンバーワンに押し上げようと言うのだ。

マイク・ザ・スロートの助けを借り、エバンスはフラッシュを自分の思い通りにしようとありとあらゆる精神的プレッシャーを与える。これに、警官、フラッシュのガールフレンドの売春婦、借金取りらが加わり、ついにフラッシュはプロのサーキットに参加することになった。彼はそこで始めて、自分の実力がナンバーワンだと知る。



□スタッフ・キャスト
製作……マーク・フォーステーター
レイモンド・デイ
監督……レス・ブレアー
脚本……G. F. ニューマン
撮影……バーラム・マノシェフ
出演……ボブ・ゲルドフ
メル・スミス
アリソン・ステッドマン
1時間42分・カラー・35ミリ

□STAFF・CAST
Producer……Mark Forster
Raymond Day
Director……Les Blair
Screenplay……G.F. Newman
Director of Photography……Bahram Manocher
Starring……Bob Geldof
Mel Smith
Alison Steadman

□監督プロフィール

ランカシャー生。'66年、ロンドン映画学校入学。'69年、チェコのプラハ映画学校に留学。ソ連軍侵攻の最中に記録映画「ヒューマン・フェイス」を監督。これは、後にBBCで放送された。



カナダ

ホテルの女

La Femme de l'hotel ('84)

リア・プール

□解説

この作品は、今年パリで行なわれた女性映画祭で観客の圧倒的支持を受けた。3人の女の絡み合いとその心理を細やかに描写した、女流監督リア・プールと3人の女優の競演は、まさしく「女性映画」と呼ぶに相応しい。舞台はカナダのモントリオールだが、いつも雨に煙っているような街並は、パリに似ており、言葉もケベック訛りではなく、純粋なフランス語で、まるでフランス映画を見ているようだ。監督のリア・プールは、スイス生まれ、カナダに移って映像を勉強し、ドキュメンタリーやテレビ番組を製作してきた。これが初の監督作品であるが、女流監督と女優と過去をもつホテルの女という、立場も境遇も全く違う3人の女が、一本の映画を撮ってゆく過程で、同一の内体験を強いられてゆき、お互いの触れ合いの中で自分の人生を確認してゆくだけの描き方は力量を感じさせる。また、この作品は'84年のモントリオール映画祭で、国際記者賞を受賞している。

□ストーリー

アンドレア・リシュラーは、モントリオールで映画を撮影中、彼女が作品で描こうとしている女そのものともいえる女、エステルに出会い、心を奪われた。

その「ホテルに滞在している女。エステルは、過去の自分のイメージから逃れ、アンドレアが映画にしようとする自分のイメージから逃れ、他人に疑問を抱き、孤独と無気力に浸り、彼女自身の独自のイメージから、あるいは人生からも逃れようとしてホテルで過しているのだった。

アンドレアのエステルに対するイメージを、映画の女優は次第に自分のものとして創造し始める。アンドレアとエステルと女優は、互いの存在を意識しだし、妙に絡み合う。エステルの存在が映画に浸透すればするほど、アンドレアは明確なビジョンを見出してゆく。エステルも映画に関わることで、映画中の架空の人物が彼女自身のイメージを変えてしまう。結局、映画完成直前に伝言を残し、エステルは旅に出る。



□スタッフ・キャスト
製作……ベルナデット・ペイユ
監督・脚本……リア・プール
脚本……ミシェル・ラングロワ
撮影……ダニエル・ジョバン
ジョルジュ・デュフォ
音楽……イブ・ラフリエール
出演……ポール・ベラルジョン
ルイーズ・マルロー
マルテ・トワルジョン
セルジュ・デュピール
1時間9分・カラー・35ミリ

□STAFF・CAST
Producer……Bernadette Payeur
Director, Screenplay……Léa Pool
Screenplay……Michel Langlois
Director of Photography……Daniel Jobin
Georges Dufaux
Music……Yves Laferrrière
Starring……Paule Baillargeon
Louise Marleau
Marthe Turgeon
Serge Dupire

□監督プロフィール

'50年スイス生。75年カナダに移住、3年後にケベック大学入学。当時からビデオ、短編ドキュメンタリー、TV番組を手掛ける。「ホテルの女」はプールの最初の劇場用監督作品である。



フィリピン

よろこびの神秘

Histryo Sa Tuwa ('84)

アポ=デ・ラ=クルス

□解説

ここ数年のフィリピン映画界を語る上で欠くことのできないのが、'82年に設立されたフィリピン実験映画基金(ECP)の存在だ。意欲的な映画事業に対しての経済的援助を目的に設立された ECP は、一方で自主製作映画やシナリオなどの公募も行なっている。こうしたコンペティションに入賞した作家には特別資金を拠出し、映画を製作させている。

本作品も '83年のシナリオ・コンペティションの入選作品で、同年、脚本を書いたアポ=デ・ラ=クルスが監督し、ECPの資金を基に製作された。クルス監督はこの作品以前、たった一本の作品に助監督としてたずさわっただけの、まったくの新人。これは若い監督が珍しくないフィリピン映画界にあっても初めてのケースで、才能とヤル気を持つ若き映画人にこの制度が改めて注目されるキッカケともなった。なお、本作品は昨年秋に公開され、それに先立ち、モントリオール映画祭に出品され話題をよんだ。

□ストーリー

その日、バナハウ山のふもとに住むカインガロの村人たちは、生まれたばかりの子供の洗礼を祝うパーティを開いていた。その宴の最中、突如、飛来した飛行機がバナハウ山麓に墜落する。

宴を中断し、事故現場に駆けつけた村人たちは救援活動もほどほどに、密林にちらばる遭難機の破片の中から金目のものや珍しい食料品をむさぼり始める。ネシオン、ボンソイ、シャミンの3人組は、そんな中で黒いバッグを拾う。そのバッグの中には多額の現金と、謎の書類が!

突如として無い込んだ「幸運。にうかれる3人組。だが、その幸運はあまり長くは続かなかった。市長と正体不明の中国人が、例の書類を探し始めたのだ。また、市長らは3人組がバッグを拾ったという証言も得た。

ある夜、3人組は覆面の男たちによって拉致されてしまう。覆面の男たちの目的は?そして拉致された3人組を待ち受けるものは……。



□スタッフ・キャスト
製作……マデリン・ガリヤガ
監督・脚本……アポ=デ・ラ=クルス
撮影……ロディ・ラカブ
音楽……ハイメ・ファブレガス
出演……ジョニー=デルゴド
トニー=サントス・Sr.
ロニー=ラザロ
2時間2分・カラー・35ミリ

□STAFF・CAST
Producer……Madeleine Gallaga
Director, Screenplay……Abbo De la Cruz
Director of Photography……Rody Lacap
Music……Jaime Fabregas
Starring……Johnny Delgado
Tony Santos, Sr.
Ronnie Lazard

□監督プロフィール

'54年、マニラから約100キロのラクバンに生まれ育つ。高校卒業後、職を転々としたが、兄の助けでTVのドキュメンタリーショーで働く。後、シナリオコンテストで本作品を発表、映画化。



台湾
フンクイ

風櫃から来た人

風櫃来の人 / The Boys from Fengkuei ('83)

侯 孝賢



□解説

台湾では男子全員に兵役義務が課せられている。大学に行かない人は20歳から、大学に行った人は卒業後2~3年兵役につく。侯孝賢監督は、兵役というのはとても大きな出来事だ、これが終わらないと人生が始まらないという感じさえあると語っていた。彼自身、入隊する時は父親からもらった腕時計をばめ、父親のおさがりの背広を着て、ポケットに一枚の質札を入れたまま何も考えずに出掛けて行き、兵役が終わった時には自分は映画を作るのだと決めていたという。

この映画は様々な青春を描いた侯監督の一連の作品の中でも一際精彩を放っている。澎湖島や高雄の美しい風景を撮影しているのはいつものコンビの陳坤厚。主役の阿清を演じているのは「少年(ピー少年の話)」で中学生時代のピー少年を演じた鈕承澤で、大人になる前の少年の激しさと不安定さを見事に表現している。侯監督自身が阿清の姉の男友達として画面に顔を見せるほか、若手監督の萬仁が友情出演している。

□ストーリー

澎湖島にある風櫃(フンクイ)という村落。海辺の岩穴を風が吹き抜けるとき、ヒューと不思議な音をたてるといわれている。今日もまた、白っぽい石造りの家々や街筋に、陽光がさんさんと降り注ぐ。

少年たちは毎日が退屈で仕方がない。高校に行くのも、もう飽き飽き。退屈のしのいだずらは日に日にひどくなる。

ある少年の父親は、日がな一日家の前の日だまりで椅子に坐っている。少年が小さいとき一緒に野球をしてボールが頭にあたり、そんなふうになってしまったのだ。こんな島はもうたくさん。彼らは島を出る決心をして、高雄へ向かう。

高雄の片隅で、風櫃から来た少年たちは何とか仕事を探して、暮らしを立てていこうとする。さまざまな失敗、立ちはだかる大人の世界、試行錯誤の日々が続く……。

が、ある日不意に、それを断ちきるかのようになり、兵役につかなければならない時がくる。

□スタッフ・キャスト

製作総指揮・撮影……陳坤厚
(チェン・クエンホウ)
監督……侯孝賢
(ホウ・シャオシエン)
脚本……朱天文
(ジュ・ティエンウェン)
出演……鈕承澤
(ニウ・ジョンズ)
張世
(ジャン・シー)
その他 趙海華/廣宗華/楊麗音
1時間1分・カラー・35ミリ

□STAFF・CAST

Supervisor, Director of Photography……Cheng Kwen Hou
Director……Hou Hsiao Hsien
Screenplay……Chu Tien Wen
Starring……Neo Cheng Tse
Chang Shih
Chao Peng Chi
Doo Tsung Hua
Yang Li In

□監督プロフィール

'46年生。'72年、国立芸術専科学校卒業。'74年より活動を始め、助監督、脚本などを経験した後、'81年「風兒踢踏踩」で監督デビュー。'85年「青梅竹馬」で歌手・蔡琴と共演し、話題を呼んだ。



ユーゴスラビア

ストラングラ

The Strangler ('84)

スロボダン・シアン

□解説

「ストラングラ」(原語題直訳「絞殺犯が絞殺犯に対して」)は、ユーゴスラビアの新鋭スロボダン・シアン監督の第4作目の作品。この映画は1980年代の首都ベオグラードで展開される犯罪をユーモアとペースで描いた恐怖コメディである。

同監督は「歌っているのはだれ?」('80年、日本公開'84年)で映画監督としてデビューする。この作品は1941年の時代を背景に、父親と息子の経営するバスに乗り合わせた乗客たちの24時間のドラマをユーモアと風刺と歌を交えて描いた喜劇であり、この作品にハンター役に出演しているタシュコ・ナッチは本作品の主役に好演している。

他の作品にブラックコメディタッチの「マロン家族」('82年)「馬鹿どもによって、どのように私は体系的に破壊されたか」('83年)の悲喜劇作品がある。

これらの作品の傾向をみると同監督は喜劇作品の映像化にたけた作家で、そこに描かれる人物は風刺とペースに満ちている。

□ストーリー

ベオグラードの街に次々と起こる怪事件。犯罪多発で頭を抱える警察に、またひとつ大きな悩みの種ができた。ストラングラ(絞殺魔)の登場である。

彼の名はベラ・ミティック、48歳。カーネーションを売り歩く強度のマザコン男である。カーネーションがいかにか素晴らしい花かを知らせたいという衝動と、花が売れなければ母親におしおきされるという恐怖から彼は犯罪を重ねてゆく。

一方、この事件に触発されたロック歌手スピラは、自分が絞殺魔であると夢想しながら新曲を作り上げる。その曲は大ヒットを記録するが、ベラに手玉に取られた警察は信頼を失う。スピラのコンサート会場をマークしても、逆に警官が殺害される始末。

女性アナウンサーがコンサートをけなしたことでスピラは激怒し、絞殺魔になりすましてアナウンサーを殺そうとする。その頃、母親を殺害し呪縛から解かれたベラも次のターゲットをアナウンサーに決めた……。



□スタッフ・キャスト
監督・脚本……スロボダン・シアン
脚本……ネボイシャ・バイキッチ
撮影……ミロラト・グルシツァ
音楽……ブク・クレノビッチ
美術……ベルイコ・アスポトビッチ
出演……タシュコ・ナッチ
スルジャン・シャベル
ニコラ・シミッチ
ソニヤ・サビッチ
1時間33分・カラー・35ミリ

□STAFF・CAST
Director, Screenplay……Slobodan Šijan
Screenplay……Nebojša Pajkic
Director of Photography……Milorad Glusica
Music……Vuk Kulenović
Art Director……Veljko Despotović
Starring……Tasko Načić
Srdan Šaper
Nikola Simić
Sonja Savić

□監督プロフィール

'46年ベオグラード生。'75年ベオグラード演劇アカデミー映画制作科卒業。在学中よりTVシリーズを監督。'76-'79年まで1時間ものを5本製作。34歳の時「歌っているのはだれ」でデビュー。



オーストラリア

アゲインスト・グレイン

Against the Grain ('80)

ティム・バーンズ

□解説

オーストラリア映画は、「マッドマックス」の爆発的ヒットをきっかけに、「危険な年」や新作「目撃者」が話題のピーター・ウェア、新作の「ソフェル夫人」が待機中のジリアン・アムストロングなどの若手作家が海外進出を果たす一方、国内でも有望な新人が多数デビューした。昨年招待上映された「ストライクバウンド」や今回のこの作品はそうした気運の中で作られたものである。オーストラリア政府は、ここ10年間にわたって映画産業に対する財政援助と、税制の優遇措置によって民間資本の導入を図る政策を推進し、見るべき成果を上げてきたのだ。

結果、単に産業としての映画に貢献する作品ばかりでなく、こうした強烈なメッセージ映画が登場することになった。オーストラリアはウランの埋蔵量の多い国で、反核運動も盛んである。この映画は、政治活動とテロリズムをテーマに、監督自身の青春とその精神史を描く異色作で、その実験的なカメラ・ワークが高く評価された。

□ストーリー

レイ・ユニットは、オーストラリア西部パースの中産階級に生まれた革命家志望の学生。シドニーで、ポスト産業資本主義社会に特有な青年の典型として生活している。戦勝記念日に、彼は殉難兵士記念碑に煙草を仕掛けて戦争反対の意思を表現する。国家は直ちに、コンピューターなどの「見えない暴力」を駆使して彼の追跡を始める。それを逃れて、広大なヌラバー平原を横断する列車の旅で、彼は故郷へ戻る。生きるためには羊を殺すという暴力を伴いつつも、平和で穏やかな故郷の日常——良き息子と哲学青年の二重の役割を演じることに疲れたレイは、ハット・リバー州への政治亡命を願い出る。そこで彼は爆弾作りの研究をさらに続け、シドニーに戻ってから国家の暴力に対抗して個人主義的テロリズムで闘う準備をすすめる。だが治安当局は、現代のメディア・テクノロジーを最大限に利用して、地下着行中のレイをも、きびしく監視、追跡しているのだが……。



□スタッフ・キャスト

製作・監督……ティム・バーンズ
撮影……ルイス・アービング
音楽……ブラック・クロム
出演……マイケル・キャラハン
サンディ・エドワーズ
メリー・バーンズ
1時間2分・カラー・16ミリ

□STAFF・CAST

Producer, Director……Tim Burns
Director of Photography……Louis Irving
Music……Black Chrome
Starring……Michael Callaghan
Sandy Edwards
Mary Burns

□監督プロフィール

現在33歳。オーストラリアでハイスクールの美術講師をした後、'82年よりニューヨークの大学で映画製作の講師となる。'83年、ベッド・ゴードン作の「バラエティ」で助監督を務めた。



韓国 寡婦の舞

파부춤 / Widow Dancing ('84)

□解説

原作は李東哲の「五人の寡婦」である。李東哲は李長鎬の「馬鹿宣言」の原作者であり、「暗闇の子供たち」の原作者でもある。この二人が組んだ三部作は、李長鎬作品の中でも、社会の断片を鋭く描いた代表作といえる。「寡婦の舞」について監督は「経済成長の恩恵を被ることのない貧しい私達の隣人を、彼等に対して無関心な私達の社会に向けてありのままに公開したかった」と語っている。この映画に描かれる女達は、経済成長の恩恵を被るどころか、経済成長の見えない力によって、夫や家族を失い、傷つけられていくのである。しかしながら、彼女等を通して描かれる、ありのままの家族、夫婦、そして生と死は、現代社会の中で失われかけた私達の感性に対して、それらの本来の力強さを見せつけてくる。ラストの雪に覆われた韓国の家並は私達に様々の余韻を残して消えていくが、この中からまたどんな映像が生まれてくるのか、期待している。

□ストーリー

日本人の男に捨てられた若い韓国女性がとある結婚相談所に駆け込む。しかし、そこは結婚相談所とは名ばかりの結婚詐欺所だった。相談にくる男性に仲間の女を紹介し、2度ほどつきあっては女の方から交際を断り、紹介料を巻き上げる寸法だ。彼女はそこで働くことになり、初仕事が終わってくるが、相手の男は紹介料が払えず、質屋に押し入り強盗をして逮捕されてしまう。これをきっかけに相談所が臭いとにらまれ、おとり捜査の末に彼女と所長は監獄へ……。一方、彼女には日本人の男との間にできた赤ん坊がいて、兄夫婦の手で育てられている。長屋の一間で細々と生計を立てる一家。しかし、不幸の魔手はここにも忍び寄る。道路掃除夫の兄は思わぬ事故で轢死し、妻は隣りのドラ息子に犯されてしまうのだ。時が過ぎ、刑期を終え、再婚にまたも破れた女は、雪道で助けを求める妊婦に出会う。妊婦は女の養姉の家で3人の寡婦に見守られ、不義の子を無事産むのだった。

李長鎬



□スタッフ・キャスト	□STAFF・CAST
製作……………朴宗鎬 (パク・ジョンジャン)	Producer……………Park Jong-chan
監督……………李長鎬	Director……………Yee Jang-ho
原作……………李東哲 (イ・ドンテヨル)	Novel……………Yee Dong-cheol
出演……………朴元淑 (パク・ウォンスク)	Starring……………Park Weon-suk
	Yee Bo-hee
	Park Jong-ja
	Kim Myeong-kon
	李南姫 (イ・ボイ)
その他……………朴正子/金明坤	
1時間54分・カラー・16ミリ	

□監督プロフィール
'45年ソウル生。弘益大学中退後、'65年より申相玉監督に師事。'74年「星達の故郷」でデビュー。'76年マリファナ事件に連座、映画製作を禁止されたが、'80年復帰、以後は話題作を続々発表。



インド 渡河

PAAR ('84)

□解説

インド東部のビハール州は、インドでも困難な社会問題を抱えた州のひとつである。旧支配者層は経済と社会の破綻にもかかわらず、被支配者層の声を力押し込めようとする。ゆえに、村を追われたり、離れざるを得なくなった人々の群れがカルカッタに流れ込む。膨脹する人口を支え切れず機能マヒした大都会カルカッタは、主人公夫婦が迷い込む博物館の恐竜の化石のようだ。それでも、村に帰るためのわずかな路銀を得るために、雨季の増水したガンガ(ガンジス河)を豚を追って泳ぎ渡るというインドの神のような、カルカッタの残酷で、グロテスクで、悲しい程にユーモラスな試練は、八方塞がりふたりに、ガンガの対岸のように遠いが、確かな希望への道を開く。このカルカッタの下町に生れ育った若い監督ゴータム・ゴースは、自らの作品をポリティカル・フィルムと呼び、映画を撮るというメッセージを通して、彼自身もまた内なるガンガを渡り続けている。

ゴータム・ゴース

□ストーリー

インド東部ビハール州の村で、アウト・カースト住民たちの家が焼き打ちされ、多くの人が虐殺された。ノウランギアと妊娠中の妻ラマーは辛くも逃げのびた。事の起りは、村の封建的支配者である地主と、民主的な村運営を目指す小作のアウト・カースト住民たちとの血で血を洗う政治的な争いがあった。ノウランギアとラマーは、地主の弟によって殺された被支配層のオビニオン・リーダーであった村の校長の未亡人等に紹介されたつてを頼って、大都会カルカッタに身を隠そうとする。初めての大会にとまどい恐れるふたりの頼った主は留守、仕事にありつけないはずの工場は倒産寸前。わずかな金も使い果たしたふたりに聞こえてきたのは、村では州政府が、被害者たちに賠償金を与えているという便りだった。しかし村に帰る金もない。ようやく与えられた仕事はわずか20ルピー(約440円)で、豚の群れを、雨季で増水したガンジス河を泳いで渡すことだった……。



□スタッフ・キャスト	□STAFF・CAST
製作……………オーキッド・フィルムズ	Producer……………Orchid Films Pvt. Ltd.
監督・撮影・音楽……………ゴータム・ゴース	Director, Director of Photography, Music……………Goutam Ghose
原作……………サマレーシュ・ボース	Novel……………Samaresh Bose
脚本……………ツルター・パネルジー	Screenplay……………Partha Banerjee
出演……………ナースィルツァイーン・シャール	Starring……………Nosseruddin Shah
ジャハナーン・アーズミー	Sabana Azmi
オーム・プリー	Om Puri
ウトバル・ダット	Utpal Dutta
モハン・アーガーンシュエ	Mohan Agashe
2時間・カラー・35ミリ	

□監督プロフィール
'50年生。カルカッタ育ちで、カルカッタ大学を卒業。フォト・ジャーナリストとして鳴らしたこともあり、'73年よりドキュメンタリーを製作。「渡河」は彼にとって、劇映画としての第3作。



ニュージーランド ビジル

Vigil ('84)

ビンセント・ウォード

□解説

ニュージーランドで最も将来が期待されている監督、ビンセント・ウォードは今年28才。昨年度カンヌ映画祭グランプリにノミネートされた「ビジル」で見事に長編劇映画デビューを果たした。この作品以前には、政府機関であるニュージーランド映画委員会からのバックアップを得て、「A State of Siege」(シカゴ映画祭、ゴールデンヒューゴ受賞)、「In Spring One Plants Alone」(Cinéma du Réel、グランプリ受賞)という2本の短編を「ビジル」の撮影監督でもあるアラン・ボリンジャーの協力のもとに撮っている。人間がまだ足を踏み入れたことのない土地がたくさん残っているというニュージーランド。監督自身、たいへん深い自然に囲まれた辺境の地で4世代にわたる農家を営んできた家で育った。「ビジル」の構想は、彼の中で4年間暖め続けられた後、人里離れた谷間で、1983年の湿った冬から早春にかけての10週間、撮影が行なわれた。

□ストーリー

11歳の少女トスは両親と祖父の4人きりで、人里離れた寒村に生活している。ある日、父親と山に出かけるが、父親はふとしたはずみで谷底へ転落。母親を呼びに行こうとするトスの前に、父親の死体を抱いたハンターが現われる。以来ハンターは家に住みつくようになり、家の仕事を手伝い父親の代わりに勤めるようになった。母親も彼を頼りにするようになるが、トスはハンターのことを暗黒者としかと思えず、警戒の手を緩めない。が、やがてちょっとしたことからトスは彼に心を開くようになった。しかし、母親とハンターが愛し合っているのをのぞき見てしまったトスは、激しい嫉妬を覚え、ふたりを避けるようになる。ついには、祖父とふたりで家に閉じこもってしまった。頑な態度を取り続けるトスの閉ざされた眼を見たハンターは、車に乗り込み彼らのもとを去っていった。再び大黒柱を失った一家は、この地を離れなくてはならなかった。



□スタッフ・キャスト	□STAFF・CAST
製作……………ジョン・メイナード	Producer……………John Maynard
監督・脚本……………ビンセント・ウォード	Director, Screenplay……………Vincent Ward
脚本……………グラム・テトレ	Screenplay……………Graeme Tetley
撮影……………アラン・ボリンジャー	Director of Photography……………Alun Bollinger
音楽……………ジャック・ボディー	Music……………Jack Body
出演……………ペネロープ・スチュワート	Starring……………Penelope Stewart
フランク・ウィットン	Bill Kerr
ビル・カー	Fiona Kay
フィオナ・ケイ	
1時間30分・カラー・35ミリ	

□監督プロフィール
'56年生。4世代に渡りニュージーランドで農家を営んできた家の出身。その知識が「ビジル」に反映されている。当初、画家・彫刻家を目指したが、美術学校在学中より映画制作を始めた。



西ドイツ フランツの自由

Eingeschlossen frei zu sein ('83)

クリスチャン・ワグナー

□解説

「言葉の前にイメージがある」とクリスチャン・ワグナーは語る。映画のラストに付された監督自らの言葉を思うと、一見矛盾しているようだが、ゲートを愛し、ヘルダーリンを愛するこの若きドイツの監督は、言葉をイメージの中に包みこむことで、イメージをつまりは映画をより強靱でのびやかなものにしてはいるのではないだろうか。実在の少年フランツの逃走は失敗するが、映画はそれを忠実に反復はしない。スクーターに乗って走る少年に自由のイメージを託したワグナーは、それが「イージー・ライダー」のような終わり方をすることは絶対に避けたかったと言う。フランツと少女との間には観客が期待するようなロマンスは芽生えない。が、出会ったことで、今までとは違う何かふたりには見えてきた筈だ。白黒の瑞々しい映像には、ヌーヴェル・ヴァーグの匂いがする。そして少年と少女の出会いと小さな旅はヴェンダースの映画に共通する新しい世界観を提示している。

□ストーリー

フランツは15歳の時から監獄を出たり入ったりしている。少年でも大人と同じ監獄に入れられるのがドイツの法律だ。フランツの入った監獄では、職業訓練も行なわれる。しかし、それが何の役に立つと言うのだろう。嫌気のさしたフランツは、監獄から脱走した。アンドレアは家を出た娘だった。ある日、スクーターに乗っているフランツと巡り合い、ふたりは工場跡の敷地に貨車を見つけて一緒に住み始めた。はじめは自分のことを語りながらなかったフランツだが、アンドレアの問いかけに、その境遇をボツリボツリと言いはじめた。フランツは母に会いたがっていた。しかし、いくら手紙を書いても母は監獄に会いにきてはくれなかったのである。彼は自ら会いに行く。だが、アパートのインターホンでフランツの声を聞くと、母は黙ってしまった。やるせなさを背負いながら、フランツはその足で警察に出頭した。



□スタッフ・キャスト	□STAFF・CAST
監督・脚本……………クリスチャン・ワグナー	Director, Screenplay……………Christian Wagner
撮影……………ハインツ・ペーター・ガイスター	Director of Photography……………Heinz-Peter Geissler
音楽……………フロリアン・ミュラー	Music……………Florian Müller
出演……………アンケ・ギュンツェル	Starring……………Anke Günzel
ハインツ・タンドラ	Heinz Tandler
52分・モノクロ・16ミリ	

□監督プロフィール
'59年西ドイツ、インメンシュタート生。ミュンヘン大学で演劇とドイツ文学を学び、8ミリの短編映画を撮る。「フランツの自由」は初の16ミリ作品。現在、独立プロで仲間と次回作準備中。



FOCUS'84に寄せて

サム・カツ SAM KATZ (FOCUSディレクター)

ここに、'84年度入選のショートフィルムを紹介できる幸をとても光栄に思っています。8回目に当たるニッサン・フォーカス入賞作品のほとんどが、若いアメリカのフィルム・メーカーによって製作・監督されたものです。

FOCUS (Films Of College and University Students) は、アメリカにおいて最大の学生のフィルム製作とスクリーンプレイのコンペティション。アメリカ・ニッサン・コーポの提供で、FOCUSでは、8部門の映画製作にあたって優れた成績を表す学生に、奨学金、賞金を授与し、その他諸々の協力を惜しみません。

FOCUSは、若く活気に満ちたフィルム・メーカーたちを支え続けたプロたちに審査されます。ぴあフィルムフェスティバルに参加するこれらのフィルムは、応募作品の中から1984年を代表するベストドラマとアニメーションとして厳選されたもの。すでに、シアトル・アート・フェスティバル、L.A.のメルニック劇場、イタリヤ、チューリンの第2回ヤング・フィルム・フェスティバル、マンハッタン・MOMA、ワシントンのスミソニアン協会・ハーシュホーン博物館で上映されています。

FOCUSドラマ部門のスポンサーであるニッサンモーターU.S.A.、S・スピルバーグのプロダクション・Amblin Entertainment、アニメ部門のスポンサー・ユニバーサル映画のおかげで、今回もこのプログラムを実現する事ができました。

これらのスポンサー、優れた審査員や映画祭理事、そして何よりも、この8年の間に受賞した多くのヤング・フィルム・メーカーのためにも、今回の上映を充分に楽しんでいただく事を心から願っています。アメリカの優秀な学生映画を、どうぞ見守り続けて下さい。

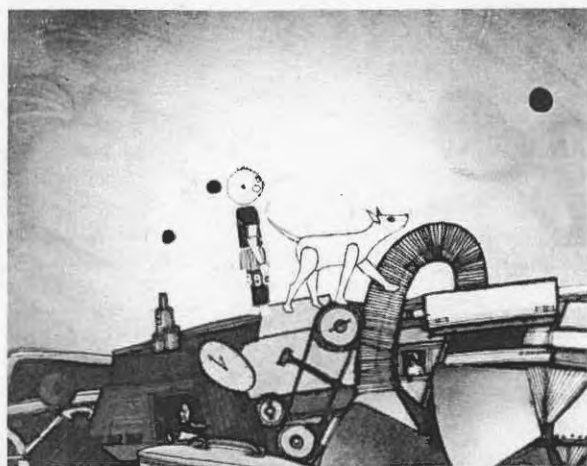
FOCUS'84各部門入賞作品リスト

- フィルム・メイキング部門
1位 MINORS(マイナーリーグ物語)
監督 アラン・キングスバーク
2位 FIVE OUT OF SIX(命中華%)
監督 ダニエル・タブリッツ
3位 LONG GONE CHARLIE(想い出のチャーリー)
監督 デビッド・デビッドソン
4位 THE BIG GARAGE
監督 グレグ・ピーマシ
5位 CATCH THE GOLDEN RING(金環)
監督 エリザベス・ストロー

小犬

PUPPY DOES THE GUMBO

キャサリン・ハードウィック



□スタッフ・キャスト
製作・監督……キャサリン・ハードウィック
撮影……ジム・マッキーチェン
音楽……マイケル・マッシュバー
振付……サンドラ・クリステンセン
Director, Producer, Animator……Catherine Hardwicke
Director of Photography……Jim McEachen
Music……Michael Mashbir
Dance and Choreography……Sandra Christensen

□解説・ストーリー
アニメーション部門では、第2位に入ったこの作品。カラフルなカラーと、実写を交えて制作したもので、ヒップ・ホップ調の音楽とビタリ融合した、いわゆる『ナウイ。感覚に仕上がっている。とある典型的なアメリカの居間(もちろんカラージュなのでかなりデフォルメされているが)の風景。ここにトムとメリーさんとでも呼べそうなカップルが椅子に座っており、そこへ小犬が入ってくる。その途端に、この居間の風景が、ガラリと様相を変える。置かれている物の位置がバラバラに分解され、突然ここは広大な宇宙へと飛躍。そこでこの小犬が、足を上げつつ、ポップな音楽に乗ってダンスを始めると、いつのまにか実写の部分へと移行し、オリエンタルやら、ブラックやら、ホワイトやらの面々がブレイクダンスに興じている……。ストーリーらしいストーリーはなく、丹念に構成された、ひとつひとつの映像が美しく、しかも相当に速いテンポで展開していく。殊に色には相当苦心したであろう跡がうかがえ、たかだか4分の作品ながらも、手の込んだ作業が偲ばれる。監督のキャサリン・ハードウィックは、建築デザイナーでもあり、彫刻家でもあるという経歴が、この作品には色濃く反映されていることは明らか。また、映像に合わせた音楽のセンスもなかなかのものである。

□監督プロフィール
テキサス大学オースティン分校を優秀な成績で卒業後、数年間、建築に従事する。1982年頃ロスに移り、アシスタント・ディレクター、彫刻家、アニメーターとして働き始める。U.C.L.A.で2作目の'I've always wanted an oriental girl friend.を完成。現在、'Road Girls.を製作中。
□メッセージ
「小犬」がそちらの映画祭でダンスすることをとても喜んでいました。有名な日本のデザイナーを見に行けないのは残念ですが、この作品を楽しんで下さい。



キャサリン・ハードウィック

金環

CATCH THE GOLDEN RING

エリザベス・ストロー



□スタッフ・キャスト
監督・脚本……エリザベス・ストロー
撮影……アーマン・ミネジアン
照明……キャロル・ホッジ
サラ・ロビンソン
コートニー・M・ブレイ
シーン……ショーン・リンチ
18分・カラー・16ミリ
Director, Writer……Elizabeth Storer
Camera……Armen Minasian
Lighting……Carroll Hodge
Sara Robinson……Courtney M. Pray
Sean……Shawn Lynch

□解説・ストーリー
今回のドラマ部門では、偶然ではあるが、10代前半の登場人物にスポットをあて、この時期特有の『感性』をさまざまな視点から捉えた作品が多いのが特徴的。この作品もそのひとつで、主人公となるのは12歳の少女、サラ・ロビンソン。パーティも佳境に入ったかのような賑わいを見せる、とある夜のロビンソン家を冒頭シーンに、大人だけで構成されているこのパーティに、寝つかれないサラが寝間着のまま現われるところは、この作品のテーマと相まってなかなか象徴的でもある。12歳という、そろそろ大人への第一歩を踏み出している少女の、『女性』への目ざめを、母親の浮気とからめて描いていく。お話しは、映画へ連れて行ってくれた、友達父親の車の中で、彼女は偶然、母親の金のネックレスを見つけてしまう。その事で母親の浮気を知った彼女は、母親をひとりの『女』として見ることに、大きなとまどいと反発を感じる。そんな中で、ボーイ・フレンドとのファースト・キスを体験。胸ときめかして待ちに待ったその一瞬も、あつけなく、終り、気の抜けたような表情のサラ。回転木馬、スピンするビン等、全線に回るイメージが懐かしさながら『めくるめく』のような感覚が直に伝わってくるような一篇。また、父母が仲よかった頃に反れるよう、願う少女の素直な心情も織り込まれている。

□監督プロフィール
各地でフィルム広告関係の音響、撮影などを経験。カリフォルニアに移り、学生映画製作の傍ら、映画、テレビのアシスタントを勤める。その中には『郵便配達は二度ベルを鳴らす』、『がんばれノベアーズ』などがある。U.S.C.卒業後は『The Bohemian Experience.』を編集、目下次作を構想中。今回の受賞は女性映画部門の初受賞と重なった。
□メッセージ
『金環』は、将来に向けて飛躍を試みる少女が、望むものは矛盾した家族の実状を知る物語です。子供と家族というユニバーサルなテーマに、日本の皆さんが共鳴されることを願います。



エリザベス・ストロー

想い出のチャーリー

LONG GONE CHARLIE

デビッド・デビッドソン



□スタッフ・キャスト
監督・脚本……デビッド・デビッドソン
脚本……ダイナ・ケイル・デビッドソン
撮影……フランク・プリンツィ
テイト・ファーレイ……ケン・イートン
ジョイ……P.C.ウィルソン
28分・カラー・16ミリ
Director, Screenplay……David Davidson
Screenplay……Dinah Quayle Davidson
Director of Photography……Frank Prinzi
Tate Farley……Ken Eaton
Joy……P.C. Wilson

□解説・ストーリー
わずか2週間という短い期間で撮り上げたこの作品は、その後2年余りに及ぶ編集作業を経て完成させたという労作。これは特異なケースという訳ではなく、卒業製作にあたっては、これくらいの時間とお金(資金調達)の困難さを乗り越えるのも大きな試練をかけて『当り前』と考えるのが、昨今の米学生映画界の実情でもある。こんな状況の中からは『産み、だされる作品への感慨もひとしおで、しかもそれが何等かの賞をとるともなれば、すべての苦勞も報われるというもの。かくいうこの作品も FOCUS 以外に、いくつかの賞を獲得している。物語はひとりの船員、テイトが数年ぶりに帰郷するところからスタート。かつての恋人がいるバーを訪ねた彼は、彼の彼女との旧交を暖める。時々、彼の脳裏を今は亡き父、チャーリーの想い出がよぎってゆく。それらは、冷たくつき放すかのようにいつも怒鳴っている、父の姿ばかりでしかない。去っていく父を、放心したように見つめ、佇む幼い頃の自分。愛情のひとかけられさへも受けられなかった、子供時代が、チャーリーの想い出とともに甦ってくる。そんな中でテイトは彼女に、求婚するがことわられてしまう。求めて拒まれた心の痛みと共に、埋葬するために送った父の柩を前にした彼は、『なぜ死んだの』と、唯号泣するだけであった……。

□監督プロフィール
イリノイ大学でB.A.(大学)、ニューヨーク大学でM.F.A.(大学院)を取得。Warner Communication Fellowshipの協力で、これは15日で撮影を終え、2年をカットに費やし完成。その他の短編として『The Bootlegger.』、『Part of the Concept.』がある。現在、1950年代の音楽プロデューサーを描いた作品を準備中。
□メッセージ
日本の皆さんに見ていただけたことは、とてもエキサイティングです。今後アメリカで日本の若い映画作家の作品を見ることを楽しみにしています。



デビッド・デビッドソン

命中率5/6 FIVE OUT OF SIX

ダニエル・タプリッツ



□スタッフ・キャスト
製作・監督・脚本・編集……
ダニエル・タプリッツ
音楽……デプログラーズ
アレックス……スティーブ・ハラ
ブライアン……ジョン・リグイザモ
23分・カラー・16ミリ
Producer, Director, Writer, Editor
Daniel Taplitz
Original Music……The Deprogrammers
Alex……Steve Hara
Brian……John Leguizamo

□解説・ストーリー
ふたりの登場人物だけで展開する物語。ひとり田舎の農場で暮らす14歳の少年、アレックス。もうひとり、一家の鼻つまみ者で一時、親戚であるアレックスの家へと預けられている少年、ブライアン。このブライアンはN・Yの無法地帯とも呼ばれるブロンクスからやってきており、常日頃から自分がハンパなアウトローでない「タフ・キッド」で、しかもガンは6発中5発はあたる腕前と豪語している。こんなブライアンの「タフネス」さには魅惑を感じているアレックスだが、その一方で、牛の世話をしている彼の姿に、何かしらユーモラスな一面も見ている。そんなある日、ガソリンスタンドを襲うという夢を語るブライアンに、それでは手始めにガンの腕前を見せてもらおうと、アレックスは父親の拳銃をこっそり持ち出す。さて、ブライアンの腕前は？ 残念ながら玉ははとんでもない方向へ。なじるアレックスにブライアンは、「何だよ、このカッパが」。アレックスも負けず、「何だよ、このツッパリのヘッポコ野郎！」と、とっ組み合いのケンカが始まる。が、それも一段落するうち、2人の間に奇妙な友情感覚が芽生えてきた……。必要以上に背伸びをしようとする思春期の一面と、少年2人の共感を、ほのぼのとしたタッチで描写。主演2人の演技が光る。



◇ダニエル・タプリッツ

マイナーリーグ物語

MINORS

アラン・キングスバーク



□スタッフ・キャスト
製作・監督・脚本・編集……
アラン・キングスバーク
撮影……リディア・ピルチャー
サンディ・ダグラス……ノラ・ブラディ
トミー・ドラマー……エディ・シボット
30分・カラー・16ミリ
Producer, Director, Writer, Editor
Alan Kingsberg
Director of Photography……
Lydia Pilcher
Sandy Douglas……Nora Brady
Tommy Drummer……Eddie Cipot

□監督プロフィール
N.Y.のホレス・マン・ハイスクール時代に映画を作り始める。「マイナーリーグ物語」は彼の4作目。ペンシルヴァニア大学で経済学を専攻。卒業後、映画製作のためにN.Y.に移転。この時代の作品に「Little Dancer..」、「Long Strange Trip..」がある。その後、今回の「マイナーリーグ物語」を製作。最近ではプロ・ハンドボールの映画「Killshot」の監督として契約したばかり。

□メッセージ
熱狂的野球ファンの多い日本でこの短編が上映されることを非常に光栄に思っています。私を含めて、我々フィルムメイキングの仲間を招待して下さい「びあ」に感謝しています。



◇アラン・キングスバーク

□解説・ストーリー
米国のニュー・イングランド地方のひとつ、コネチカット州が舞台。ここにあるマイナー・リーグに在籍するトミー・ドラマーは、速球を得意とするピッチャーだが、成績はいまひとつ。自分の速球を過信する傾向もあり、もっと頭をつかて投げろと、コーチからもさんざん言われている。所変わって、ここは市内の中学校。14歳の少女、サンディは「野球狂」で、学年末に提出する理科のレポートにも身が入らず、先生から厳しく注意を受ける。放課後、足が自然と球場へと向いた彼女は、トミーが練習しているロッカー・ルームへフラリと入る。ここで彼女は、トミーが投げようとする球の種類をあて、更には翌日に予定の試合で、対戦相手の弱点やピッチング方法まで述べるに及んで、トミーを呆然とさせる。それがきっかけでふたりは意気投合。トミーはメジャーでも通用する才能がある、と信じているサンディと、かねてよりそれを望んでいるトミーがふたりして、ドラマーのカーブ、なる新ピッチング法を編み出していく。巨人の星。的苦難よりははやや軽いが、何とか新しいカーブをモノにしたトミーは、日の出の勢いで活躍し、とうとうメジャー入りを果たす。一方、サンディはレポートが提出できず、あやうく落第しかけるが……。14歳の少女の淡い初恋体験を、娯楽色たっぷりの演出で綴る。

「新人類の映画」前史をめぐる走り書

松田政男

表紙に麗々しく「新誌面2年目へ」と謳った「朝日ジャーナル」が、筑紫哲也編集長をホストとする連載対談を「若者たちの神々」から「新人類の旗手たち」へと移行させたのを見て、私は思わず莞爾としたものだ。その「新人類の旗手」のひとりと自稱するTVプロデューサーの田口賢司によって発せられたマニフェストが、「連帯」から「癒着」へ、進歩から進化へ、才能から自信へ、反省から断定へ、ideal boy 観念男からmaterial girl 唯物女へ、思考のパラドックスから思考のスクラッチへと何やら新奇な6つのスローガンを掲げながらも、結局のところ「速い資本主義は健在だ」と陳腐な現状肯定に陥ってしまっているからか？ そうではない。

そうではなくて、新連載開始以来、ゲームデザイナーの遠藤雅伸、エディターの中森明夫、ピアニストの小曾根明、ダンサーの木佐貫邦子、漫画家の原律子と多彩なジャンルにわたる20代の「新人類」が続々登場したのに遙か先行して、こと映画に関する限りすでに6年も前から「新人類」が出現していたからである。そう、PFF（ぴあフィルムフェスティバル）の一般公募部門が現行の審査方式に切り換えられた1979年に、かわなかのぶひろ審査員が「まるで新人類の映画を見る思い」といみじくも驚嘆したように、まずもって今関あきよしの「ORANGING'79」を筆頭に、以降「新人類の映画」が誕生しつづける現場に私もまた立ち会いつづけたのだ。そのタイトルに自ら'79と刻印することによって、期せず「新人類の映画」のモニュメントとなった今関あきよしの快作をめぐって詳述する余裕のないままに私自身の初発の感動のみを書き留めておくと、僅々25分ほどの短篇のラスト近く、いつも何かに驚いているような表情をしているヒロインの三留まゆみが、「私、この映画で泳いでアメリカに行くですって」とか何とか言いながら、稚い水着姿に防水ザックを背負い浮袋につかまって江ノ島あたりの海岸からザンブとばかり水に飛び込んだのを見て、私もまたヒロイン以上に吃驚せざるをえなかったのである。映像の虚実を超えて、わがヒロインは本当にアメリカまで泳ぎ着かんばかりに健気で、愛しかったからだ。

この「ORANGING'79」をためらうことなく推薦した大林宣彦審査員ならずとも、そこ

には「作者の個人的な想いが見事に客体視されて」おり、「その緊張感が映画を見ている間じゅう持続して、まことにこちよ」と言いたくなるわけで、思えば以降の6年間にわたってPFF一般公募部門の主軸となってきた〈高校生映画〉の最初の作家として今関あきよしは出現してきたのである。そしてこの「ORANGING'79」の画面にはやはり〈高校生〉作家だった手塚真もまた登場し、その短篇「UNK」もまた大林宣彦によって推薦されていることを考え合わせると、現在にいたってなお開花しつづけている「新人類の映画」の初期のかたちが見えてくることにもなる。だがしかし、ここではお先走りしはしばらく慎もう。年代記の目盛りをもう少しだけ過去へズラして、「新人類の映画」発生の前史へと溯らねばならないからだ。

私をして言わしむるならば、「新人類の映画」第一号は1973年秋に完成—公開された原正孝(現・将人)の大作「初国知所之天皇」である。原正孝はすでに高校生当時の1968年に「おかしさに彩られた悲しみのバラード」を16ミリで製作して、〈フィルムアートフェスティバル'68〉でグランプリを獲得するなど早熟の天才を基礎とする〈制度〉としての上映時間を平然として無視した。当時、私が書き留めておいたように、当初の上映予定時間が4時間半、しかし実際に映写が始まってみるとプロジェクターが回っている間だけでも5時間以上、フィルムかけかえや何やら生理的必然としての休憩時間をも入れると6時間ないしは7時間、しかも自ら映写技師を相務める原正孝自身の興が乗るや緩急自在にプロジェクター自体がコントロールされて軽く10時間に及ぶという難行苦行を私たち観客は強いられたのである。

当然にも「初国知所之天皇」は映画館はおろか通常の上映空間とは自ら相容れず、確か最初の公開は東京・渋谷の喫茶店を借りて、その2階の細長いスペースで文字通り朝から夜中まで映写されつづけたと記憶する。そして先述したように、作者であり出演者でもあ



◇ORANGING'79

る原正孝は自ら映写技師を買って出たばかりか、のちに再映三映されるにいたるや〈ライブ版〉として自らナマ演奏をも試みるといった具合に、チャップリンも三舎を避けるスーパーマンぶりを発揮するのだ。まさしく「新人類」の嚆矢と呼ぶべきではないか。当時、私自身が捧げたオマージュの一節を以下に引いておこう。

「……3年前、いわばメロドラマとしての『初国知所之命』を企意して、北から南への列島縦断の途次、北海道ロケのみで挫折を余儀なくされた若書きのフィルムは、いかにもゴダールふうな〈引用〉として今回の大作のなかに再生される。ただしこの〈引用〉、本文は8ミリなのに引用文は16ミリ、メカス兄弟の初期フィルムのように同位ではなく、ポイントが上っているのが面白く、しかも原は、素朴なドキュメンタリーの旅によって豪華なフィクションの夢を否定し去ろうとするのだ」(『キネマ旬報』'73年10月上旬号)

ところで、この「初国知所之天皇」が出現した1973年という年は、日本の映画状況にとって字義通りの創期ともなるべき年であった。まずこの年の夏、'60年代から'70年代へかけて常に〈作家の映画〉の最先頭を走りつづけてきた大島渚らの創造社が、「独立プロは役割を終えた」と自ら断定して自己解体する。以降、大島渚は'76年の『愛のコリーダ』で再起するまで、長い空白を余儀なくされるであろう。さらに同じ頃、独立プロのもう一方の雄・小川プロもまた三里塚の戦野から東北の一角に本拠を移して、新しい模索の道を歩みはじめる。『牧野物語』シリーズの先駆ともなるべき『クリーンセンター訪問記』が完成するのは、やはり3年後の'76年だ。もうひとつ付け加えるならば、ピンク映画と俗稱される領域で時代を牽引してきた若松プロも、若松孝二自身

ない。きみたちは、果して、異化と分裂と反感による映画体験をも、映画を愛することに転化するのか?—こうして2年後の1975年秋、原正孝改め原将人を軸とする「自主」上映運動の試みとして、〈シネマ・エクスプレスウェイ〉が開設されるのはむしろ運命的でさえあった。以下、当時の記録をひもときながら、初めて運動態として出現した〈シネマ・エクスプレスウェイ〉の軌跡をたどり直してみることにしよう。

原将人・後藤和夫・小林竜雄・大久保賢一ら「ニューシネマ・エクスプレス」同人によって運営された〈シネマ・エクスプレスウェイ〉は、1975年11月8日の『初国知所之天皇』上映を皮切りに、翌76年7月末日をもって自閉を余儀なくされるまでの9ヵ月間、ほんの1、2回を除いて毎週土曜日に開設されつづけた。東京・神田の神保町と駿河台下の中間あたりの小さなビルの2階に、当時、私の年少の友人だった津村喬らがACC（アジア文化センター）を開館した折に映像部門での協力を求められたのがきっかけで、おそらくは往年のアンダーグラウンドセンターによるシネマテークから現在のイメージフォーラム・シネマテークへといたる流れを除いては、誰しもが夢想しながら誰しもが実現しえなかった「自主」上映による〈常設館〉の試みが、当事者たちの対応を上回るスピードで現実化してしまっただけである。第二年度における自閉もまたそのスピードとの違和が然らしたものののだが、それはともかく、9ヵ月の間に上映された主なプログラムをあげておくと、まず先述のように原将人の『初国知所之天皇』が第一回はもとより以降も旧作『おかしさに彩られた悲しみのバラード』や新作『アクトの旅』をも含めて繰り返し上映されることとなり、さらに同人側からは後藤和夫の『ハードボイルド・ハネムーン』『少女』、小林竜雄の『御巫の頭のスープ』も繰り返し登場している。以下、個別の作者名と題名をのみ上映順に列記すると、橋浦方人の『置けない日々』、大森一樹の『暗くなるまで待てない!』、故・青山定司の『信夫翁』、高嶺剛の『オキナワン・ドリーム・ショウ』、藤沢勇夫の『パイパイラブ』、伴陸人の『カレンダークレイム・黄色い銃声』などがあり、これにやはり嘗々と「自主」上映をつづけてきたハイログループとのドッキングによる短篇群のなかから森田芳光の『天気予報』をもピックアップしておけば、もって当時の「自主」映画の水準が窺い知れるというものだろう。さらに初期の8ミリ習作をも含めた個展形式による

「全作品」上映となると、大先達の大林宣彦はじめ大森一樹・伴陸人・原将人・後藤和夫らのほかに未だ20代そこそこの長崎俊一の名前が早くも見えて、『25時の舞踏派』『寝をぶっ殺せ!』『造花の枯れる季節』が一挙上映されている。

面白いのは、時代の要請と言うべきか、この1975年秋には関西でも『べえばあばつく』同人を中心に〈プレイバック・ニューシネマシアター〉が開設されて、大森一樹はむろんのこと『行く行くマイトガイ・性春の悶々』なるピンク映画を35ミリで「自主」製作してしまっただけでなく、村上知彦・高橋聡・木村均・高木敏三・西村隆らと共に見えて、東西押呼応しながら新しい観客との出会いを懸命にまぎわっていることであろう。私としてはいまほとんど10年以前の古いチラシやパンフレットの類を引っ張り出して、昔も今も気鋭の作家群の名前を書き移しつつ懐旧の念に浸るという以上に、橋浦方人・大森一樹・森田芳光・井筒和幸・長崎俊一・高嶺剛らが一斉に35ミリの大画面へと巣立って行く現場に立ち会えたことに、私と共に影の産婆役を務めた日比野幸子や大久保夫人の森山京子ともども祝杯をあげたくなっているところだが、むろんのこと新しい観客と出会い、そしてその新しい観客ともども、わが作家群が邦画ニューウェイヴの波頭を高めて行くためには、さらなる媒介項を必要としたのだ。結論から言おう。それは大林宣彦の存在である。

1977年の『HOUSE・ハウス』を劇場用の35ミリ第一作として、以降まさにスーパーマンさながらに撮りまくって、この現在の時点でも『さびしんぼう』が公開中、『四月の魚』が特撮中、『姉妹坂』が撮影中、『彼のオートバイ、彼女の島』が準備中と過密スケジュール下にある大林宣彦を知っている人びとには信じ難いことかも知れないのだが、1976年初頭に〈シネマ・エクスプレスウェイ〉で8ミリないしは16ミリによる「全作品」上映が実現した時点においては、「何かカメラ持ってフィルム詰めてみても何も撮れないんだよ」と自ら苦衷を述べざるをえないほど、大林宣彦は落ち込んでいたと言っている。そのことを如実に示すものとして、この「全作品」上映に前後して発刊された『日本の個人映画作家2』から大林宣彦自身のモノローグを引いておけば「我が国の映画のかくも夢も希望もない現状を考えれば、要するに、監督さんたちは誰も、夢なんか信じちゃいない」ということになる。そう、ここにおける「監督さん」とは、あくまでも客体でしかないのだ。さらに引こう。

「ぼくらのつくる、こんなちっぽけな、こんなに安い、まるで玩具のような映画でも、ほら、こんなに面白く、こんなに楽しく、こんなに活き活きと、まあまるで映画そのものなのに、かつてぼくらに夢見させ、ぼくらの人生の豊かな部分を育て、希望すら与えてくれたあなた、映画そのものは、いまや企業の奴隷となり果てて仮死状態。ね、もう一度自信をもって、あなた自身を考え直してみたら如何かしら。映画ってほんとうは、もっともっと活力に満ちた素晴らしいきものだった筈だよ」

読めばわかる通り、ここでもまた映画は「仮死状態」として客体化されているばかりか、「素晴らしいきもの」としての映画を再生させるべき主体もまた、ここでは未だ他人任せになっているのではないか。にもかかわらず大林宣彦はその絶望的なモノローグに「今、個人映画は、ハリウッド映画をめざす」とのタイトルを冠することで、さしあたり〈シネマ・エクスプレスウェイ〉ないしは〈プレイバック・ニューシネマシアター〉に結集した若い世代へのメッセージとせざるをえない。いや、これは逆に〈シネマ・エクスプレスウェイ〉での「全作品」上映を機に、CFの世界へと沈潜していた大林宣彦が若い映像世代のほうへと再び三たび帰還してきて、新しい観客との出会いを自ら模索しはじめたと言え換えるべきなのかも知れない。私もまた大林テーゼを「今、個人映画はハリウッドをこわす」と改作して論戦に加わり、これを要するに〈シネマ・エクスプレスウェイ〉は76年夏の自閉後も、来たるべき飛翔に備えてスタンバイしつづけたのである。

こうして、1977年夏、大林宣彦は『HOUSE・ハウス』を東宝で撮る一方で、自ら日本のロジャー・コマンたらんことを宣言して、やがて邦画ニューウェイヴと呼ばれるであろう人びとへのよき水先案内人の役割を果たして行く。さらにその前年、今村プロから日活へとフリーの助監督修業を務めてきた長谷川和彦が20代最後の年に、文字通りの大形新人として『青春の殺人者』を引っ下げてATGから登場、キネマ旬報ベストワンはじめ多くの賞牌に輝いたこともまた映画作家の世代交替の機運を促して、77年に製作され78年初頭には日本映画監督協会の新人賞に輝いた橋浦方人の『星空のマリオネット』を筆頭に、邦画ニューウェイヴが高揚して行くことになるのである。その最初の指標は独立プロから「自主」映画へと言いつつも、これまでATGの枠を超ええなかった若い映像世代によるメジャーへの初進出として、長く記憶されるに値する大森一

樹の『オレンジロード急行』であった。

1977年暮に城戸賞を獲得した『オレンジロード急行』を脚本作者である大森一樹自身に監督させようという最初の発意が、失礼ながら動脈硬化症状を呈しているとか思えない老大国・松竹の奈辺から生じたのか、今となっては確かめるすべもない。確かなことはただひとつ、日本映画の好況期にいわば撮影所を学校として育った世代がヒエラルキーの階段を一步一步這い上って、助監督から監督へとようやく昇進した時代が今や去って、日本映画の不況期にまぎわって映画館をこそ学校として映画を学ぶしかなかった新しい世代が、むろんのこと8ミリないしは16ミリによる映画体験はあるにせよ、一介の観客からいきなり自ら監督を名乗りうる時代が始まったということだろう。これは大森一樹に後続して、さしあたり沢井信一郎や三村晴彦のように第一作にしてベテランの風格をもっているケースが多くなる。

さらにフリーの助監督出身者ともなると相米慎二・柳町光男・横山博人・小栗康平・梶間俊一・川島透・崔洋一ら枚挙にいとまがなく、これにピンク映画の悪条件に耐え抜いてきた中村玄児・高橋伴明・和泉聖治らを筆頭に磯村一路・福岡芳穂・水谷俊之・米田彰・周防正行らユニット5勢、広木隆一・石川均ら幻児プロ勢、西田洋介・滝田洋二郎・片岡修二ら獅子プロ勢をも加えると、ピンク映画もまたニューウェイヴの潜勢力をなしていることがよくわかるであろう。このことを如実に示すのが長谷川和彦が率いるディレクターズ・カンパニーの構成で、長谷川・相米がフリーの助監督、根岸・池田が日活、高橋・井筒がピンク映画、大森・石井・黒沢が「自主」映画出身と、実に絶妙のバランスではないか。

—紙数が尽きかけたので以下は文字通りの走り書きとなるのだが、大森・石井の登場はまた逆にメジャー各社が撮影所で育て上げた助監督たちを一気に監督昇進させる道を開いて、これにフリーの立場で現場の研鑽を重ねてきた助監督たちの進出をもあわせると、ここ数年の邦画の活況は撮影所内外の若い映像世代に委ねられていることが窺取されるであろう。その先陣を切って、当時27歳の根岸吉太郎を監督昇進させた日活の場合、ロマンポルノの量産体制を維持するためにも新人登用に最も熱心で、70年代から80年代にかけて助監督修業を積んだ斎藤信幸・伊藤秀裕・黒沢直輔・池田敏春らから最近の中原俊・那須博之・金子修介らまで、につかつロマンポルノのヘゲモニーは完全に新進監督に移行したと言っている。これが松竹・東映・東宝



HOUSE・ハウス

ともなると'60年代後半以降、助監督公募を中止していたツケが今になって回ってきて新人監督と言っても必ずしも若くはなく、むろんその分だけ澤井信一郎や三村晴彦のように第一作にしてベテランの風格をもっているケースが多くなる。

さらにフリーの助監督出身者ともなると相米慎二・柳町光男・横山博人・小栗康平・梶間俊一・川島透・崔洋一ら枚挙にいとまがなく、これにピンク映画の悪条件に耐え抜いてきた中村玄児・高橋伴明・和泉聖治らを筆頭に磯村一路・福岡芳穂・水谷俊之・米田彰・周防正行らユニット5勢、広木隆一・石川均ら幻児プロ勢、西田洋介・滝田洋二郎・片岡修二ら獅子プロ勢をも加えると、ピンク映画もまたニューウェイヴの潜勢力をなしていることがよくわかるであろう。このことを如実に示すのが長谷川和彦が率いるディレクターズ・カンパニーの構成で、長谷川・相米がフリーの助監督、根岸・池田が日活、高橋・井筒がピンク映画、大森・石井・黒沢が「自主」映画出身と、実に絶妙のバランスではないか。

とすると、私にとっての残る問題はただひとつ、文字通り「新人類の旗手」第一号たるべき原将人に、35ミリの長篇第一作をぜひにも撮ってもらいたいということに尽きる。なぜか多忙の由で、大林宣彦と共に直前になってPFF一般公募部門の審査を辞退してしまった原将人よ、懸案のSF大作『マザー・ツリー』の準備は進んでいるか? かつて志を同じうした者として、改めて応答を待っている。

(まつだ・まさお 映画評論家)

・プレミア上映・

Bumpkin Soup



ドレミファ娘の血は騒ぐ

黒沢 清
KIYOSHI KUROSAWA

□スタッフ・キャスト
製作：ディレクターズ・カンパニー/後EPICソニー 監督・脚本：黒沢清 脚本・助監督：万田邦敏 撮影：瓜生敏彦 編集：菊地純一
出演：洞口依子/麻生うさぎ/加藤賢宗/伊丹十三/岸野蘭丸/藤野宏/新田芳/原由美/久保田祥子/清水俊行/小中和哉 カラー・35ミリ

□監督プロフィール
'55年兵庫県生。立教大学在学中、万田邦敏らと「パロディアス・ユニティ」を結成。卒業後、長谷川和彦の「太陽を盗んだ男」や相米慎二の「セーラー服と機関銃」の助監督を務める。'82年、ディレクターズ・カンパニー結成に参加。'83年、初の35ミリ「神田川淫乱戦争」を監督。今回の作品は、にっかつ作品「女子大生・恥ずかしゼミナール」を「ディレ・カン」が買い取り、大幅に改作して完成した。

□解説・ストーリー
憧れの人を慕って上京した田舎娘は、意中の彼の愛慕ぶりに戸惑う。彼女は大学教授と親密になるが、その教授も人体実験の失敗で死亡してしまう……。映画の方向性を暗中模索しながらの撮影で、今や全ての映画はスライス映画を目指すしかないと言った、新鋭・黒沢清監督の劇場用長編第2作。

暗くなるまで待てない! ('75)

We can never wait until dark

大森一樹
KAZUKI OHMORI



□スタッフ・キャスト
製作・脚本：村上知彦 監督・脚本：大森一樹 撮影：高橋裕
出演：稲田夏子/南淳泰造/折岡章/村上知彦 1時間10分・パートカラー・16ミリ

□監督プロフィール
'52年大阪府生。高校2年から製作活動開始。大学入学後、'72年から「ない!」シリーズを製作。「暗くなるまで待てない!」('75)まで3本を数える。'77年「オレンジロード急行」が成戸貫入選。翌年松竹で映画化。注目される。以後、「ヒポクラテスたち」('80)、「風の歌を聴け」('81)、「すかんぴんウォーク」('84)、「ユー・ガッタ・チャンス」('85)を監督。新作は「法医学教室の午後」(TV)。

□解説・ストーリー
「映画は暗くなってから始まる。けれどもぼくたちは暗くなるまで待てない!」子供の時が終わっても、夢を抱いて映画と共に生きて行くことを宣言した、大森の記念碑的作品。

ユキがロックを棄てた夏 ('78)

The Summer Yuki gave up rock music

長崎俊一
SHUNICHI NAGASAKI



□スタッフ・キャスト
監督・脚本：長崎俊一 脚本：江浜哲寛 撮影：上野謙一
出演：内藤剛志/仲井千雅/佐藤百起/青木達太郎 1時間10分・モノクロ・16ミリ

□監督プロフィール
'56年神奈川県生。'75年、第1作「25時の舞踏派」製作。同年、日大芸術学部入学後、プロダクション爆を主宰し、精力的に活動。'78年「ユキがロックを棄てた夏」で注目され、'82年に初の35ミリ「九月の冗談クラブバンド」が公開。その直後製作の8ミリ「闇打心臓」は、'84年エジンバラ、ロンドン両映画祭に出品。その時ロンドンで撮った「London Calling」が先頃公開された。

□解説・ストーリー
ロックを棄てて、メジャーを目指すユキと、彼女を引き戻そうとする元マネージャーとの確執が生む過激なバイオレンス。日活ニュー・アクションの後継者、長崎の本領発揮。

風たちの午後 ('80)

No afternoon for the wind

矢崎仁司
HITOSHI YAZAKI



□スタッフ・キャスト
製作・脚本：長崎俊一 監督・脚本：矢崎仁司 録音：鈴木昭彦
出演：綾せつこ/伊藤奈緒美/杉田謙志/阿竹真理 1時間45分・パートカラー・16ミリ

□監督プロフィール
'56年山梨県生。日大芸術学部卒。'75年、長崎俊一など後のプロダクション爆のメンバーと「風龍夢企画」を結成。同年、処女作「悪意」(8ミリ)を作る。'76年、「冬の光」(8ミリ)を監督。その後、長崎俊一監督作品「ハッピーストリート裏」に助監督として参加。'80年の「風たちの午後」で一躍、脚光を浴びる。現在、16ミリ長編を製作準備中である。

□解説・ストーリー
ルームメイトの女性を愛してしまっただけ。彼女の異常なまでの愛の確執を、キメ細やかな日常描写で綴った、異色作。矢崎独自の表現方法が画面に緊張感を生んでいる。

狂い咲きサンダーロード ('80)

石井聰互
SOGO ISHII



□スタッフ・キャスト
製作・脚本：秋田光彦 製作：小林敏 監督・脚本：石井聰互

□監督プロフィール
'57年福岡県生。日大芸術学部中退。'77年「狂気」を結成し、8ミリ「高校大パニック」を監督。8ミリ映画賞を総ナメにしたこの作品を、翌年日活で沢田幸宏と共同監督で35ミリとしてリメイクした。'80年、16ミリ「狂い咲きサンダーロード」が、35ミリにブローアップされて全国公開。'84年の「逆噴射家族」は、ベルリン映画祭に出品、世界的に注目を集めている。

Crazy Thunder Road

出演：山田辰夫/南条弘二/小林稔侍/北原美智子/山野上智子 1時間38分・カラー・16ミリ



□解説・ストーリー
ロックサウンドにのせて、あくなき抗争に明け暮れる暴走族たちの姿を、ハードなタッチで描くヴァイオレンス・アクションの傑作。'80年度キネ旬ベスト・テン第9位。

天使のはらわた・赤い淫画 ('81)

池田敏春
TOSHIHARU IKEDA



□スタッフ・キャスト
製作：結城良照 監督：池田敏春 撮影：前田米造 音楽：甲斐八郎

□監督プロフィール
'51年山形県生。早稲田大学卒業後、'74年日活入社。曾根中生、西村昭五郎らの助監督を務め、'80年「ステパンマフィア・肉刑」で監督デビュー。「性持人・セックスハンター」('80)、「天使のはらわた・赤い淫画」('81)等を監督の後、'82年につかつを退社。ディレクターズ・カンパニーの結成に参加する。その後の作品は、「人魚伝説」('84)、「湯殿山麓呪い村」('84)など。

Negative Love

出演：泉じゅん/栗田洋子/藤岡修/阿部雅彦/伊藤京子/三谷昇 1時間7分・カラー・35ミリ



□解説・ストーリー
不本意にもビニ本のモデルになってしまった女の孤独と絶望を鮮烈に描く。池田敏春の出世作。その流麗な映像美と、対象を捉える鋭利な視点、官能描写などが透逸な一篇。

の・ようなもの ('81)

森田芳光
YOSHIMITSU MORITA



□スタッフ・キャスト
製作・企画：鈴木光 企画・監督・脚本：森田芳光 撮影：渡辺真

□監督プロフィール
'50年神奈川県生。日大芸術学部卒。原将人の影響を受け、製作を開始。'78年の8ミリ「ライプイン茅ヶ崎」で各方面の注目を集め、'81年「の・ようなもの」でメジャーの仲間入り。'82年、アイドル映画からロマンポルノまで3本を撮り、翌年「家族ゲーム」が絶賛的となる。以後も「ときめきに死す」('84)「メインテマ」('84)を監督。新作は「それから」(今秋公開予定)。

Something like Yoshiwara

出演：伊藤克信/秋吉久美子/麻生えりか/尾藤イサオ/でんでん 1時間43分・カラー・35ミリ



□解説・ストーリー
「ライプイン茅ヶ崎」など多くの8ミリを制作してきた森田芳光が、マイナーとの訣別を宣言した劇場用映画第1作。落語家と彼を取り巻く人々の日常を描いたニューコメディ。

闇のカーニバル ('81)

山本政志
MASASHI YAMAMOTO



□スタッフ・キャスト
製作：伊地知徹生 製作・監督・脚本・撮影：山本政志

□監督プロフィール
'56年大分県生。明治大学中退。処女作「看守殺しの序曲」('79、8ミリ)を製作。'80年、飯田譲治らと「斜眼帯」を決定。同年製作の「聖テロリズム」が注目される。'82年、初の16ミリ「闇のカーニバル」が翌年、ベルリン映画祭などで好評を得る。以後、「うぎ・ぶぎ・うっさん」「フロムンPART1、PART2」「TANPON TANGO」(全'83-VTR)を監督。現在35ミリを準備中。

Carnival in the dark

出演：太田久美子/桑原延亮/中島稔/前田修/山口千枝/室井滋 1時間48分・パートカラー・16ミリ



□解説・ストーリー
夢と現実が交錯する街、新宿を舞台に、手持ちの女性ロックシンガーと都市の暗闇に棲息するアウトローたちとの一夜の出来事を、アナキーなライブ感覚で描写している。

痴漢電車・百恵のお尻 ('83)

滝田洋二郎
YUJIRO TAKITA



□スタッフ・キャスト
監督：滝田洋二郎 脚本：高木功 撮影：志賀葉一 編集：酒井正次

□監督プロフィール
'55年富山県生。高校卒業後のあてどない2年間を経て、20歳のときに向井プロに入社。向井寛、山本晋也、渡辺謙監督らの助監督経験を積んだ後、25歳で監督デビュー。以来、監督作は20本に及び、向井プロの後身、獅子プロの後夫としてピンク映画界に軽やかな旋風を巻き起す。「真夏の切り裂き魔」は本年度ズームアップ映画祭ベスト1。一般映画を鋭意、準備中。

Momoe Scandal

出演：蟹谷次郎/竹村祐佳/山内百恵/藤本かおる/中曾根金策 1時間4分・カラー・35ミリ



□解説・ストーリー
変態探偵・黒田一平と美人助手浜子のコンビがテレビ局で起こった怪事件に挑む好色ミステリー。山口百恵、江川選手などの名前を使い、芸能界の内幕を鋭い風刺で綴る。



100%の女の子

パン屋襲撃('83)/100%の女の子('83)

山川直人
NAOTO YAMAKAWA



□監督プロフィール
'57年愛知県生。早稲田大卒。在学中は、早大シネ研に所属。'78年「ビハインド」がPFFに入選。監督作多数。今回の2作品はエジンバラ、ロンドン両映画祭で上映、好評を博す。現在、次回作を準備中。

□パン屋/スタッフ・キャスト
監督・脚本：山川直人
撮影・照明：手塚義治
出演：藤岡太朗/趙方豪
17分・カラー・16ミリ

□解説・ストーリー
現代の若者の生活感覚を、彼独自のインテリ口調と軽いジョークで綴った小品。

Attack on a bakery
A girl, she is 100%

□100%/スタッフ・キャスト
製作：加藤雅博 監督・脚本・撮影：山川直人
出演：隈本吉成/室井滋
12分・カラー・16ミリ

□解説・ストーリー
PFF'84の入選作品。大量の写真駆使したアニメ撮りの手法で見せる、悲しい愛の物語。



変態家族・兄貴の嫁さん('84)

周防正行
MASAYUKI SUOH



□監督プロフィール
'56年東京都生。立教大学在学中、高橋伴明の助監督に就き、以後81年以降の伴明ピンク映画のほとんどに参加する。卒業後、伴明初の一般映画「TATOO <刺青あり>」の助監督を務め、それをきっかけに気鋭のピンク映画監督たちと「ユニット5」を結成。昨年、監督第1作「変態家族・兄貴の嫁さん」を撮り、本年度ズーム・アップ映画祭3位の評価を得る。

□スタッフ・キャスト
監督・脚本：周防正行 撮影：長田勇市 照明：長田達也

A Daughter-in-law
(元題：お嫁さん日和)

出演：風かおる/下元史朗/大杉漣/山路美貴/麻生うさぎ/首藤
1時間2分・カラー・35ミリ

□解説・ストーリー
結婚して夫・幸一の家族と一緒に暮らすことになった百合子だが……。小津安二郎的な表面は平穏な庶民生活に、濃密なボルノムードを加えて描いた俊英・周防の異色編。



見えない('85)

利重剛
GO RIJU



□監督プロフィール
'62年東京都生。成蹊大学文学部中退。高校の頃から活発に8ミリを製作。中でも徴兵制扱ったコメディ「教訓I」は、'80年PFFで大島渚監督の絶賛を受け入選、全国を回った。高校卒業後、俳優としてデビュー。岡本嘉八監督作品「近頃なぜかチャールストン」では、脚本・助監督・主演の3役をこなした。現在、エッセイスト、インタビュアーなど多方面に渡って活躍中である。

□スタッフ・キャスト
製作：小沢敏 監督：利重剛 撮影：阿部剛 音楽：大塚ガリバー

Blind Alley

出演：佐野賢司/小林朝夫/利重剛
58分・カラー・ビデオ(16ミリ版)

□解説・ストーリー
あるトラックの運転手にしつこいまでに様々な質問を投げかけるインタビュアー、利重剛。やがて状況は意外な方向へと進展する。現実と虚構を巧みに操った実験的な作品。



パラダイスビュー('85)

高嶺剛
TSUYOSHI TAKAMINE



□監督プロフィール
'50年沖縄県生。'69年まで沖縄で育ち、同年京都教育大学に入学。'70年、処女8ミリ「RED MAN」を製作。翌年より3年かかりで沖縄を撮り回り、その成果を「オキナワン・ドリーム・ショー」(71)など数々の作品で発表。'76年、沖縄人自らの語り口による映画を目指し、16ミリ「オキナワン・チルダイ」を製作した。今回上映される作品は、初の劇場用映画で共通字幕付である。

□スタッフ・キャスト
監督・脚本：高嶺剛 撮影：としおかたかお 音楽：細野晴臣

Paradise View

出演：小林薫/戸川純/細野晴臣
/大室見勝子/平良トミ/リリイ
1時間53分・カラー・35ミリ

□解説・ストーリー
ハブ取りを生業として暮らしている男が、運命的に神かくしにあうまでを、本土復帰前の沖縄を舞台に描く。その風土や慣習に絡めたエピソードを散りばめた南国の寓話。



みんなあげちゃう♥('85)

金子修介
SHUSUKE KANEKO



□監督プロフィール
'55年東京都生。'78年につかつに入社。助監督時代は、小原宏裕、森田芳光らに師事。脚本では「ズームアップ・聖子の太鼓」、「スケパン株式会社・やっちゃえ!お嬢さん」などの他、TVアニメ「うる星やつら」などを手がける。'84年「宇能鴻一郎の濡れて打つ」で監督デビュー、横浜映画祭新人監督賞を受賞。他の作品は「OL百合族19歳」、「イブちゃんの娘」など。

□スタッフ・キャスト
監督：金子修介 原作：弓月光
脚本：井上敏樹 撮影：杉本一海

I'm all yours

出演：浅野なつみ/岡竜也/三波豊和/戸部誠/山田隆夫/千多枝
1時間30分・カラー・35ミリ

□解説・ストーリー
名門女子高3年の悠乃は大富豪の令嬢で世間知らず。セックスへの憧れも強い彼女は、ある日子備校生の六郎を見て胸キュンになり、「みんなあげちゃう」ことを決意した……。

映画渡世・マキノ雅裕

RETROSPECTIVE, MASAHIRO MAKINO

「おもろないとかあかんでえ」

マキノ組元助監督・岡本喜八

私が、マキノ組のチーフ助監督をやらせて貰ったのは、昭和27年から3年ばかりだ。従って、この拙文を、その間のアト・ランダムなメモランダムと思って頂ければ、幸いである。

マキノ師匠の名作〈浪人街〉は、不幸にして知らない。私が、大の映画ファンになったのは、昭和16年、17才の春に上京してからだからである。

私は、毎日のように、クレール、フェーデ、フォード、デュヴィヴィエと見歩いた。「何故、洋画ばかりなのか？」邦画は、「国民啓蒙映画」とか「戦意昂揚映画」だらけだったからだ。その手の映画が、面白い訳がない。

そんな時、戦争なんぞ何処吹く風か、といった心意気の、「国民娯楽映画」があった。師匠の〈昨日消えた男〉(S-16)と〈待っていた男〉(S-17)である。特な推理喜劇の、生き生きとした時代劇であった。

それが、マキノ作品との初めての出会いだったのだが、それから10年目に、まさか、その、マキノ組のチーフ助監督になれるとは……。

その年、私は28才。セカンドからチーフになったばかりである。そんな私に「マキノ組がつとまるかねえ？ 大変だぜえ」と、先輩助監督が心配してくれたものだ。「何が大変なんだろう？」

〈次郎長三國志一部・二部〉のホンを貰い、新東宝で〈彌太郎笠〉を撮影中の、マキノさんに挨拶に行ったら、初対面の私にいきなり、「ほなら、準備まかすでえ、あんじょうやっといてんかあ」

と来て、仰天した。マキノ組では、「準備」も「仕上げ」も、すべてチーフ助監督まかせ、だったのである。つまりは、衣裳調べ、小道具合わせ、ロケハン、音楽取り、ダビングといった、「撮影」以外のすべてをオマカセだからすこぶる責任重大。それが「つとまるかねえ？」になるのだが、こうなったら、もう、懸命に「つとめる」しか手はない。

「撮影」が始まった途端に、また仰天した。脚本はあるにはあったが、殆んど無いに等しかったからである。

朝、マキノ師匠は、二百字詰原稿用紙を2、3枚持ってくる。



◎「次郎長三國志」撮影の合い間に

つつい面白くて残業になる。残業になると、時間外手当がついた。

ともあれ、助監督にとっては、現場が「術科」であり雑談は「学科」である。

ロケに行く。雨が降る。2日も降りつづくと、「天気まつり」が始まる。「天気まつり」には、神主の祝詞奏上がつきものだが、その祝詞を書くのも、神主に扮するのも、マキノ組ではチーフ助監督の役目であった。

私は、朝から1日かかりで、七五調の祝詞を書き、夕食どきから始まる「天気まつり」の冒頭で、オゴソカに奏上し始めたら、何故かこれが、スタッフ御一統様に大受けを受けて、師匠からは、「粋な祝詞やったでえ」

と、ウイスキーを一本貰ったのだが、その頃の私は、一滴も呑めなかった。

それかあらぬか、やがて、

「喜八ちゃん、明日のシナリオ書いてやあ」

という事になる。その日の仕事が終わると、風呂にも入らないで師匠の部屋へ駆けつける。幸い風呂嫌いだから丁度良い。

「そやなあ、まず、アレの歩きから行こか？」

「追分の三五郎すか？」

「そや、すると向うからアレが来よる」

「投げ節お仲すね？」

「そや、ソレがふつとしゃがみよって、アレの紐を直しよる」

まさか都オコシの紐じゃなからうから、ワラジの紐だ？ といった塩梅で代名詞が矢鱈と多いから、かなりのカンが必要だし、途中でどんだん話の成り行きが変って来るから、前の方もどんだん直して行かねばならない。

ドンドン進んだり、ドンドンあと戻りしているうちに、不思議や、明日の場面がカッチリと出来

上がってしまったものだ。

なんの事はない。師匠は、エンピツの代りに舌を駆使し、私は、ケシゴムと原稿用紙の代りに座っていたのだが、

以後、ナメクジの判読の手間が一つ抜けたのも、さることながら、毎晩、一度は原稿用紙に立ち向かわないと眠れない、というクセがついたものである。

このクセ、未だに続いている。

一番仰天したのは、〈次郎長三國志三部・四部〉に入って間もない頃、ある朝突然「喜八ちゃん、今日の二シーン撮ってや」と言われた時だ。その日師匠は、別に身体の具合が悪かった訳ではない。私に、それだけ言うと、ストーヴに手をかざしながら、いつものように雑談を始めている。

私は、大慌てで、コンテを割り、師匠に見せる。「こ、こういう風に撮りたいんですけど……」

師匠は、パラパラッとめくって、こう言っただけだ。

「そやな、ま、こんなもんやろ」

私は、生まれて初めて、汗ダクダクで「用意、スタート！」の掛け声をかけ、コーフンのあまり、つつい「カット！」の声をかけるのを忘れたものである。

以後の私は、毎日、自分なりのコンテを割って、現場に臨んだものだ。マキノ組だけではなく、よその組でもである。

「俺ならこう撮る」 減法、タメになった。

五部・六部と、次郎長一家の子分衆が増えるにつれて、B班をまかせて貰える機会も多くなり、七部・八部・九部では、アウトドアの場面の殆んどをまかせて貰えるようになった。

助監督にとっては、実際にカメラを回すほど勉強になる事はない。

お世話になった3年間の、マキノ師匠の語録を煮つめるところなる。「映画は、まず、おもろないとあかんでえ」このコトバ、その後ずっと私のつかい棒になっている。

●おかもと・きはち

'24年、鳥取県米子市生。'43年、明治大学卒業後に東宝入社。一時、徴兵されるが終戦と共に復職。その後、谷口吉吉、成瀬巳喜男らの助監督を経験した後、マキノ「次郎長三國志」シリーズ、の総てに参加。'58年、監督に昇進し現在に至る。

チャンバラ渡世、マキノ節

—マキノ監督と言えばやはり「チャンバラ映画」と直ぐ浮かんでくるんですが……。

マキノ：いやそれで結構です。261本撮った映画の200本ほどが時代劇。オヤジ(牧野省三)が創ったチャンバラ映画を継いで19、20歳の頃から僕も撮ってきましたし、やっぱりチャンバラはマキノが本家やと思うてますから。

—それにしてもお撮りになった映画が261本というのは凄まじい数ですね。

マキノ：その「映画」という言葉もウチのオヤジが創ったんですわ。どこから考えついたのか知りませんが活動写真とか〇〇シネマとか言うてたのを「映画、やとね。しかしこれがオヤジの残した一番のものと違いますか。

そのオヤジが、忘れもしません当時の金で37万円という莫大な借金残して死んでしまった。500円の給料もろうて300円返しても100年以上かかる。考えたら気が遠くなるような金額ですけど、とにかく稼がなきゃならん。それにはお客さんの喜んでくれるシャシンを撮るしかない。でないと僕なんか直ぐクビです。まあそんなことが僕を無鉄砲な男にしたんじゃないでしょうか。僕が30の歳までオヤジが生きてくれたら、こんなにぎょうさん撮らんでもよかったです。

—単純に計算してもかなりのハードスケジュールで撮り続けてこられたと思うんですが。

マキノ：2日半で1本撮ったというのがあります。撮影時間を計った奴がいて、48時間で撮ったと言うんです。そんな映画安んに決まっている。寝ないで撮ったらそうでしょうけど途中で寝ますから、実際には4日掛ってる。せめてそう言ってくれたらもう少しよく聞えるんですけどね(笑)。

会社としては少い日にちで、安く撮ればそれだけ儲かる。こっちにすれば、もうちょっと日にちがあったら……。もっとこうすればよかった、僕はもっとやれる、261本の映画全部そういたいもんじゃないですか。

しかしそれは見に来るお客さんには関係ない。2日で撮っても大作撮ってもマキノはマキノ。マキノの映画に変わりはない。払ってくれるお金も一緒。芝居のように役者の格で料金が変わったりしませんし。

監督やって辛いのは自分の作品の悪口を言えんことです。それで商売するんですから。とにかく見に来てもらうんですからこれは言えないですよ。まあグチ言うことはないんです。演出家は辞めた時が終わり。「馬鹿だな俺は」で一切すむ。演出家はそうあって欲しいですね。そうじゃないですか。

—ハードなスケジュールで映画を作られるなか

で、「これだけはするまい、と御自身の中で思われてきたことってありますか。

マキノ：あります。僕はね、見てる人がイヤな気持ちになる場面がありますね。こんなの子供に見せたくないとか思うものがあるでしょ。そういうのは嫌いでね。僕はあれだけチャンバラ映画を撮ってますけど、わざわざ血を見せたことは一度もないんです。映画はきれいで面白くて、気持ちよくないと。そうでないと見てる人も楽しくないと思うんです。それが斬れば直ぐ血でしょ。それにあんなに何べんも斬ることないと思うんですよ。斬ったと分ればそれでいい。それどころか斬った人間にわざわざ目をむいて睨んだりしてね。それよりはその時、フツと目を伏せた方がホンマらしく見えますよね。僕は役者に顔で芝居するなと言うんです。

—フツと目を伏せるなんて聞くと、ヤクザ映画に出ていた頃の高倉健を思い出しますが、「顔で芝居をするな」っておっしゃるのは……。

マキノ：ヤクザ映画も10年やりましたから。あれも時代劇の「敵討ち」で撮ってるんです。チョンマゲだけとって。



日本侠客伝

「顔で芝居をするな、目と体でせい」と、つまり重心です。人間、嫌いな相手に身を乗り出したりしません。好きな相手には身を乗りだしても嫌いだったら身を引きます。それを体を前に出して嫌いを言おうとするから顔にシワ寄せて顔で芝居することになる。これはどう見ても不自然でしょ。普段、誰がわざわざ身を乗り出してそんなこと言いますか(笑)。こうなればもうウソです。演技やのうてウソでしかない。ウソはいけません。

感情は目に出ていればそれでいい。だから反対に目に好きという気持ちが出て、体を前に出して「嫌いよ」って言えば「好き」に見えるでしょ。—スゴイ。ほんとにそう見えます。でも、映画、物語というのは本来ウソですよ。

マキノ：映画なんてウソでしか作れません。作家の夢です言うて堂々とお金取って見せてるんですからウソでいいんです。けど、それをホンマらしく見せる。ウソをウソとはっきりわからせる、見せてしまうのはよくない。僕はそれを一生言いた

い。僕なんかウソばかりついてる。でもそれがホンマらしく見えるから助かってる。それでお客さんも喜んでくれる。

このウソをホンマらしく見せるために伏線が大事になってくる。健(高倉健)がひとりて36人を斬る。こんなウソです。しかしそのために何百人という大勢が助かる。ここでそのウソが見てるお客さんにはホンマになるんです。その伏線の内容がこれからの時代劇を支えるんじゃないでしょうか。それにラブシーンも必要です。

—チャンバラ映画にラブシーンの組合せというのはどういう……。

マキノ：チャンバラ映画は剣戟映画というぐらい鋭い立ち廻りがなくてはならないわけですけど、甘いラブシーンがあってこそ立ち廻りの鋭さもより光って見える。いい男というのもいい女がいて始めてそう見える。泣いてくれる女がいるからこそ男は死に行ける。たったひとりの男のために大勢の人間が葬式に来てくれる。このバランスがこれからの時代劇を面白く見せると思いますね。

—「血煙高田馬場」を先日拝見したんですが、あの立ち廻りとても面白いですね、テンポがあって。マキノ：今の若い連中もそう言ってくれるのが多いんですけど、あればスウィング・ジャズをバックに流して阪妻(阪東妻三郎)に立ち廻りをやらせたんです。2週間しか撮影期間がなくて、せめて立ち廻りでも面白くないとどうしようもない。それで前の日にダンスホールに阪妻を連れて行ってスウィングに合わせて立ち廻りをやらせた。一緒にフロアに出てね。僕は子役あがりのせいもあるんでしょうが、全部自分で演ってみせるんです。体が動かないとね、ダメなんです。

監督は役者以上に芝居が上手くないといけません。それ見て役者も監督より上手くやってやろうと根性を出すし、また見てよかったんなら俺のマネいと言えますしね。そうでないと阪妻だって言うこと聞いてくれません。「あんたの体や、できんことない」言うてね。しかし、あの立ち廻りは撮影所でも大ウケでした。

—俗にいうミス・キャストというのはやっぱりあるんでしょうか。

マキノ：この役者がいてこの役を演るからというミス・キャストはありません。その役者に合うように撮ってやればいいんやから。ミス・キャストというのは役者の演技がまずいとそうなるんで、ある程度の演技力があればミス・キャストなんてありません。

森繁の森の石松も会社は反対したんですが、大丈夫やれると演らせた。それで彼は一躍スターに



なったんですが、石松なんてほんまに居たかどうか分らん。誰も会ったことないのにミス・キャストもありません。(笑)

字に書いたものを絵にするのが僕らの仕事。それを役者動かして繋いでいく、そのためにいろんなテクニック使うたり、考えたりして。どんな役者でも自分の思うように動かせる。役者をどう動かすかというのが演出家の仕事とちがいますか。

—マキノのチャンバラ映画をもう一度ということとで久しぶりにメガホンをお取りになるとか。

マキノ：ええ、若い連中がもう一度マキノのチャンバラを見たい。どうしても撮らすと言うてくれる。めったに泣かん困々しい男ですが涙の出るほど嬉しかった。だってそうでしょ。みんな喜んでくれる、見たいと言うてくれる映画以外、撮っても意味ないじゃないですか。

私ももう77歳。この年で明日のことを言うのは大変恥しいんですが、やれるんじゃないかと夢は見ます。若い人に助けてもらって。自分にとってはこの歳やから大変な夢です。しかし、真剣にやろうと思ってます。たぶん最後の映画になるでしょうが、命限りにやろうと思えます。261本映画を撮ってきた男です。もうこれで死んでもいいんじゃないですか。

—どんな映画をお撮りになるんでしょうか。

マキノ：若い連中が今、ホンを作ってくれています。彼等の見たいホンで撮ろうと思っています。時代も変わりましたし、見たいと言うてくれる連中の見たい映画を撮りたい。どんなものが来るか楽しみにしています。

心の準備はしています。お客さんの目も肥えますし、昔のものをそのままやれませんか。今まではひとりの殺陣師が全部の殺陣をつけてたんですが、今回は主役が3人いたら3人にひとりづつ殺陣師をつけてみようかと。何でもええから立ち廻りではダメやと思います。

(85年3月28日・スタジオ蜂琳にて)



『映画の父』、牧野省三の長男として、1908年2月29日京都に生まれたマキノ雅裕は、本名・牧野正唯。これまでにペンネームを正博、雅弘、雅裕と三度改名している。満四歳から父親の膝下で子役として活躍。創世期の活動写真の空気を存分に吸い込んで成長した。

京都府立一商卒業後は、父親を補佐し、助監督兼俳優として数多くの作品に就き、「白虎隊」「義士と俠客」「狼火」など主演作品も多い。

1926年満18歳で、「青い眼の人形」を富沢進郎と共同演出という形で初監督。翌27年一本立ちし、杉狂児、東郷久義主演の喜劇「週間苦行」を監督する。新進気鋭の映画作家として、マキノ雅裕がいちやくその才能を結実させたのは、28年の「蹴合鷄」「崇禪寺馬場」「浪人街・第一話/美しき獲物」からであり、封建時代に生きる庶民を自由奔放、アナーキーなエネルギーで描きだしたこれらの傑作は、いわゆる『傾向映画』全盛だった年、サイレント時代劇に革命的な展開を与えた。当時のキネマ旬報ベスト・テンでも、「浪人街・第一話」は1位、「崇禪寺馬場」は4位、「蹴合鷄」は7位と高く評価され、続く「首の座」で、マキノ雅裕は若手監督の中でもその地位を不動にした。

だが、世界恐慌が日本をも襲った29年、父省三が過労と老衰による心臓麻痺で急逝し、マキノ映画の経営は危機に瀕した。撮影所にはストライキが起り、雅裕は争議団側に加担して肉親と骨肉あいはむという一幕もあった。やがて再建案がまとまり、正映マキノが発足、晴れて第一回作品をクラウンインしようとした矢先、突如怪火が発生し、スタジオは全焼。膨大な借財を背負って、雅裕は32年日活に入社。以後映画界にも不況の風が

吹き渡る中、日活から東京映音、第一映画社など転々、劇映画ばかりでなく、記録映画、文化映画の製作にもたずさわる。

35年11月マキノ・トーキーを設立するも、37年解散、日活に入社して「血煙高田馬場」「鞍馬天狗」「忠臣蔵」など時代劇のヒット作を発表。この間、宝塚出身のスター轟夕起子と恋愛結婚。40年日活を去って、東宝で「昨日消えた男」「世紀は笑ふ」「男の花道」などを大ヒットさせ、東宝のドル箱監督となる。戦意昂揚一色に塗りつぶされようとする映画界にあって、しばしば彼の映画は『国賊映画』の汚名をこうむったが、これは弾圧に屈することのない庶民の心情を描きつけたマキノ雅裕にとっては面目躍如と言うべきか。

東宝を去り、松竹京都撮影所長に就任して敗戦を迎え、「千日前附近」「粋な風来坊」「待ちぼうけの女」などの快作で戦後は映画作家として再出発。47年フリーとなるが、敗戦直後の混乱の中で、マキノ一族の経済的諸問題、轟夕起子との離別など心労が重なり、ヒロポン中毒となって、極度のスランプにおちいる。50年、弟・満男が設立した東横映画で「殺陣師段平」「酔いどれ八萬騎」などを撮り、第一線に復帰。ようやくスランプを脱する。

50年代のマキノ雅裕の活躍はめざましい。東宝での「次郎長三國志」9部作('52~'54)は、若き日の森繁久彌をはじめとする芸達者たちの心憎いまでのアンサンブルもあって、マキノ雅裕の代表作のひとつとなる。この時期、東映、東宝、大映、日活、新東宝と各社を股にかけてヒット作を撮りまくった。

57年12月、弟・満男早逝以後は、東映に腰を据え、「日本侠客伝」「昭和残侠伝」シリーズを手がけ、いわゆる任侠映画の基礎を打ち立てる。鶴田浩二、高倉健、藤純子など数多くのスターが彼によって磨きあげられた。だが、彼は『やくざ映画』には一家言を持ち、単純な否定論ではなく、『やくざ』と『かたぎ』を作品の中で明確に描き分ける背筋の通し方は、マキノ雅裕という作家の生き方もも現わす真骨頂と言えらる。

69年から70年にかけて、日活で2本、大映で3本を撮る。71年、藤純子引退記念映画「関東緋桜一家」以来スクリーンから遠ざかり、TVや舞台の演出を手掛け、現在は演技塾・スタジオ蜂琳を開設して後進の指導にあたっている。戦前から戦後にかけて、日本映画を縦断し、演出した映画は261本。まだまだその創作意欲は衰えることがない。その活動は、77年に出版された「マキノ雅弘自伝映画渡世・天の巻/地の巻」(平凡社刊)にもいきいきと記されている。

上映作品紹介

マキノサイレントムービーシアター“映画も私も子供だった頃”



浪人街<第1話+第2話>('28~'29)

□解説・ストーリー

製作当時・マキノ映画は創業以来のピンチを迎えていた。父・省三の病氣、相次ぐスター・監督の脱退などで、若手による再起が望まれていたのである。これにこたえて雅裕は、脚本の山上伊太郎、撮影の三木稔の協力を得て、まったく新しい青春時代劇を作り上げた。悶々と無為に日々を送る浪人たちのニヒリズムとエゴが見事に表現され、異才・山上がその本領を発揮している。現存するフィルムは、「第1話・美しき獲物」が1巻、「第2話・楽屋風呂」が1~6巻のみであり、今回上映されるものは、その編集版である。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ正博
脚本……山上伊太郎
撮影……三木稔
出演……〈第1話〉南光明/谷崎十郎/根岸東一郎/大林梅子/岡島艶子/河津清三郎/市原義夫/五味国男/住ノ江田鶴子/東条猛/川田弘三
〈第2話〉南光明/マキノ登六/松浦架枝/荒木忍
〈第1話〉15巻・〈第2話〉19巻・モノクロ・サイレント(編集短縮版・30分)



実録忠臣蔵('28)

□解説・ストーリー

マキノ省三生誕50年記念映画と銘打ち、省三が一世一代の大作として、製作日数3年、費用20万円を投じた作品。この作品を含め、省三は生涯に計6本の「忠臣蔵」を撮っているが、俳優と役柄のイメージの食い違いが生じるなど、この製作には困難を極めた。ようやくクランク・アップした翌日、ネガの整理中に火事のためフィルムの一部を失った。今回上映されるフィルムは、歳月を経てさらに消滅した僅かな部分であるが、『映画の父』マキノ省三の片鱗を知ることができよう。雅裕は、大石主税役で出演、助監督も務めている。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ省三
撮影……田中十三
出演……諸口十九/勝見庸太郎/月形竜之介/中根竜太郎/片岡千恵蔵/伊井善峰/山本礼三郎/杉狂児/マキノ智子/マキノ正博
17巻・モノクロ・サイレント(短縮版・30分)



楠公父子・櫻井の訣別('21)

□解説・ストーリー

マキノ省三が'21年に設立した牧野教育映画製作所の第4回作品。かねてから省三が撮ろうとしていた題材だけに、時代考証にも力を入れている。後の巨匠・内田吐夢が補正成、雅裕が補正行を演じている、珍品フィルム。

うとしていた題材だけに、時代考証にも力を入れている。後の巨匠・内田吐夢が補正成、雅裕が補正行を演じている、珍品フィルム。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ省三
出演……内田吐夢/マキノ正唯/常盤松代
5巻・モノクロ・サイレント(短縮版・11分)



雷電('28)

□解説・ストーリー

マキノ省三の遺作で、マキノ雅裕が俳優として出演した最後の作品でもある。江戸時代、

無敵の強さを誇った力士・雷電為右衛門と、雅裕扮する医者で、にわか力士に仕立て上げられた藪井竹庵の対決を喜劇タッチで描く。

□スタッフ・キャスト
監督・脚本……マキノ省三
出演……マキノ正博
7巻・モノクロ・サイレント(短縮版・18分)

映画渡世・マキノ雅裕●1937~1970



血煙高田馬場('37)

□解説・ストーリー

喧嘩の仲裁で酒代を稼ぐ浪人・中山安兵衛。その彼も伯父には頭が上がらない。伯父・六郎左衛門は剣術試合で相手を打ち負かすが、逆恨みされ決闘状をつきつけられる。その助太刀に安兵衛は勇んで高田馬場へ……。時代劇最大のスターのひとり、阪妻が面目躍如たる名演技を見せる。ひとり斬って、返す刀でもうひとり斬るというスピーディで、しかもリズム感ある阪妻得意の群衆活劇を堪能できる。安兵衛が高田馬場に駆けつけるシーンのスピード感溢れるカット割りは見見。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ正博
原作・脚本……坂東三郎
撮影……三井六三郎
石本秀雄
音楽……高橋半
出演……阪妻三郎(中山安兵衛)/市川百々之助/伊庭駿三郎/志村喬/番川良介/市川正二郎/藤川三之祐/大倉千代子/小松みどり/滝川静子/尾上華史/原駒子/久米理/瀬川路三郎/西徳蔵
52分・モノクロ

(左上)満2歳の雅裕
(上右)26年「大江戸の丑寅時」出演中の頃
(下左)58年「非常線」演出中
(下右)現在のマキノ雅裕

上映作品紹介



恋山彦(37)

□解説・ストーリー

將軍綱吉の世、柳沢吉保らに父を殺されたお品は、三弦の名品山彦と共に伊那の部落に落ちのびる。大将・小源太をはじめ、尊皇の志高い伊那一族は、大老・柳沢一派との抗争を繰り広げてゆく……。吉川英治原作の伝奇ロマンに基づく、当時としては日活が社運を賭けた大作。一時不振を叫ばれた阪東妻三郎が、この作品でスターの座に返り咲いた。戦後の米軍没収フィルムの本で、返還後、ニュープリントとして甦った。今回上映されるのは、「風雲の巻」、「怒濤の巻」の2部作をまとめた総集版である。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ正博
原作……吉川英治
脚本……比佐芳武
撮影……竹村謙和
音楽……高橋半
出演……阪東妻三郎(伊那の山彦) / 花柳小菊 / 尾上菊太郎 / 澤村國太郎 / 阿部五郎
1時間43分・モノクロ



彌次喜多道中記(38)

□解説・ストーリー

遠山金四郎と鼠小僧次郎吉、お馴染みのキャラクターがひょんなことから一緒に旅をする破目になる。そこに、彌次さん喜多さんの凸凹コンビが絡んで巻き起こる珍事件の数々。早撮り、低予算で年間10本余りを乱作していた、この頃のマキノ。その中でもこの作品は秀作との声が高い。喜劇的な味付けとディック・ミネらの歌を結び付け、それに捕物まで盛り込んだ軽快なエンタテインメント。脚本の本城英太郎は、小国英雄の愛名で後の黒澤作品とはまた違った持ち味を見せている。音楽担当は、今は亡き巨匠・古賀政男。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ正博
原作・脚本……本城英太郎
撮影……石本秀雄
出演……片岡千恵蔵(遠山金四郎) / 木暮実千代(鼠小僧) / 河部五郎 / ディック・ミネ / 楠木繁夫 / 潮川路三郎 / 香川良介
1時間38分・モノクロ



鴛鴦歌合戦(39)

□解説・ストーリー

トーキー初期にはどの国でもミュージカルやオペレッタ映画がしきりに試みられたが、'35年に高田浩吉が時代劇で美声を披露して時代劇ミュージカルの気運が生まれた。この系譜は後の美空ひばりの頃まで続くが、この作品もそれに属する軽快なエンタテインメントである。物語は、千恵蔵扮する貧乏浪人と彼を取り巻く3人の娘の恋の箱当てを中心に描いた人情もの。撮影後、テープレコーダからスカウトが来たという、今は亡き志村喬の意外な(?)美声も聞ける一篇。この作品の少し後、映画界は戦争の影に脅かされ始める。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ正博
脚本……江戸川浩三
撮影……宮川一夫
音楽……大久保徳二郎
出演……片岡千恵蔵(浅井礼三郎) / 市川春代 / 志村喬 / 遠山英次 / 深水藤子 / ディック・ミネ / 香川良介
1時間8分・モノクロ



昨日消えた男(40)

□解説・ストーリー

日活を離れたマキノが、フリーになっての第1作。元ネタは、その頃MGMの名物シリーズだったウィリアム・パウエル、マーナ・ロイの「影なき男」である。パウエル演じる私立探偵を、ここでは長谷川一夫扮する遠山の金さんに置き変えている。下町の裏長屋で、ある日大家勤兵衛が殺害され、その住人たちが容疑者として浮かびあがる。芸者や浪人、人形師など大家に恨みを持つ者は多い。複雑に入り組んだ人間関係を静観する、遊び人の文吉。新たな殺人事件が発生し、事の解決は南町奉行・遠山金四郎の手に委ねられた。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ正博
製作……滝村和男
脚本……小国英雄
撮影……伊藤武夫
音楽……鈴木静一
出演……長谷川一夫(文吉) / 山田五十鈴 / 徳川夢声 / 高橋秀子 / 鳥羽扇之助 / 清川虹子
1時間31分・モノクロ



幽霊暁に死す(48)

□解説・ストーリー

マキノが設立したCAC(映画芸術協同)の作品。CAC自体は9本の映画を製作して解散している。当時、ヒロボンの打ち過ぎて体をこわしていたマキノだが、この作品は明るい風俗劇に仕上がった。新婚ホヤホヤの小平太は、中学校の教師。貧しいながらも正義感の強い彼は、理不尽な校長を糾弾して学校をクビになってしまう。そんな彼にいつも聞こえる優しい声。職を求める小平太だが、結局落ち着いたのは幽霊屋敷と噂される別荘の管理人。そしてある日、小平太の前に現われたのは、声の主・彼の父親の幽霊だった……。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ正博
脚本……小国英雄
撮影……三木滋人
出演……長谷川一夫(小平太) / 小杉のぶ子 / 轟夕起子 / 沢村貞子 / 田端義夫 / 花菱アチャコ / 飯田蝶子 / 坂本武
10巻・モノクロ



織田信長(40)

□解説・ストーリー

'37年の日中戦争勃発以来、時代劇に歴史映画の流行が起こった。その背景には、荒唐無稽なチャンバラ物に対して軍部などからの圧力がかけられたということがある。この作品も、そういう時代の要求に応えた一篇。美濃の斎藤道三の娘・濃姫と祝言をあげた織田信長。しかしこれは、道三の機智を働かせた政略結婚であった。奇矯な振舞でとく噂の多い信長だったが、父・信秀の死後は義父・道三をも手玉にとり、その頭角を表わしてゆく。そして、ついには意を決しての大舞台、桶狭間の戦いへと臨むのだった。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ正博
原作……鷲尾雨村
脚本……観世寺光太
撮影……高橋半
出演……片岡千恵蔵(織田信長) / 高木永二 / 宮城千賀子 / 志村喬 / 河部五郎 / 上田吉二郎
1時間30分・モノクロ



阿片戦争(42)

□解説・ストーリー

戦争たけなわの42年。この頃マキノは東宝で次々にヒットを飛ばしていた。しかし時局は、娯楽指向のマキノの作風と相容れず、国策映画の製作を要求した。そこで彼は、イギリスの中国へ

の不当な干渉・阿片戦争に材を取った反英映画に着手した。だがこれは単なる戦争物ではない。D・W・グリフィス監督の「嵐の孤児」に想を得て、阿片の害が生んだ姉妹の悲劇を描いたスペクタクル長篇である。旧作「ゴジラ」

などで有名な円谷英二が特殊技術を担当、特撮ファンも必見の一篇。完成後、この作品は当時の満洲で上映し、原地の中国人に絶賛された。物語の舞台は1839年の中国。阿片を流し侵略を計るイギリスは、エリオット兄弟と軍艦3隻を送り込む。裏で阿片窟を営むエリオットの手先・黄露萍は、薬と偽り盲目の娘・麗蘭に阿片を吸わせる。憂国の士・林則徐は英国に挑戦し阿片2万箱を没収、街はパニックに陥った。妹・麗蘭を気づかう愛蘭は、決死の思いで阿片を手に入れるが軍隊とぶつかり失神してしまう。愛蘭は軍人に助けられるが、離れた麗蘭は黄の店で働く破目に……。その頃、没収した阿片に火を放った林則徐は、黄ら密輸者の一斉攻撃に踏み切る。そして、英国艦隊の報復攻撃が始まった。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ正博
脚本……小国英雄
撮影……小原謙治
音楽……服部良一
特殊技術……円谷英二
出演……市川猿之助(林則徐) / 原節子(愛蘭) / 高峰秀子(麗蘭) / 鈴木伝明(ジョージ・エリオット) / 青山杉作(チャールズ・エリオット) / 山本礼三郎(黄露萍) / 進藤英太郎(英国東洋艦隊提督) / 菅井一郎(阿片吸飲者) / 河津清三郎(穆實英) / 小杉義男(丁除成) / 清川虹子(許沈白) / 丸山定夫(林牙梁) / 飯塚好太郎(陳南田) / 浅田健三
1時間59分・モノクロ



ハワイの夜(52)

□解説・ストーリー

戦後初の長期海外ロケを敢行して撮られた、ラブ・ロマンス。ただし、マキノが担当したのはセット撮影のみで、ロケ部分は松林宗恵が監督した。日華事変の頃、スポーツ親善使節としてハワイを訪れた加納明は、日系二世のジーンと恋に落ちる。やがて第二次大戦が始まり、ふたりの仲は永遠に引き裂かれたかに見えた。兵士として従軍していた加納は重傷を負い、米軍の捕虜としてハワイに連行される。重態の身で脱走した彼は、ジーンのもとに駆け付けるが……。『彌太郎笠』でも組んだ岸・鶴田が息の合ったところを見せている。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ雅弘
脚本……松林宗恵
原作……今日出海
脚本……松浦健郎
撮影……坪井明
出演……鶴田浩二(加納明) / 岸恵子(ジーン河台) / 三橋達也 / 水の江滝子 / 水島道太郎
1時間31分・モノクロ



江戸っ子繁昌記(61)

□解説・ストーリー

落語の「芝浜」に怪談「番町皿屋敷」を絡めた人情篇。魚屋と旗本のふた役を錦之介が好演している。長屋の魚屋・勝五郎は気っぶはいいが、酒好きとなまけ癖が玉にキズ。道で拾った百両の大金で大振舞と思いきや、これが夢。翌日から性根を入れ変えて働く勝五郎だが、その枕元に旗本の嫁になった妹・お菊の幽霊が現れる。気になって妹の腰入れ先・青山家を訪ねると、お菊は家宝の皿を割ってお手打ちになっていた。我慢ならず勝五郎は、お菊の夫・青山播磨に詰め寄るが、播磨の苦悩と憔悴ぶりにその罪を許すのだった。

□スタッフ・キャスト
監督……マキノ雅弘
脚本……成沢昌茂
撮影……坪井誠
音楽……鈴木静一
出演……中村錦之助(青山播磨) / 魚屋勝五郎 / 小林千登勢 / 高松錦之助 / 毛利菊枝 / 桂小金治 / 千秋美 / 高橋とよ
1時間27分・カラー



浪人街('57)

□解説・ストーリー

マキノの出世作、「浪人街」の2度目のリメイク。この年製作した5本中4本が、山上伊太郎の脚本による自作の再映画化である。前回出演の河津清三郎が同じ赤牛役で好演している。江戸中期の浅草隈をうろつく浪人たち。女房・お新にスリをさせ、放蕩三昧の日々を送る荒牧源内。金で頼まれ、その源内の短刀を狙う赤牛弥五衛門。しかし、ゴロツキ旗本に捕われたお新の救出に、ひとり向う荒牧の姿を見た時、赤牛の中で権力に反逆する浪人の血が騒いだ。そして大詰め、薄暮の森で旗本相手の大立回りが始まった。

□スタッフ・キャスト

監督・脚本……………マキノ雅弘
原作……………山上伊太郎
脚本……………村上元三
撮影……………三村明
出演……………近衛十四郎(荒牧源内)／藤田進(河津清三郎)／龍崎一郎(北上弥太郎)／清水元(高峰三枝子)／水原真知子(山鳩くるみ)／野上千鶴子(石黒達也)／森健二(本郷秀雄)／丘龍児(東一郎)／梅沢昇(田中謙三)
!時間53分・カラー



仇討崇禅寺馬場('57)

□解説・ストーリー

'28年にマキノが監督した「崇禅寺馬場」のリメイク。主演の大友柳太朗、千原しのぶそしてマキノ自身もこの映画で京都市民賞を受けた。本多家武術指南の生田伝八郎は、武芸大会でまた若輩の宗左衛門に負け、お後御免となった。ふとした弾みで宗左衛門を斬ってしまった伝八郎は領内から逃走し沖仲仕の頭・万造のもとに隠れる。万造の娘・お勝は、伝八郎にほのかな恋心を寄せる。自分に藩から討手が出たことを聞いて覚悟を決める伝八郎だが、お勝は女の一途で伝八郎を守る腹を決め、手下の人足たちを集め始めた……。

□スタッフ・キャスト

監督……………マキノ雅弘
脚本……………依田義賢
撮影……………伊藤武夫
音楽……………鈴木静一
出演……………大友柳太朗(生田伝八郎)／千原しのぶ(お勝)／遠藤英太郎(堀雄二)／杉狂児(松浦築枝)／徳大寺伸
!時間33分・カラー



人生とんぼ返り('55)

□解説・ストーリー

'50年の「殺陣師段平」のリメイク。マキノ監督自身も気に入っている一篇で、脚本も自らが書いている。大正末期、沢田正二郎率いる新国劇の殺陣師・市川段平は、梳髪屋を開く女房・お春、雇い娘のおきくと共に貧しいながらも男気のある日々を送っていた。新しい殺陣の創造に苦心する段平は、ある日沢田が不良を投げ飛ばすのを見て迫真の殺陣を思いつく。しかし病気で重態になり、おきくが段平の変わりや努めることになる。見事、段平の殺陣を再現したおきくに見知られながら、段平は静かに息を引きとった。

□スタッフ・キャスト

監督・脚本……………マキノ雅弘
原作……………長谷川幸延
撮影……………高村倉太郎
音楽……………大久保徳次郎
出演……………森繁久彌(市川段平)／山田五十鈴(お春)／河津清三郎(沢田正二郎)／左幸子(おきく)／森健二(水島道太郎)／美川洋一郎(本郷秀雄)／小林重四郎(芦田伸介)／澤村国太郎(加藤智子)／福田トヨ(雨宮節子)／雪岡純
!時間56分・モノクロ



玄海遊侠伝・破れかぶれ('70)

□解説・ストーリー

侠客・吉田磯吉の青春を描いた「日本大俠客」のリメイク。大映末期の作品で、主演級スターを取り揃えての社運を賭けた一篇である。明治の中期、九州・若松の町を力て牛耳ろうとするやくざ大田黒とその代貸・義三郎。しかし、その企みはゴンゾ(沖仲仕)の頭・磯吉によってことごとく失敗する。大田黒たちが卑劣な手段で磯吉を殺そうとしたことから、磯吉の怒りが爆発。命知らずのゴンゾたち四人を引き連れて、悪の根城に殴り込んだ……。磯吉を慕う鉄火肌の馬賊芸者を安田道代(現・大楠道代)が好演している。

□スタッフ・キャスト

監督・脚本……………マキノ雅弘
原作……………吉田敏太郎
脚本……………笠原和夫
出演……………勝新太郎(吉田磯吉)／安田道代(松方弘樹)／京マチ子(津川雅彦)／岸田森
!時間41分・カラー



日本侠客伝・関東篇('65)

□解説・ストーリー

東映やくざ映画路線の隆盛をもたらし、高倉健の名を一躍世に高めたシリーズの3作目。幼い頃、母方の遠縁にあたる侠客と遊んだ経験を持つマキノは、その時垣間見たいなせな彼らの生き方を自分なりに描いてみせた。「やくざ稼業をしてもやくざな生活はするな」をやくざの正道とする監督は、このシリーズで古い任侠道に生きる俠気の士が成り上がりの博徒を打ちのめすという図式によって、その通念を貫いている。シリーズ11作中、マキノは9作を監督しており、その中でもこの作品は出色の出来との声が高い。

□スタッフ・キャスト

監督……………マキノ雅弘
脚本……………笠原和夫
村尾昭(野上龍雄)
撮影……………吉田真次
出演……………高倉健(緒方勇)／南田洋子(大木実)／長門裕之(待田京介)／北島三郎(藤純子)／丹波哲郎(鶴田浩二)
!時間35分・カラー



昭和残侠伝・死んで貰います('70)

□解説・ストーリー

高倉健の花田秀次郎、池部良の風間重吉の花と風のコンビによる着流しものの代表シリーズ第7作。東京下町の料亭「喜楽」に生まれた秀次郎は理由あって家を出、渡世に身を沈めた。数年ぶりに生家に戻ると肉親は死亡し、昔日の面影はなかった。身分を隠して板前になる秀次郎、それを見守る板前頭の風間。「喜楽」を狙うやくざ・駒井は卑怯な罠をはり、まんまと店の権利書を手に入れた。包丁をドスに持ち変えて、秀次郎は単身駒井のもとへ乗り込んでいく。ラストにかかる主題歌「唐獅子牡丹」はあまりにも有名である。

□スタッフ・キャスト

監督……………マキノ雅弘
脚本……………大和久守正
撮影……………林七郎
音楽……………菊池俊輔
出演……………高倉健(花田秀次郎)／池部良(風間重吉)／加藤嘉(荒木道子)／藤純子(中村竹弥)／山本顯一
!時間33分・カラー

ネバーエンディングマキノ雅裕“まだ足りぬ、映えて画いて、あの世まで”



次郎長三国志 第1部~第5部('52~'53)

森繁の石松を始めとするキャラクターの面白さも十分に味わえるだろう。
〈第1部・次郎長賣出す〉
義父の喧嘩の仲裁を買って出た次郎長が、その度胸で名声を高めるまで。
〈第2部・次郎長初旅〉
お蝶と夫婦の歪を交した次郎長は、乾分を連れて旅に出るのだが……。
〈第3部・次郎長と石松〉
追分三五郎と道連れになった石松が、賭場で女壺振りにしてやられる。
〈第4部・勢揃い清水港〉
清水に戻った次郎長一家が、行き倒れの力士一行を助け、興行を催す。
〈第5部・段込甲州路〉
捕えられた投げ節お仲を救出すべく、次郎長一家は甲州に乗り込む。

□スタッフ・キャスト

監督……………マキノ雅弘
原作……………村上元三
脚本……………松浦健郎
音楽……………鈴木静一
出演……………小堀明男(清水の次郎長)／若山セツ子(お蝶)／河津清三郎(大政)／水島道太郎(小政)／田崎潤(桶屋の鬼吉)／森健二(関東綱五郎)／田中春男(法印大五郎)／石井一雄(増川仙右衛門)／森繁久彌(森の石松)
〈第1部〉!時間24分
〈第2部〉!時間25分
〈第3部〉!時間30分
〈第4部〉!時間22分
〈第5部〉!時間20分
全作品モノクロ

□解説・ストーリー

講談や浪曲などで親しまれた「次郎長もの」。その極め付けが、この「次郎長三国志」シリーズである。監督自身、

親分子分の関係にも似た大正から昭和初期の映画界で育っただけに、その演出は抜群の冴えを見せる。今回は、全9部作中、第5部までの一挙上映で、



関東緋桜一家('71)

□解説・ストーリー

'63年の「八州遊侠伝・男の盃」(監督・マキノ雅弘)以来、90本の映画に出演した「任侠映画の花」藤純子が、その最後を彩ったオールスター・キャストの引退映画。マキノ監督は、デビュー前から演技のイロハを教えた、純子の育ての親でもある。明治末期の柳橋一帯の町内頭で為の副頭領・河津政の娘、芸者・鶴次が彼女の後どころ。美貌と男まさりの俠気か評判の彼女が、柳橋に賭場を開いて縄張りを拡張しようとするヤクザを、健さん・鶴田浩二等と共に倒すまでを描く。純子はこの年、'71年度キネ旬女優賞を得ている。

スタッフ・キャスト

監督……………マキノ雅弘
脚本……………笠原和夫
撮影……………藤尾元也
音楽……………木下忠司
出演……………藤純子(鶴次)／水島道太郎(鶴田浩二)／高倉健(菅原文太)／嵐寛寿郎(片岡千恵蔵)／金子信雄
!時間42分・カラー

フィルモグラフィ

※㊦=マキノ雅裕出演作品、㊧=マキノ雅裕監督作品、㊨=監督、㊩=出演者。

1912

- ㊦㊩ 乃木將軍と生涯 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 孝子三吉 ㊨不詳

1913

- ㊦㊩ 八犬傳 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 三日月次郎吉・前後篇 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 神崎與五郎 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 眞田漫遊記 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 伊達大評定 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 佐倉宗五郎 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 夕立勘五郎 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 忠臣蔵 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 武勇傳尼子十勇士 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 明智光秀 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 佐賀三勇士 ㊨牧野省三

1914

- ㊦㊩ 怪力傳助 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 小笠原狐 ㊨小笠原輝助 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 橋の太郎・一心太助妖怪退治 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 御伽刺黄金の虎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 児来也 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 天竺徳兵衛 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 田宮坊太郎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 陣崎の猫 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 花川戸助六 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 野狐三次 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 八百八狐 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 天狗小僧霧太郎 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 國定忠次 ㊨日光町蔵と國定忠次 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 山王の化猫 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 堀部安兵衛 ㊨不詳
- ㊦㊩ 嵐小僧次郎吉 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 児来也お照 ㊨不詳
- ㊦㊩ 忠臣蔵 ㊨牧野省三

1915

- ㊦㊩ め組の喧嘩 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 越後傳吉 ㊨不詳
- ㊦㊩ 加賀鷲 ㊨不詳
- ㊦㊩ 鬼若三次 ㊨不詳
- ㊦㊩ 大前田英五郎 ㊨辻吉朗
- ㊦㊩ 桃太郎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 坂田金時 ㊨不詳
- ㊦㊩ 曾我兄弟 ㊨不詳
- ㊦㊩ 眞田大助 ㊨不詳
- ㊦㊩ 腕の喜三郎 ㊨辻吉朗
- ㊦㊩ 先代騒動 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 神崎與五郎 ㊨小林彌六
- ㊦㊩ 鬼夜叉丸 ㊨小林彌六
- ㊦㊩ 神通力源太 ㊨小林彌六
- ㊦㊩ 怪童丸 ㊨不詳
- ㊦㊩ 佐倉宗吾 ㊨不詳
- ㊦㊩ 忠臣蔵 ㊨不詳

1916

- ㊦㊩ 柳生十兵衛 ㊨不詳



㊦㊩ マキノ省三と姉・マキノ智子



㊦㊩ 今日活最初のロケ(4歳)



㊦㊩ 「嵐小僧次郎吉」(6歳)



㊦㊩ 高校時代(17歳)



㊦㊩ 快人狼(26)

- ㊦㊩ 木蘭吉五郎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 義士銘名傳・寺坂吉右衛門 ㊨不詳
- ㊦㊩ 八犬傳第一篇・犬山道節 ㊨不詳
- ㊦㊩ 八犬傳第二篇・犬塚信乃 ㊨不詳
- ㊦㊩ 雷門大火・血染の囃 ㊨不詳
- ㊦㊩ 大高源吾 ㊨不詳
- ㊦㊩ 有馬の猫騒動 ㊨不詳
- ㊦㊩ 忠臣蔵 ㊨不詳
- ㊦㊩ 間重次郎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 鬼勘梅吉 ㊨不詳
- ㊦㊩ 松前鉄之助 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 曲垣平九郎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 怪傑鬼童丸 ㊨御嶽鬼童丸 ㊨不詳
- ㊦㊩ 清水次郎長 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 山中鹿之助 ㊨小林彌六
- ㊦㊩ 雪駄直し長五郎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 堀のお梅 ㊨不詳
- ㊦㊩ 河童の猿丸 ㊨不詳

1917

- ㊦㊩ 木下藤吉郎 ㊨小林彌六
- ㊦㊩ 狸穴御殿 ㊨小林彌六
- ㊦㊩ 眞田獅子王丸 ㊨不詳
- ㊦㊩ 二代目児来也 ㊨不詳
- ㊦㊩ 新門の辰五郎 ㊨小林彌六
- ㊦㊩ 天一坊東下り ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 小金井小次郎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 鎌倉百鬼殿 ㊨鎌倉怪鬼殿 ㊨不詳
- ㊦㊩ 唐犬権兵衛 ㊨不詳
- ㊦㊩ 名槍高田又兵衛 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 白虎隊 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 小三金五郎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 伊達の興作 ㊨不詳
- ㊦㊩ 鬼丸花太郎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 假名手本忠臣蔵 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 忠臣長次 ㊨不詳
- ㊦㊩ 島左近 ㊨不詳
- ㊦㊩ 織田伴蔵 ㊨不詳
- ㊦㊩ 名古屋三蔵 ㊨牧野省三

1918

- ㊦㊩ 関白狐名古屋山三 ㊨不詳
- ㊦㊩ 勝田新左衛門 ㊨不詳
- ㊦㊩ 先代萩 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 木内宗吾之傳 ㊨不詳
- ㊦㊩ 忠臣蔵七人いろは ㊨不詳
- ㊦㊩ 山中鹿之助 ㊨小林彌六
- ㊦㊩ 三日月次郎吉 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 荒木又右衛門 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 肥後の駒下駄 ㊨小林彌六

1919

- ㊦㊩ 野狐三次 ㊨不詳
- ㊦㊩ 勢力富五郎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 道中膝栗毛・前篇 ㊨不詳
- ㊦㊩ 水戸黄門・第三篇 ㊨不詳
- ㊦㊩ 伊達大騒動 ㊨不詳

- ㊦㊩ 霧隠才藏 ㊨不詳
- ㊦㊩ 出世太閤日吉丸 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 毛谷村六助 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 忠孝の亀鑑・小楠公 ㊨金森万象

1920

- ㊦㊩ 眞田三代記第一篇・幸村の巻 ㊨不詳
- ㊦㊩ 眞田大助 ㊨眞田三代記第二篇 ㊨不詳
- ㊦㊩ 石童丸 ㊨不詳
- ㊦㊩ 一條藏卿 ㊨平家物語 ㊨牧野省三 ㊨市川姉蔵
- ㊦㊩ 岩見重太郎・前篇 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 小笠原隼人 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 天狗夜話 ㊨牧野省三

1921

- ㊦㊩ 野狐三次 ㊨不詳
- ㊦㊩ 怪風傳・清水冠者義高 ㊨不詳
- ㊦㊩ 豪傑児雷也 ㊨牧野省三
- ㊦㊩ 加賀騒動 ㊨加賀の龍虎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 関白秀次 ㊨不詳
- ㊦㊩ 忠臣蔵 ㊨牧野省三 ㊨尾上松之介
- ㊦㊩ 三日月次郎吉 ㊨不詳
- ㊦㊩ 鶴鳥猫騒動 ㊨佐賀猫騒動 ㊨不詳
- ㊦㊩ 佐倉宗五郎 ㊨不詳
- ㊦㊩ 孝子養老 ㊨マキノ省三 ㊨内田吐夢
- ㊦㊩ 十字路 ㊨不詳 ㊨内田吐夢
- ㊦㊩ 小さな勝利者 ㊨國際与太平

1922

- ㊦㊩ 黄金の虎 ㊨マキノ省三
- ㊦㊩ 實録忠臣蔵 ㊨マキノ省三
- ㊦㊩ 人は人道 ㊨マキノ省三

1925

- ㊦㊩ 白虎隊 ㊨マキノ省三 ㊨勝見正義
- ㊦㊩ 鎌倉 ㊨マキノ省三
- ㊦㊩ 義士と俠客 ㊨マキノ省三
- ㊦㊩ エキストラガール ㊨牧野省三 ㊨山根幹人

1926

- ㊦㊩ 喧嘩日記 ㊨井上金太郎
- ㊦㊩ 快人狼・前編 ㊨富澤進郎
- ㊦㊩ 修羅八荒・第一篇 ㊨二川文太郎 ㊨勝見正義
- ㊦㊩ 修羅八荒・第二篇 ㊨マキノ省三 ㊨二川文太郎 ㊨他
- ㊦㊩ 快人狼・中篇後篇 ㊨富澤進郎
- ㊦㊩ 修羅八荒・第三篇 ㊨マキノ省三 ㊨二川文太郎
- ㊦㊩ 卒業と青春 ㊨井上金太郎
- ㊦㊩ 討たる、兄弟 ㊨沼田紅緑
- ㊦㊩ 夕陽の沈むころ ㊨富澤進郎
- ㊦㊩ 新國情話春雨草紙・千代香の巻 ㊨金森万象
- ㊦㊩ 精土 ㊨マキノ省三 ㊨人見吉之助
- ㊦㊩ 土塊を焼く町 ㊨富澤進郎
- ㊦㊩ 奮闘児 ㊨富澤進郎
- ㊦㊩ 修羅八荒・解決篇 ㊨マキノ省三 ㊨沼田紅緑
- ㊦㊩ 大江戸の丑時 ㊨マキノ省三 ㊨
- ㊦㊩ ヴァイオレットのお傳 ㊨高見貞術
- ㊦㊩ 青い眼の人形 ㊨松尾文人 ㊨荒木忍
- ㊦㊩ 浪人地獄 ㊨高見貞術



㊦㊩ 合集(27)



㊦㊩ 九討野郎情録(28)



㊦㊩ 嵐(28)



㊦㊩ キネ旬ベスト・ワン受賞記念(28)



㊦㊩ 首の座(29)

- ㊦㊩ 暗黒の街 ㊨高見貞術
- ㊦㊩ メリケン物語 ㊨富澤進郎

1927

- ㊦㊩ 狼火 ㊨金森万象
- ㊦㊩ 謎の一夜 ㊨杉野狂児 ㊨マキノ正博
- ㊦㊩ 週刊苦行 ㊨杉野狂児
- ㊦㊩ 単・前篇 ㊨高見貞術
- ㊦㊩ 学生五人組・発端篇 ㊨富澤進郎
- ㊦㊩ 学生五人組・爛漫篇 ㊨杉野狂児
- ㊦㊩ 人間屑 ㊨勝見正義
- ㊦㊩ 単・後篇 ㊨高見貞術
- ㊦㊩ いろは假名四谷怪談・前篇 ㊨井上金太郎
- ㊦㊩ 学生五人組・暗黒篇 ㊨津村博
- ㊦㊩ 散残者 ㊨高見貞術
- ㊦㊩ 鍵穴 ㊨杉野狂児
- ㊦㊩ 学生五人組・飛躍篇 ㊨東郷久義
- ㊦㊩ 欠金 ㊨金森万象
- ㊦㊩ 朝やけ小自棄 ㊨井上金太郎
- ㊦㊩ 青春を掴まされたとられた話 ㊨杉野狂児 ㊨マキノ正博
- ㊦㊩ 妖婦 ㊨鈴木澄子 ㊨武井龍三
- ㊦㊩ 新生の妻・前後篇 ㊨高見貞術
- ㊦㊩ 花唇・八笑人 ㊨杉野狂児 ㊨玉木潤一郎
- ㊦㊩ 光線を描いた男 ㊨小石栄一
- ㊦㊩ 愛 ㊨かな ㊨しき枝 ㊨杉野狂児
- ㊦㊩ 燃ゆる花片 ㊨はなびら ㊨マキノ智子

1928

- ㊦㊩ 神州天馬峽・第一篇 ㊨曾根純三
- ㊦㊩ 雪の夜話 ㊨井上金太郎
- ㊦㊩ 實録忠臣蔵 ㊨マキノ省三
- ㊦㊩ 仇討殉情録 ㊨マキノ智子 ㊨マキノ正博
- ㊦㊩ 闇者 ㊨金森万象
- ㊦㊩ 嵐 ㊨金森万象
- ㊦㊩ 鐵合鷄 ㊨南光明 ㊨松浦築枝
- ㊦㊩ 雷電 ㊨マキノ省三 ㊨松田定次
- ㊦㊩ 毒華 ㊨どくげ ㊨南光明
- ㊦㊩ 浪人街第一話・美しき獲物 ㊨南光明 ㊨谷崎十郎
- ㊦㊩ 崇禪寺馬場 ㊨南光明 ㊨松浦築枝 ㊨高木新平
- ㊦㊩ 浪人街第二話・楽屋風呂 ㊨南光明 ㊨根岸東一郎

1929

- ㊦㊩ 浪人街第二話・楽屋風呂解決篇 ㊨南光明 ㊨津村博
- ㊦㊩ 大化新政 共同 ㊨二川文太郎 ㊨金森万象 ㊨他
- ㊦㊩ 瀧火喜多・第三篇 ㊨根岸東一郎 ㊨阪東三右衛門
- ㊦㊩ 戻橋 ㊨マキノ智子 ㊨南光明
- ㊦㊩ 首の座 ㊨谷崎十郎 ㊨河津清三郎 ㊨櫻木梅子
- ㊦㊩ 荒木又右衛門・全五篇 ㊨南光明 ㊨マキノ智子
- ㊦㊩ 浪人街第三話・憑かれた人々 ㊨澤村國太郎

1930

- ㊦㊩ 運命線上に躍る人々 共同 ㊨久保為義 ㊨藤澤四郎
- ㊦㊩ 草に祈る 共同 ㊨阪田重則 ㊨三上良二 ㊨津村博
- ㊦㊩ 偽婚真婚 ㊨秋田伸一
- ㊦㊩ 学生三代記・明治時代 共同 ㊨久保為義 ㊨他
- ㊦㊩ 学生三代記・昭和時代 共同 ㊨川浪良太 ㊨他
- ㊦㊩ 腹の立つ忠臣蔵 ㊨中根龍太郎 ㊨河津清三郎
- ㊦㊩ 嬰兒殺し 共同 ㊨久保為義 ㊨マキノ智子

- ◎紅燈一代女 共同国久保為義馬マキノ智子
- ◎伏魔三人女・お葉の巻／お良の巻／幾松の巻
- ◎幕末風雲録・堀新兵衛の巻／新門辰五郎の巻／清水次郎長の巻 共同国相葉文見／久保為義馬市川米十郎

1931

- ◎マキノ大行進曲
- ◎赤袴安兵衛 田小金井勝／南光明
- ◎びんころ長次 田マキノ登六／泉明子／松葉扶美子
- ◎浪人太平記 田南光明／マキノ智子
- ◎泥だらけの天使 田林喜美枝／泉明子

1932

- ◎喧嘩道中記 田嵐幸三郎／マキノ登六／鈴木京子
- ◎二番手赤穂浪士 田市川米十郎／鈴木京子
- ◎黎明 田マキノ智子／南光明
- ◎七人の花嫁 田澤村國太郎
- ◎平十郎小判 田澤村國太郎
- ◎白夜の饗宴 田片岡千恵蔵／山田五十鈴

1933

- ◎燃ゆる花片〈はなびら〉 田マキノ智子
- ◎岩見重太郎 田杉山昌三九／澤村國太郎

1934

- ◎泡立つビール〈泡立つ青春〉 ※PR映画
- ◎さくら音頭 共同国渡邊邦男

1935

- ◎春霞八百八町 田嵐寛寿郎／マキノ智子
- ◎活人剣荒木又右衛門 田嵐寛寿郎
- ◎江戸斬鼠小僧 共同国久保為義馬澤村國太郎／原駒子

1936

- ◎花の春遠山櫻 田月形龍之介／中野英治／澤村國太郎
- ◎白波五人男 共同国久保為義馬月形龍之介／原駒子
- ◎最後の土曜日 共同国田丸重雄田中野英治／山泉直代
- ◎国定忠治・信州子守唄 共同国久保為義馬月形龍之介
- ◎丹下左膳・乾雲必殺の巻 田月形龍之介／原駒子
- ◎丹下左膳・坤龍呪縛の巻 田月形龍之介／原駒子
- ◎恋慕の砦 田原駒子／澤村國太郎
- ◎次郎長裸旅 田葉山純之輔／原駒子
- ◎三下剣法 共同国久保為義馬根岸東一郎田國太郎
- ◎加賀見山 田原駒子／松浦築枝
- ◎彌太郎傘・前篇 共同国松田定次田澤村國太郎
- ◎平假名恋愛帖 共同国根岸東一郎田水原蛟一郎
- ◎江戸の花和尚 田澤村國太郎／大久保清子
- ◎修羅八荒・前篇 田葉山純之輔／原駒子
- ◎修羅八荒・第二篇 共同国久保為義馬葉山純之輔
- ◎修羅八荒・後篇 共同國中川信夫田葉山純之輔
- ◎八州侠客陣 共同国廣瀬五郎／根岸東一郎田大内弘
- ◎怪盗探偵 田大内弘／田村邦男／大倉千代子
- ◎喧嘩大名神 田澤村國太郎／原駒子
- ◎流れ雲三度笠 田大内弘／月澄江
- ◎忠治血笑記 共同国久保為義馬葉山純之輔／原駒子
- ◎忍術猛獣探偵 田國徳磨／光岡龍三郎
- ◎決戦荒神山 田澤村國太郎／原駒子
- ◎舞扇 共同国廣瀬五郎田大倉千代子／志村喬
- ◎ごろんぼ持 共同国根岸東一郎田澤村國太郎／千代子



◎忠臣蔵前篇・天の巻(38)



◎江戸の悪太郎(39)



◎清水港(39)



◎阿波の踊り子(41)



◎待つて居た男(42)

- ◎忠烈内陣三勇士 田志村喬／水原蛟一郎
- ◎忠治活殺剣 共同国久保為義馬清水英太郎
- ◎赤垣源藏徳利の別れ 田澤村國太郎／松浦築枝
- ◎初鷲権音頭 田澤村國太郎／志村喬／大倉千代子

1937

- ◎妖術白鍵変化 田原駒子／葉山純之輔
- ◎青春五人男・前篇 田田村邦男／マキノ博子
- ◎青春五人男・後篇 田田村邦男／椿三四郎
- ◎女左膳・妖火の巻 共同國中川信夫田葉山純之輔
- ◎女左膳・魔剣の巻 共同國中川信夫田葉山純之輔
- ◎喧嘩苦藪 田清水英太郎／大倉千代子
- ◎花婿百萬石 田田村邦男／大久保清子／葉山純之輔
- ◎遊侠太平記 田澤村國太郎／久松三津枝
- ◎恋山彦・風雲の巻 田阪東妻三郎／澤村國太郎
- ◎恋山彦・怒濤の巻 田阪東妻三郎／澤村國太郎
- ◎妖蝶傳・前篇 田月形龍之介／大倉千代子
- ◎国定忠治 田阪東妻三郎
- ◎江戸の荒鷲 田片岡千恵蔵／轟夕起子
- ◎自來也 田片岡千恵蔵
- ◎血煙高田馬場 共同国前田浩田阪東妻三郎

1938

- ◎江戸の花和尚 田片岡千恵蔵／澤村國太郎
- ◎鴛鴦道中 田片岡千恵蔵
- ◎鞍馬天狗・角兵衛獅子の巻 共同国松田定次田嵐寛寿郎
- ◎忠臣蔵前篇・天の巻 共同国池田富保田片岡千恵蔵
- ◎忠治子守唄 田阪東妻三郎／市川春代
- ◎新撰組 田月形龍之介／市川春代
- ◎燃ゆる黎明 田片岡千恵蔵／轟夕起子
- ◎彌次喜多道中記 田片岡千恵蔵／杉狂児

1939

- ◎浮名小路 田轟夕起子／原健作
- ◎袈裟と盛遠 共同国相澤浩田嵐寛寿郎／轟夕起子
- ◎江戸の悪太郎 田嵐寛寿郎／轟夕起子
- ◎浪人街 田月形龍之介／澤村國太郎／轟夕起子
- ◎清水港 田片岡千恵蔵／市川春代／月形龍之介
- ◎鴛鴦歌合戦 田ディック・ミネ／片岡千恵蔵／志村喬
- ◎彌次喜多・名君初上り 田片岡千恵蔵／澤村國太郎

1940

- ◎續清水港 田片岡千恵蔵／轟夕起子／廣澤虎造
- ◎織田信長 田片岡千恵蔵／宮城千賀子
- ◎昨日消えた男 田長谷川一夫／山田五十鈴／高峰秀子

1941

- ◎長谷川・ロッパの家光と彦左 田長谷川一夫／ロッパ
- ◎阿波の踊り子 田長谷川一夫／入江たか子／高峰秀子
- ◎世紀は笑ふ 田杉狂児／廣澤虎造／轟夕起子
- ◎男の花道 田長谷川一夫／古川ロッパ

1942

- ◎待つて居た男 田長谷川一夫／山田五十鈴／榎本健一
- ◎婦系圖 田長谷川一夫／山田五十鈴／古川ロッパ
- ◎續婦系圖 田長谷川一夫／山田五十鈴／古川ロッパ
- ◎阿片戦争 田市川猿之助／原駒子／高峰秀子／清三郎
- ◎ハナ子さん 田轟夕起子／灰田勝彦／高峰秀子

1943

- ◎勸進帳 田松本幸四郎／市村羽左衛門／尾上菊五郎

- ◎坊ちゃん土俵入り 共同国並木鏡太郎田佐分利信
- ◎不沈艦沈没 田井上正夫／小沢栄

1944

- ◎野戦軍楽隊 田上原謙／佐分利信／佐野周二／李香蘭
- ◎必勝歌 共同国溝口健二／清水宏／小杉勇田高田浩吉

1945

- ◎千日前附近 田小杉勇／佐分利信
- ◎グランド・ショー一九四六年 田高峰三枝子

1946

- ◎妙な風来坊 田佐野周二／山内明／笠智衆／廣澤虎造
- ◎待ちぼうけの女 田高峰三枝子／小杉勇／佐野周二
- ◎のんきな父さん 田小杉勇／轟夕起子／灰田勝彦
- ◎満月城の歌合戦 田轟夕起子／月丘夢路／藤山一郎

1947

- ◎非常線 田轟夕起子／月丘千秋／楠かほる／道太郎
- ◎淑女とサーカス 田轟夕起子／水島道太郎
- ◎愉快な仲間 田原保美／月丘夢路／大河内傳次郎
- ◎金色夜叉・前篇 田上原謙／轟夕起子／木暮実千代
- ◎金色夜叉・後篇 田上原謙／轟夕起子／木暮実千代

1948

- ◎肉体の門 共同国小崎政秀田轟夕起子／月丘千秋
- ◎幽霊囃しに死す 田長谷川一夫／轟夕起子
- ◎ボス 共同国小杉勇田若原雅夫／轟夕起子／加東大介
- ◎懸崖江戸へ行く 田大河内傳次郎／嵐寛寿郎

1949

- ◎佐平次捕物控・紫頭巾 田阪東妻三郎／大河内傳次郎
- ◎佐平次捕物控・紫頭巾解決篇 田阪東妻三郎／大河内

1950

- ◎傷だらけの男 田長谷川一夫／古川ロッパ
- ◎熊谷陣屋 田中村吉右衛門(歌舞伎の記録映画)
- ◎寺小屋 田中村吉右衛門(歌舞伎の記録映画)
- ◎殺陣師段平 田山田五十鈴／月形龍之介／右太衛門
- ◎レ・ミゼラブル第二部 神と自由の旗 田早川雪洲
- ◎千石圃 共同国松田定次／萩原遼田片岡千恵蔵／市川
- ◎女賊と判官 共同国松田定次／萩原遼田片岡千恵蔵

1951

- ◎お艶殺し 田山田五十鈴／市川右太衛門
- ◎豪快三人男 田片岡千恵蔵／市川右太衛門／龍之介
- ◎酔いどれ八萬騎 田月形龍之介／宮城千賀子
- ◎神戸銀次郎 田片岡千恵蔵／市川右太衛門

1952

- ◎おかる助平 田越路吹雪／榎本健一
- ◎浮雲日記 田重光彰／宮城千賀子／花柳小菊
- ◎やぐら太鼓 田二本柳寛／千代の山／羽黒山
- ◎離婚 田木暮実千代／田崎潤／佐分利信
- ◎すっ飛び駕籠 田大河内傳次郎／三浦光子／弥太郎
- ◎武蔵と小次郎 田辰巳柳太郎／島田正吾／淡島千景
- ◎彌太郎笠・前後篇 田鶴田浩二／岸恵子
- ◎次郎長三國志・第一部 次郎長賣出す 田小堀明男
- ◎次郎長三國志・第二部 次郎長初旅 田河津清三郎
- ◎ハワイの夜 共同国松林宗恵田鶴田浩二／岸恵子

1953

- ◎抱擁 田山口淑子／三船敏郎
- ◎次郎長三國志・第三部 次郎長と石松 田森繁久彌



◎殺陣師段平(50)



◎酔いどれ八萬騎(51)



◎抱擁(53)



◎純情部隊(56)



◎非常線(58)

- ◎次郎長三國志・第四部 勢揃い清水港 田加東大介
- ◎丹下左膳 田大河内傳次郎／水戸光子／澤村國太郎
- ◎續・丹下左膳 田大河内傳次郎／水戸光子／田中春男
- ◎次郎長三國志・第五部 隠込み甲州路 田小堀明男
- ◎次郎長三國志・第六部 旅がらす次郎長一家 田山本廉
- ◎次郎長三國志・第七部 初祝い清水港 田長門裕之

1954

- ◎美しき鷹 田越路吹雪
- ◎御いいき六花撰・素っ飛び男 田河津清三郎
- ◎次郎長三國志・第八部 海道一の暴れん坊 田森繁久彌
- ◎やくざ囃子 田鶴田浩二／岡田茉莉子
- ◎次郎長三國志・第九部 荒神山 田若原雅夫／千秋実
- ◎此村大吉 田鶴田浩二／久慈あさみ
- ◎人形佐七捕物帖・めくら狼 田小泉博／嵯峨三智子

1955

- ◎次郎長遊侠伝・秋葉の火祭り 田河津清三郎／三枝
- ◎次郎長遊侠伝・天城鶴 田河津清三郎／森繁久彌
- ◎りゃんこの弥太郎 田小泉博／藤間紫／河津清三郎
- ◎赤城の血祭 田島崎雪子／北上弥太郎／池内淳子
- ◎朝やけ血戦場 田大坂志郎／北原三枝／河津清三郎
- ◎人生とんぼ返り 田森繁久彌／山田五十鈴／左幸子
- ◎丹下左膳・乾雲の巻 田水島道太郎／南田洋子／夢路

1956

- ◎丹下左膳・坤龍の巻 田水島道太郎／南田洋子
- ◎丹下左膳・完結篇 田水島道太郎／南田洋子
- ◎恐怖の逃亡 田室田明／安西郷子／中田康子
- ◎遠山金さん捕物控・影に居た男 田中村扇雀
- ◎純情部隊 田力道山／東千代之介／月丘千秋

1957

- ◎仇討崇禎寺馬場 田大友柳太朗／千原しのぶ
- ◎浪人街 田近衛十四郎／河津清三郎／藤田進
- ◎阿波おどり・鳴門の海賊 田大友柳太朗／千原しのぶ
- ◎一本刀土俵入 田加東大介／越路吹雪
- ◎おしどり駕籠 田中村錦之助／美空ひばり

1958

- ◎非常線 田高倉健／藤田進／岡田英次
- ◎不敵なる反抗 田中村賀津雄／岡田英次／故里やよい
- ◎清水港の名物男・遠州森の石松 田中村錦之助
- ◎捨てうり勘兵衛 田大友柳太朗／大川恵子
- ◎喧嘩笠 田大川橋蔵／大川恵子

1959

- ◎鞍馬天狗 田美空ひばり／東千代之介
- ◎たつまき奉行 田片岡千恵蔵／東千代之介
- ◎恋山彦 田大川橋蔵／大川恵子／丘さとみ
- ◎江戸の悪太郎 田大友柳太朗／大川恵子
- ◎雪之丞変化 田大川橋蔵／淡島千景／大川恵子

1960

- ◎弥太郎笠 田中村錦之助／丘さとみ
- ◎天保六花撰・地獄の花道 田市川右太衛門／淡島千景
- ◎清水港に来た男 田大川橋蔵／丘さとみ／堺駿二
- ◎神田祭り喧嘩笠 田里見浩太郎／大川恵子
- ◎若き日の次郎長・東海の顔役 田中村錦之助

1961

- ◎江戸っ子肌 田大川橋蔵／淡島千景／桜町弘子

- ◎月形半平太 回大川橋蔵/丘さとみ
- ◎東海一の若親分 回中村錦之助/水島道太郎
- ◎江戸っ子繁昌記 回中村錦之助/小林千登勢
- ◎港祭りに来た男 回大友柳太朗/丘さとみ
- ◎若き日の次郎長・東海道をつむじ風 回中村錦之助

1962

- ◎千姫と秀頼 回美空ひばり/高倉健/中村錦之助
- ◎崎嶇のやくざ判官 回大川橋蔵/丘さとみ
- ◎次郎長と小天狗・殴り込み甲州路 回北大路欣也
- ◎大暴れ五十三次 回北大路欣也/松方弘樹

1963

- ◎いれずみ半太郎 回大川橋蔵/丘さとみ
- ◎八州遊侠伝・男の盃 回片岡千恵蔵/千葉真一
- ◎九ちゃん刀を抜いて 回坂本九/南田洋子

1964

- ◎次郎長三国志 回鶴田浩二/佐久間良子/田中春男
- ◎続・次郎長三国志 回鶴田浩二/長門裕之/丘さとみ
- ◎日本侠客伝 回高倉健/中村錦之助
- ◎次郎長三国志・第三部 回鶴田浩二/里見浩太郎
- ◎日本侠客伝・浪花篇 回高倉健/藤山寛美

1965

- ◎色ごと師春団治 回藤山寛美
- ◎蝶々雄二の夫婦善哉 回ミヤコ蝶々/南都雄二
- ◎日本侠客伝・関東篇 回高倉健/南田洋子
- ◎次郎長三国志・甲州路殴り込み 回鶴田浩二
- ◎任侠男一匹 回村田英雄/鶴田浩二

1966

- ◎日本侠客伝・血闘神田祭 回高倉健/藤純子
- ◎日本大俠客 回鶴田浩二/藤純子
- ◎日本侠客伝・雷門の決斗 回高倉健/藤純子
- ◎男の顔は切り札 回安藤昇

1967

- ◎日本侠客伝・白刃の盃 回高倉健/藤純子/伴淳三郎
- ◎昭和残侠伝・血染の唐獅子 回高倉健/藤純子
- ◎日本侠客伝・斬り込み 回高倉健/藤純子



◎九ちゃん刀を抜いて(63)



◎色ごと師春団治(65)



◎日本侠客伝・白刃の盃(67)

- ◎決闘一代 回高倉健/藤純子
- 1968
- ◎日本侠客伝・絶縁状 回高倉健/松尾嘉代/藤山寛美
- ◎侠客列伝 回高倉健/鶴田浩二/若山富三郎
- ◎ごろつき 回高倉健/吉村美子/菅原文太
- ◎新・網走番外地 回高倉健/三橋達也/松尾嘉代

- 1969
- ◎昭和残侠伝・唐獅子仁義 回高倉健/藤純子/池部良
- ◎日本侠客伝・花と龍 回高倉健/星由里子/藤純子
- ◎日本残侠伝 回高橋英樹
- ◎悪名一番勝負 回勝新太郎/江波杏子/安田道代
- ◎女組長 回江波杏子/山田五十鈴
- ◎牡丹と竜 回高橋英樹/和泉雅子

- 1970
- ◎玄海遊侠伝・破れかぶれ 回勝新太郎/安田道代
- ◎昭和残侠伝・死んで貰います 回高倉健/藤純子
- 1971
- ◎日本やくざ伝・総長への道 回高倉健/鶴田浩二
- ◎関東耕桜一家 回藤純子/片岡千恵蔵

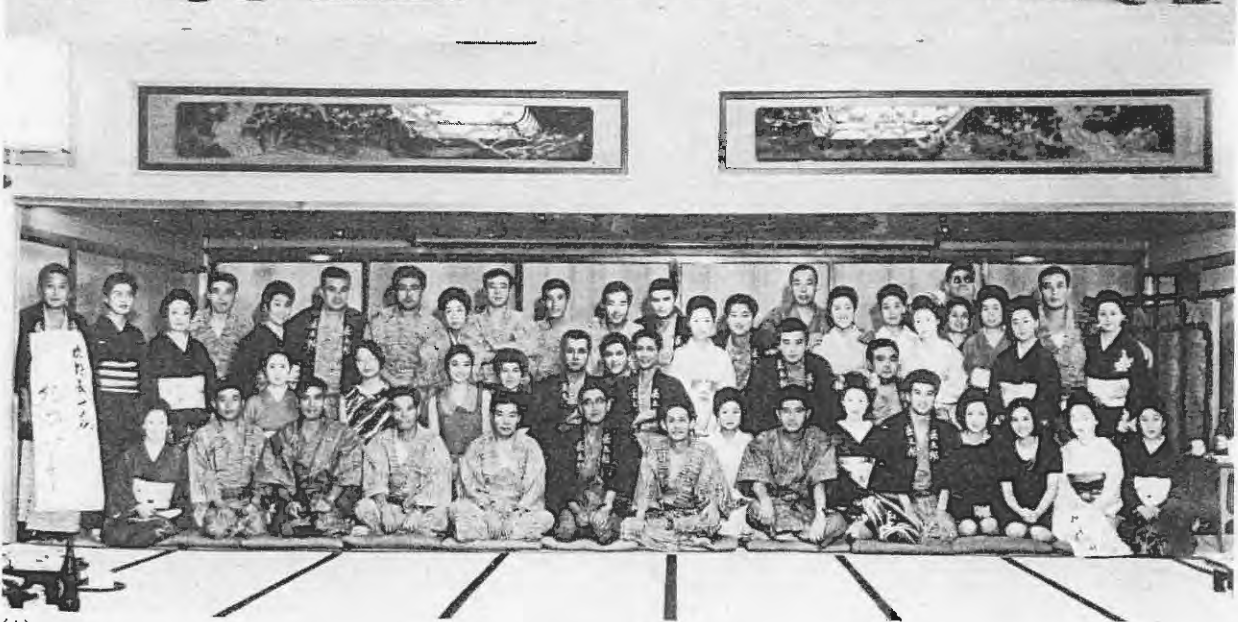
テレビ作品

- '58 天城の宿 (NTV) 原作=「国定忠治」※生放送
- '63 王将物語 (日本電映=NTV) ※藤純子の演出補佐
- '65 竜馬がゆく (NET) ※製作協力
- '66 青雲五人男 (NTV) ※演出
- '68 カツドウ屋一代(人間プロ=毎日放送)※原作・演出
- '72~'73 長谷川伸シリーズ(NET) ※「暗闇の丑松」
「刺青奇伝」の演出
- '73 旅の異三郎(三船プロ=東京12チャンネル)※第1・
2話の演出
- '73 たけくらべ (CBC=TBS) ※演出
- '73 女・その愛シリーズ(NET) ※「婦系図」「歌行燈」
の演出
- '75 マチャアキの森の石松 (NET) ※脚本・演出

マキノ雅裕フィルモグラフィ◎びあ編

- 資料・写真提供
松竹/東宝/東映
にっかつ/大映/スタジオ蜂琳
無声映画鑑賞会/株マツダ映画社
劇川喜多記念映画文化財団
平凡社「映画渡世・天の巻/地の巻」

発行日●1985年5月31日
 発行所●びあ株式会社 ©1985
 〒102 東京都千代田区麹町2-5 ☎03(261)9111<大代表>
 編集人●西村 隆
 発行人●矢内 廣
 企画・編集●株式会社翔ブラザーズ
 (橋倉正信、小坂岳史、金澤 誠)
 デザイン●小村るみ
 進行●武藤起一
 印刷●テンプリント株式会社



(上)27年当時のマキノ・スター勢揃い (中)64年「日本侠客伝」打ち上げ (下)64年「次郎長三国志」打ち上げ